

戦争体験と平和への想い



中学校・一般版

「戦争体験と平和への想い」

中学校・一般版

はじめに

人吉市では、終戦後六十五年を経過した今、戦争体験者の高齢化とともに、戦争を知らない世代が増加しています。戦争の悲惨さを風化させないために、戦争を実体験された方々から貴重な体験談をお聞かせいただいて、記録に残し、後世へ語り継いでいくために、昨年度から「戦争体験と平和への想い緊急調査事業」を進めてまいりました。

聞取りの中では、苦しみに耐えてこられた当時の状況や、とてもつらかった当時の思いが蘇った方もおられたことと思います。しかし、二度と起こしてはならない戦争の悲惨さを、後世に伝えていかなければという想いで、このような貴重なお話をお聞かせいただきました。世界では、今この時も紛争が絶えず、罪のない子どもたちまで亡くなっている状況があります。戦争によってもたらされるものでいいものは、何ひとつありません。

ぜひ、この本を読んで、戦争の悲惨さを感じていただき、二度とあのような惨事を起こさないよう胸に刻んでいただきたいと思います。

私たち一人ひとりが戦争のない世界を願い、他人を気づかいながら平和で豊かな生活を築いていきましょう。

最後に、今回、戦時中の体験を語っていただきました方々に対しまして、心から感謝とお礼を申し上げます。

平成二十三年三月

人吉市長 田 中 信 孝

目次

訓練も受けないまま第一線に		愛 甲 数 馬	1
母の愛が支えた引き揚げ体験		伊 久 美 寛 志	3
いただいた命で笑い声の絶えない人生を		岩 本 泰 典	6
終戦直後の混乱と食糧難		大 園 武 義	9
食糧難の中で働いた日々		大 竹 チ ヲ カ	12
フィリピンの中生活を経て帰国		尾 崎 正 行	15
台湾から命からがら引き揚げる		木 原 和 恵	22
シベリアで過酷な労働に耐える		木 本 敏 雄	26
夫の戦死後、子ども三人を育てる		黒 木 イ ト ノ	30
敗戦後、国民の必死の働きで復興した日本		佐 無 田 穆	34
分散教育と防空壕掘り		白 濱 陽 三	43
二度としてはいけない戦争		瀬 戸 致 行	46

奉仕作業と学徒動員の女学校時代		田中	キクエ	50
卒業式の当日に受けた空襲		田山	尚	53
忘れられない悲惨な東京大空襲		田山	光則	58
武器も食料も薬もなく歩き続けた戦場		築地	堅	65
空襲警報で駆け付けた学校		築地	美津子	70
国民の心をスタスタにした戦争		土屋	歳明	74
勉強や進学もかなわなかった戦時下		津茂谷	マサ子	77
父の戦死後、母子二人で懸命に生きる		徳田	清則	84
終戦前後にソ連の収容所へ		那須	信敏	86
動員学徒で県外の飛行機製作工場へ		西峯	多木次	89
軍国主義の下、受けられなかった授業		野中	藤夫	92
三十六歳で召集された父の無念な死		濱口	敏行	97
飛行機組み立てで過ごした五カ月		林田	典子	101
日本を守った先人を忘れずに		早田	亮彦	104

学徒動員先で病気になり帰宅		春口	照代	107
弱音を吐かず戦後を乗り越えた母		東	和子	110
佐世保の海兵団で受けた厳しい訓練		東	一穂	113
軍人の父を亡くし必死で働く		深水	和子	116
南方で戦死した夫と弟		前田	ゆか志	119
下益城の開拓団で満州へ		丸田	ヤエ子	122
旧ソ連収容所で過酷な抑留経験		丸目	光喜	124
戦争で暮らしが一変、家業を手伝う		三倉	重成	130
三カ月の結婚生活。待ち続けた戦後		溝下	榮子	133
戦前・戦後の苦難を経験して		蓑毛	英一郎	137
厳しい食糧事情で運動場も畑に		三原	重信	140
三度の召集で戦地を転戦		宮崎	繁	144
戦傷を負っても懸命に生きた夫		宗村	香	147
戦争への思い綴った三通の手紙		村上	和男	151



敵機来襲
空襲警報発令の時。防空壕の中。耳と目を手でふさぎ、尻を上げて腹を上げて、ひざを曲げうつ伏せっている様子。

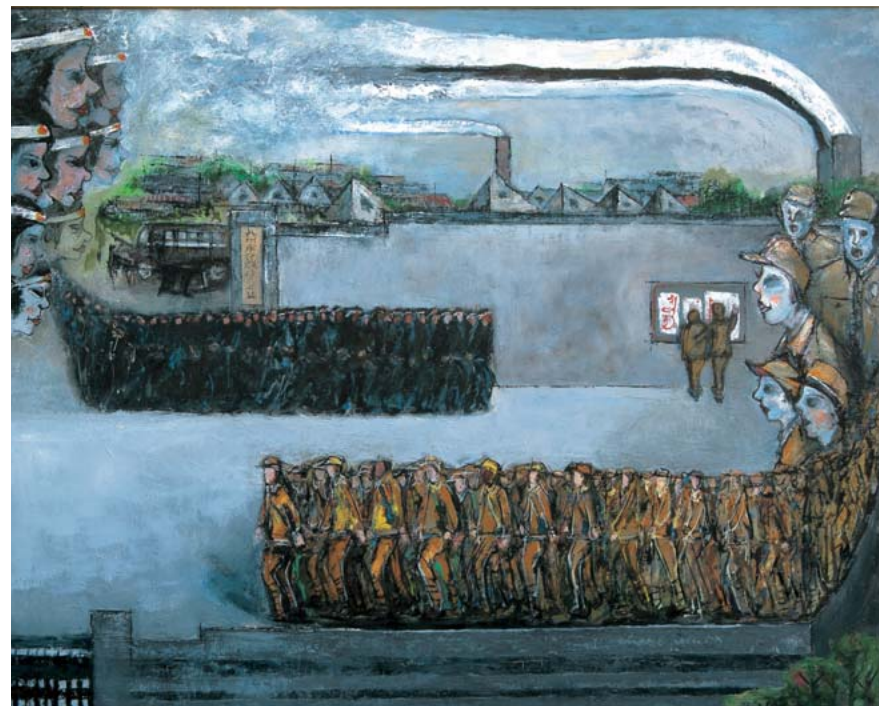
「動員学徒追想画
～その時私は中学三年生でした」より

西峯多木次

主計士官として軍事物資を管理		村田泉	155
兵士、機関士として戦争を体験		元田袈見	159
戦争に翻弄された青春		山田次男	162
悲惨だった戦時下の教育		山中朋子	174
教師として戦前・戦後を生きる		山本ヒサ	178
来た道、これからの行く道		山本泰弘	181
心を大切に人を大切にして生きよう		横川克己	186
様々な工夫をした戦時下の生活		吉澤テル	189
戦争は今でもゾツとする体験		吉田政人	191
球磨川べりで機銃掃射に遭う		吉村惣四郎	194



藤の花



勤労働員交代の朝



大村工場
うしろは工場の爆撃による火災による赤。
その頃私たちは、戦闘機の部品作りのための基礎錬をしていた。



しょうろう流し



リュック背負って面会に

リュックは帯の芯で作った。着物をもんぺにする。自分の部落で親が寄って話し合っ、今度は誰が行くと決めて、日曜日に来てくれた。人吉を夜行で発ち、博多に到着く列車に乗って。



死者への哀悼

S19.10.25 日 B29 が7、8機やってきて大空襲をうけ、工場は火の海となり、御船中と、宇土中の生徒十数名の死者が出た。



部屋長集合

個人に送ってきた差し入れは没収される。そして皆にわけ与えるため、先生が部屋長を集めて目の前で一つずつ分け与える。それらを部屋にもって帰ってわけてやる。あまり送ってこないところもあった。



日曜日の思い出

食堂にカライモなど売ってあった。並んで買い、食べると次の食堂に並んだ。家からもってきたお金は、内ポケットにぬいつけた腹巻の中にあった。工場で働いたお金はもらったことはなかった。面会の時、母がある食堂に話をたのんで、もらってきた米を炊いてもらうことができるようになった。夜フロに行く時間に行って食べた。私の食料基地。



ひもじい 腹いっぱい食べたい
 弁当をゆすると空くので、朝ごはんを残しておいてそれに飯をつめた。昼のも残して夕食に食べた。
 ひもじい。腹がへった。やまもりのごはんに、魚やいもや野菜や果物を腹いっぱい食べたい！！こんな思いの毎日だった。育ち盛りの我々には堪えねばならない、つらい試練だった。



町の風呂屋で
 週二回、町の風呂屋に行く。
 同じ浴そうで海軍と入るが、我々はいもこじである。夕食後、いっせいに入って、時間で交代させられた。



鍛冶屋

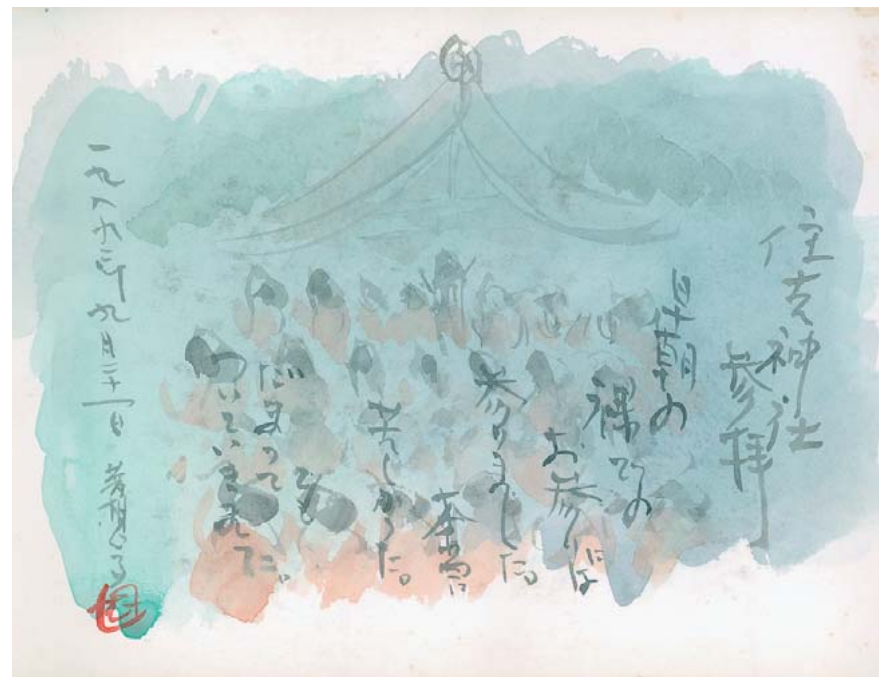
私の実家が鍛冶屋だったせいか、鍛冶屋の募集があって申し出たら、私と江口君が選ばれた。

冬は火があり暖かい。

鉄を入れてナマスところ。

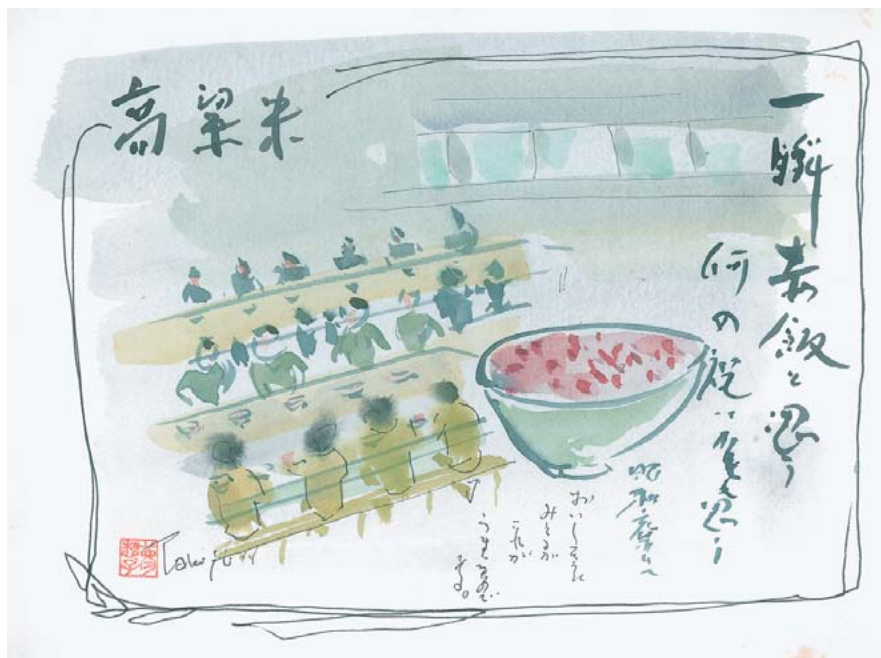
職員が2人おられ、その人たちがいい人達だった。

鉄板をやいて、弁当に水を入れて米をのせておくとごはんができる。それを食べさせてくれた。



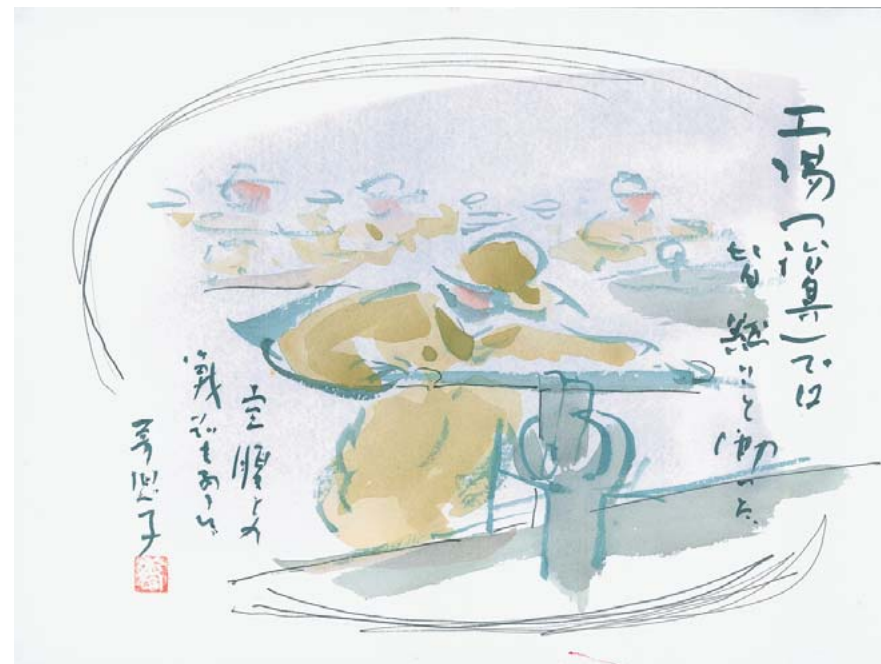
早朝裸での神社参拝

校長先生が神主さんだったことで、朝めし前に2K位のところにある住吉神社に参らされた。朝暗い内に（6時すぎ）起きて、全員裸で隊を作りかけ足で行った。毎日である。



高粱（こうりゃん）米

ある朝高粱米という赤いごはんがついで並べてあった。赤飯かなと思い、何のお祝いだろうと食堂に行った。が、水気がなくポロポロしておいしいものではなかった。すり切り一杯しか食べられなかった。



工場にて

部品作り
万力でしめてヤスリをかけているところ。
皆黙々と働いた。
空腹との戦いでもあった。



阿久根高女の生徒

工場への道で、時々阿久根高女学校の生徒に会った。女生徒は夜勤の帰り、気合いが入っていた女性にはわが家からもってきたものを食べて、あまりひもじい思いはしなかったそうだ。(後の同級会で聞く)
人吉で同級会をした時、女生徒も来られた。10人位。

訓練も受けないまま第一線に

愛 甲 数 馬

大正九年生（下田代町）

私は大正九年（一九二〇）、藍田村下田代（現人吉市）に七人兄弟の長男として生まれ、昭和十七年（一九四二）二月二十日、北支派遣軍第三十七師団歩兵第二二五連隊に入隊しました。第三十七師団は、昭和十四年（一九三九）三月に編成された陸軍部隊の一つで、五月に中国の塘沽（たんくー）に上陸。中国北部の晋南地方（山東省南部）の警備に就いていました。歩兵連隊は第二二五・第二二六・第二二七の三連隊で、昭和十五年以降、熊本県出身者は第二二五連隊に、宮崎県出身者は第二二六連隊に、鹿児島県出身者は第二二七連隊に補充されたので、第二二五連隊は熊本県出身者が多く郷土色の強い連隊でした。昭和十九年初頭まで晋南地方の防衛や敵の討伐作戦に当たり、その後、中国大陆の北から南にかけて行われた大陸縦断作戦に就き、終戦時には先頭はマレー半島、主力部隊はタイに到着していました。

私は初年兵（入隊して一年以内の兵）訓練などを特に受けることもなく、入隊してそのまま中国に渡り、第一線の勤務に就きました。当時は八路军（中国共産党軍）の討伐が目的とされ、

各地の戦闘に参加しました。昭和十七年八月に一等兵となり、十八年二月に上等兵に。九月には天津の特別警備隊に転属となり、第二二五連隊とは別の指揮下に入りました。特別警備隊は憲兵（軍事警察をつかさどる兵科）とは別組織でしたが、北京や天津で共産党軍を摘発するために各地を巡回し、敵兵がいると思われる集落の探索などに当たりました。

当時の中国は、広い集落全体を土壁で取り巻いて防御する造りになっており、集落と集落はかなり離れていても地下のトンネルでつながっていました。そうした集落に警備活動で行く時は、小銃などは持たず短銃だけを持参。トンネルを発見しても物騒だから中には入らず、どうしても調べる必要がある時は、トンネル内にガスを吹き込んだりすることもありました。疑わしい者を捕らえると、両手を後ろに結びつけて吊り下げたり、仰向けに寝かせて次々と水を飲ませる拷問などで情報を得るやり方を見たことがあります。

昭和二十年八月、伍長に昇進。八月十五日に終戦になったと知っていましたが、所属していた特別警備隊は終戦後も武装解除を行いません。以前と同じく中国共産党軍と対抗するため、中国国民政府軍の軍隊と思われる中国人部隊と一緒に、天津を中心に鉄道や鉄橋の警備に当たっていました。その後、二十一年一月に帰国することになり、武器を返納。二月一日、

長崎県の大村港に上陸して復員しました。

復員してみると留守の間に母親が亡くなり、父親が弟妹の面倒を見ながら農業をしています。家族の世話をすることも急がれたので、復員して二週間後の二月十四日に結婚しました。

母の愛が支えた引き揚げ体験

伊久美 寛 志

昭和八年生（瓦屋町）

私は朝鮮の元山（現北朝鮮）で生まれ、父は朝鮮鉄道に勤めていました。当時、朝鮮は日本が統治していて、国家公務員だった父は四十歳過ぎで年金がつく時に退職。電気工事請負業を始め、事業家としての地位を築きました。昭和二十年九月、私は母、姉、弟と四人でロシア軍から逃げるため南下しました。母がやみ船を手配し、四十人くらいが乗って出港。やみ船といっても木製の帆掛け船で、ちょうど北上してきた枕崎台風の影響で船は大破して水浸しになり、流されて死ぬのを覚悟して、親子四人口で体を結び合いました。

夜が明けて北朝鮮の保安隊に連行され、その後、天理教の道場に収容されました。そこには、

引き揚げ列車に乗る二十一年五月まででしたが、食うや食わずの集団生活に加え、伝染病の発しんチフスが流行。シラミがうつす病気で、わが家も家族全員がかかりました。最初に姉、次に母がかかり、四十度の高熱が一週間ほど続いてゲラゲラと四六時中笑いが続きしました。二人が治った後、私がかかりましたが、母や姉とは異なる症状で、腰が抜けて歩けなくなり、はってトイレに行きました。弟も同じように歩けなくなり、髪も抜け、残った髪は茶色に変色。熱は引き揚げまで続きました。この伝染病で多くの日本人が亡くなりました。

ある日突然、北朝鮮が日本人を追い出し始めました。貨車に乗せられ海岸線を南下する途中で機関車が消え、私たちは置き去りになったのです。そこから私たちは徒歩で南下を始めました。初めは四、五十人の集団でしたが、十数名に分かれ人目につかないよう夜、歩いて避難しました。ある時、「こっちに来いよ」と声がして行ってみると丸裸にされた、という人もいました。母は病み上がりの弟をおぶって歩き、食うや食わずで野宿する中、母自身もきついのにどれだけ無理をしただろうと、その当時を思い出すと今でも涙が出ます。一週間近く歩いたある朝、米軍のトラックに出合い、三十八度線を越えたとわかりました。

そこには日本人が集まっていて、たまたま肥料を下ろしに來た船に乗ることができ、釜山

へ。釜山の収容所で博多からの引き揚げ船を待ち、帰国しました。

父は静岡、母は八代の鏡出身だったので、私たち四人は父が静岡に帰っていると思い、博多から静岡に向かいました。が、父は静岡にはいませんでした。実は、昭和二十年四月に軍隊に徴兵されて八月にソウル勤務になっていたことから、終戦となった時帰宅するつもりでした。しかし、三十八度線を越えることができないため、私たちより早く日本に帰り、八代にいたのです。

朝鮮では父の仕事の関係で電球が倉庫に山積みされ、それを食料や生活用品と交換し、生活には全く不自由しませんでした。帰国してからは食料不足で苦労し、朝鮮での暮らしとは正反対の生活でした。その後、父は知り合いの誘いで二十二年に人吉で電気工事店を始めました。私は学制改革で人吉二中の一回生となり、二十五年四月に人吉高校に入学。中三の終わりに柔道を始めましたが、GHQ（日本を占領していた連合国軍総司令部）はクラブ活動での武道を禁止していました。高二の時に武道解禁となり、三年で二段に昇段。柔道部キャプテンになり、県大会で二回、準優勝しました。

今の子どもたちは精神的、肉体的に自分を鍛えるチャンスがないので、学校のスポーツ

ラブなどの集団生活を通して、仲間を助け合う精神を学んでほしいと思います。母の愛情をひしひしと感じながら、三十八度線を助け合って越えた引き揚げ体験は、私の人としての現在の大きな支えになっています。

いただいた命で笑い声の絶えない人生を

岩 本 泰 典

昭和十一年生（九日町）

私の人吉東小学校時代は戦時下で、四年生の時が終戦でした。校舎の玄関横には二宮金次郎の像があり、登校時は校門から、天皇陛下のお写真がある「奉安殿」へ最敬礼していました。運動場では高等科の生徒がグライダーの訓練を受けていましたが、ある日、操縦を誤って並木にぶつかり、壊れてしまいました。

九日町でも各家庭に防空壕が掘られ、空襲警報で壕に入り一家が肩を寄せ合うのは子ども心には楽しいものでした。街ではグラマン戦闘機の機銃掃射も始まり、高原飛行場に落ちた爆弾の振動で、壕の壁からコンクリート粉がサラサラと落ちます。学校は分散授業となり、

授業の合間にB 29やグラマンのエンジン音をレコードで聴き、その遠近音で避難を判断しました。

市内の家は海軍の兵隊さんの宿舎に使われ、わが家にも二十人近い兵隊さんが宿泊していました。毎朝、高原からトラックが迎えに来て、食事は球磨川ほとりの散歩道路で準備。調理作業を見ていると、担当の兵隊さんが生のカライモで飛行機や軍艦を作り、軍艦マーチを歌いながら私たちの口に入れてくれました。

戦災が広がり九日町から薩摩瀬へ疎開。ここも分散授業で、用件があると本校の西瀬小学校に球磨川を渡って行きます。西瀬橋は水害で壊れており、生徒は船に乗り六年生が櫓ろをこぎました。

やがて、九日町の家半分と土蔵が球磨川への避難路として強制疎開で取り壊され、数日後に終戦となって親や祖母は悔やんだそうです。終戦後、代償として人吉城址の防空壕に使われた白砂混じりの板が数十枚届きました。

終戦の玉音放送は雑音のひどいラジオで聞きました。ソ連軍が満州で日本人にひどいことをしているとうわさがあり、その兵が人吉にやってくるかと聞かされ、相良村四浦初神へ疎開

の準備をしました。実際は、アメリカ兵が進駐し家に遊びに来たりで何事ありませんでした。進駐軍の兵隊さんが集うクラブが九日町にあり、十輪車と言っていたトラックで木上高原から毎晩のようにやって来ていました。帰りには子どもたちが「ギブミアチョコレート」と言って群がり、甘い物はカライモしかなかったころ、あの甘苦い味は忘れられません。

戦中戦後の食糧難は大変で、祖母に連れられて食料と交換する着物をリヤカーに積んで行ったり、球磨川で流れてきた一枚の菜っ葉を持ち帰ると母が喜んでくれたりしました。学校では給食が始まり、缶詰の牛肉にマカロニが入り野菜を煮込んだ物や、脱脂粉乳が出され、帰りは一人ひとりに肝油が渡されます。新制中学になると食糧事情も少し良くなり、コッペパンが一個十円。ジャムパン、クリームパンは同じ十円でも小さくて腹が満たされません。新制中学校は校舎がなく、人吉高校に間借りしていました。

人吉高校卒業と同時に大阪船場へ修行に行きました。担任は大学進学を勧めましたが、商家の跡取りに大学は無用と祖母が反対。両親とも養子だったので、祖母に従わねばなりません。修行は三年でしたが、けがの連続もあり一年三カ月で連れ戻されました。

この聞き取り調査のお陰で、良き時代に生きてきたと気づきました。少し上の先輩は戦

場へ行きましたが、私の世代は衣食住の心配は親任せ。戦後は経済の発展で欲しい物が手に入りました。良き時代に生かされましたが、死よりも生きることの大変さを遅ればせながら知りました。これからの人たちには、せっかくだいだいた命ですから、笑い声の絶えない人生であってほしいと思います。

終戦直後の混乱と食糧難

大園 武義

昭和六年生（願成寺町）

私は宮崎で生まれ、父の転勤で四歳から六歳まで満州で育ちました。川幅が一・五キロもある鴨緑江わうりょくこうが満州と朝鮮の国境で、朝鮮の日本人小学校に船で三十分かけて通学。冬になると川が凍り、そりを使いました。国境の町では、満州の安い野菜を買いに来る朝鮮人や朝鮮の安い衣類を買う満州人の姿があり、日本人は自由に税関を通れましたが、朝鮮人、満州人は厳しく取り締まられました。

昭和十三年、父が満州から出征。私の家族は私と母、妹、弟の三人で着の身着のまま帰国し、

私は山田小学校に在校していました。十九年四月、県立人吉中学校入学。授業では軍事教練があったり、男手がなくなった農家の応援に行ったり、二年になると分散教育で地区ごとに分けられました。四、五年生は動員されていました。また、相良村の青年学校（今の相良南中学校）に集まり、飛行機の燃料になるという松の根掘りに働かされました。夏休みに川辺川で泳いでいると、高ん原の海軍飛行場を攻撃に來た米軍機の機銃攻撃を受け、恐怖のあまり川に潜ったこともありました。

八月十五日の玉音放送は青年学校のラジオの前で正座して聞き、日本が負けたとわかると青年学校の校長先生が号泣しました。翌日、私は高ん原で海軍の兵隊が引き払った後の物資を住民が盗んでいる光景を見てびっくり。帰宅して、「お母さん、泥棒しよるよ！」と叫びました。高ん原の防空壕の地下には海軍の寝具や食料品がたくさんあり、悪いことと知りながら母と私も毛布を持ち帰りました。身を守るため鉄砲も持ち帰ると、相良村長だった祖父に、進駐軍から武器を集めて差し出せと命令が出たので、戻すように言われました。家族は持ち帰った毛布を駐屯している兵隊の牛缶と交換し、家族の命をつなぎました。祖父が獣医だったので、家族で倉にあったブドウ糖も飲んだりしました。

そのころの日本人は食べ物に飢えていて、人中の教室や農家の倉庫には軍の食糧が保存されていました。人々は「農家の倉庫を開けるー」と押し寄せ、よく暴動が起きました。保安隊ができる治安も良くなりましたが、時折、米兵が遊びに來て女の子がいる家庭は心配でした。ガムやキャンディ、十輪車（ダンプカー）やジープも進駐軍が來て初めて見聞きしたものです。相良から人中（人吉高校）までは四キロの道を地下足袋やげたで徒歩通学し、下駄の鼻緒が切れると鼻緒の穴に石を詰め、鼻緒が動かないようにしたものです。時々、五木行きの木炭バスが坂道を登りきれずにいるのを人中生が押して手伝い、お札に乘せてもらったりしました。弁当は配給の大麦で、大麦は雑炊にしないと食べられないため飯ごうを持参。湯前線組は白米の弁当で、とてもうらやましかったものです。

授業では進駐軍の命令で教科書を墨で塗るのが大変で、米軍司令官のピーターソンが人中に視察に來た時は、廊下を革靴で音を立てて歩くのが異様な感じでした。人中五年の時に男女共学になり、旧制中学を卒業し人吉高校三年に編入しました。その後、病気で受験期に休みましたが代用教員の試験に合格。小・中学校に勤めながら受験勉強をして大学に通い、教員免許を取りました。大卒後は市内の小学校で教鞭をとり、最後は人吉東小の校長で四十年

の教員生活を終えました。

私が育った時代は今のようには豊かではなく、食べ物も生活用品もなく、儉約の時代で、それが当たり前と思っていました。今は時代が変わり物が豊かになりましたが、物を大切にする心、感謝をする心を忘れないでほしいものです。

食糧難の中で働いた日々

大竹 チヨカ

昭和四年生（西間下町）

私は昭和四年に西村（現錦町）に生まれ、十一年に尋常小学校（旧制小学校）に入学しました。翌十二年、二年生の時日中戦争が始まり、戦争が二年、三年と長引くにつれ、子ども心にもこれは大変なことになったと思ったものです。兵隊さんの出征も多くなり、学校挙げて武運長久祈願のため、護国神社へ毎日お参りに行きました。

十六年（尋常小六年）には第二次世界大戦に突入し、日本の戦時体制はさらに進んでいきました。村からは若者たちが次々と兵隊として召集され、残った者は老人と女性、子どもばかり。

父も一時期、沖縄に徴用工（国から強制的に工場などでの作業をするよう呼び出される人）として召集されましたが、無事に帰ってきました。

私は尋常高等小学校を卒業して二年間、青年学校に通い、その後も人吉の洋裁学校に二年間学び、技術を身に付けました。戦争は長期化し、激しさを増すばかり。若い私は出征兵士宅の農作業の手伝い、イモ畑の草取り勤労奉仕など一生懸命に働きました。高原では飛行場作りにたくさんの人が集められ、徴用工の朝鮮の人たちや戦火を逃れて沖縄から疎開して来た人も働いていました。私も飛行場作りの仕事で賃金をもらいましたが、顔見知りでない人たちと仕事するのは怖くもありました。

そのころから、食事はわずかな米粒の中にイモや大根を入れて量を増やしたご飯やだんご汁、カライモはねったんぼ、米は石臼で粉にしてだんごにするなど工夫していましたが、十分な食べ物もなく、つらい思いをしました。さらに、出征兵士の見送り、戦死者の遺骨の迎えなどで駅に向かう日も多くなっていました。「軍国の花嫁」として結婚式の翌日に夫を出征兵として送り出し、二度と会うこともなく戦争未亡人となった方もたくさんおられました。そのような苦しい生活の中でも日本の勝利を信じ、老人をはじめ私たち子どもも敵の



上陸に備え毎日、竹やりの練習に励んだものです。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の無条件降伏の詔書がラジオから流れると、体が震えて涙が止まりません。日本が戦争に負けるなんて夢にも思っていませんでした。その時、私は十六歳でしたが、敗戦国となった日本にアメリカ兵が来たら、私たちはどうなるかといろいろな情報におろおろするばかり。しかし、アメリカ兵が笑顔で私たちに握手してくれた時は、ほっとすると同時に、つらかった戦争は本当に終わったのだと実感できました。

けれども、それからの生活は困難を極めました。まず、食べ物がありません。その日その日

にやっとイモやコーリヤンなどを主食にしました。農家の人たちは何とかなりますが、町中の人は遠くへ買い出しに行くなど苦労していました。やがて、出征していた兵隊さんたちが復員して農作業に就く方も増え、生活も少しずつ安定してきて、村の人にも、やっと笑顔が見られるようになりました。戦争のない平和な世の中がいかに大事か、今しみじみと思い出します。

フィリピンの山中生活を経て帰国

尾崎 正行

大正十二年生（上原田町）

私は大正十二年（一九二三）、中原村原田（現人吉市上原田町）に九人兄弟の長男として生まれました。昭和四年、中原村立（現人吉市立）中原小学校に入学。十二年三月に中原高等学校を卒業し、この年に新設された球磨郡教育支会付属教員養成所に入所。十四年三月に卒業すると、「中原興村塾」の正塾生となりました。

「中原興村塾」は昭和十二年、若竹又男陸軍少将が私財で建てた宿舎に、小学校卒業以上

程度の男子を集めて訓練を行った塾で、宿舍住み込みの正塾生と家から通って来る通塾生がいました。昼間は周辺の土地の開墾や食料生産にあたり、夜は座禅や「論語」の講読など、勉強と労働を伴う修養の塾でした。

若竹少将の略歴を記すと、明治十九年（一八八六）に熊本市に生まれ、同四十年に陸軍士官学校を卒業。陸軍大学校を卒業後、参謀本部員兼航空本部部員を振り出しに大刀洗飛行隊連隊長、明野飛行学校校長などを歴任。昭和十二年に予備役編入となり、十七年に熊本で町村合併により誕生した荒尾市の初代市長に推薦されて就任した人物です。

中原小学校には戦前、複葉の戦闘機がありましたが、この戦闘機は航空機畑で活躍した若竹少将が昭和七年前後に中原小学校に寄贈したものです。中原小学校に飛行機があることは郡内に有名で、各地からの見学者も多かったと聞きますが、戦争末期、金属回収で分解して回収されたようです。

私の経歴（軍歴）は次のとおりです。

若竹少将の薫陶のもとで生活し、飛行機への憧れが強くなる。興村塾に六カ月ほど学び昭和十四年十月一日、東京陸軍航空学校第四期生第八中隊に入隊。十五年十月、所沢陸軍航空

整備学校（埼玉県）に入校。十六年九月に少年飛行兵として陸軍上等兵となる。十七年五月二十九日、所沢陸軍航空整備学校少年飛行兵の教育課程を修了し、陸軍兵長に任じられる。卒業に際して成績優秀につき「航空総監賞」銀時計が授与された。

以上、十七年五月の熊本日日新聞に写真入りで記事が出ています。

「兄弟揃って空の勇士―航空総監賞拝受の光栄に輝く」の見出しで「人吉市中原区上原田町出身尾崎正行兵長は少年航空兵として二十九日名誉ある航空総監賞を拝受した。兵長は中原国民学校卒業後若竹少将の興村塾に入所……所沢陸軍航空整備学校に入学したもので、実家には父親馬勝氏・母親ひさのさんのほか弟妹八人があり、次弟一之君は十六年三月同航空学校に入学し、兄弟揃って空の勇士を志している……」。二歳下の弟、一之は偵察機搭乗員となり南方ニューギニア方面で戦死しました。

私は所沢陸軍航空整備学校卒業と同時に、飛行第一戦隊付きを命じられました。同日、明野陸軍飛行学校（三重県）で機種改変（部隊の飛行機を新しい機種に換えること）中の第一戦隊に着隊し、戦隊本部付きを命じられます。明野飛行学校では試験飛行・連絡飛行で約三十分間の搭乗を経験しました。



昭和十七年七月十三日、明野飛行場を出発し空路、上海、広東、サイゴン（現ホーチミン市）着。八月二十日、シンガポール経由でスマトラ島に到着。その後、ビルマ（現ミャンマー）、バンコク、ハノイ、ボルネオ島、ジャワ島、トラック島（現ミクロネシア、チューク諸島）、ラバウル（パプアニューギニア領）などを飛び回る日が続き、十二月一日、陸軍伍長に昇進。十八年八月一日、機種改変のためラバウルから船で日本へ。九月、機種改変を終了すると再び朝鮮や満州に飛び、十二月一日、陸軍軍曹に昇進。二十五日、帝都（東京）防空のため千葉の柏飛行場に戻りました。

昭和十九年七月二日、柏飛行場で試験飛行の

試運転中、エンジン部分を整備していてプロペラで前頭部を負傷し、柏陸軍病院に入院。八月一日、戦隊がフィリピンへ転進することを聞き、治療途中で自己退院し空路、明野飛行場・大刀洗飛行場・上海・台中（台湾）・広東経由でルソン島（フィリピン）へ。八月二十日、サンマリノ飛行場に着きました。

その後、フィリピン北部のツゲガラオ飛行場で勤務するも、空襲が激しく飛行機も全滅状態。カガヤン川右岸のシエラマドレ山脈の山岳地帯で、自給生活に入りました。食糧補給は全くありません。東京航空学校第一期の先任（先輩）を隊長とし、二十人余で昼は山に潜み、夜中になるとカガヤン川を泳いで渡ります。左岸のアメリカ軍の陣地に切り込み攻撃をかけ、食料などを奪っては山に戻るといふ生活で、山中では蛇、トカゲ、カエル、その他、草でも木の实でも食べられる物は何でも食べました。

フィリピンでは、十九年十月ごろからアメリカ軍が上陸作戦を開始。陸海空軍ともに日米間の激烈な戦闘が続き、日本の航空機はほぼ壊滅状態となり、アメリカ軍の圧倒的な戦力に日本軍の劣勢は明らかでした。二十年二月、マニラもアメリカ軍の手に落ちました。六月二十八日にはアメリカ軍によってルソン島の戦闘終了が宣言され、日本軍は山岳地帯に立て

こもっている状態でした。

山中で生活した正確な日数は分かりません。山中では、破壊された飛行機から取り出した無線機を大切に持ち歩いていました。電源には飯ごうを数個並べ、その中に尿を入れ中に竹を焼いて炭にした物を立て、銅線をつないだ「小便電池」を作り、それを電源として短波放送を聞いていました。しかし、外部の状況は全く不明です。

昭和二十年の八月以降と思われるころ、アメリカ軍の飛行機が盛んにビラを撒き、それらを見て隊長が判断。十月十三日、終戦になったと了解し、全員で白い布を掲げてアメリカ軍のものに出ました。その場所がどこかは記憶になく、そこからトラックに乗せられマニラのキャンプに収容されました。それまで身に付けていた武器は各自、手榴弾二発・短銃・軍刀で、小銃や機関銃などの武器は何も持っていませんでした。収容所で武装解除し、着ていた服もすべて没収。パンツとランニングシャツ、タオル一枚だけが与えられました。

十一月五日、日本への復員が決まりマニラ港に集結。二隻の日本船がいて、その一隻に、同郷人吉の知人が乗り組んでいて「尾崎さんじゃーないですか」と声をかけてきました。こんな所で知った人に会うとは大変、驚きました。その船に乗り十一月十五日、鹿児島県

加治木町（現在の始良市加治木町）に上陸。船中はそうでもなかったのが、パンツとランニングシャツ一枚で加治木に降り立った時は、さすがに寒いものでした。

列車で人吉に着き、どのように歩いたのか十軒町（現人吉市紺屋町の一角）あたりで「メゴ」に野菜を入れ担いで歩く女性とすれ違ったように覚えています。家に帰り着き、しばらくすると母親が帰って来て、町でおまえと出会ったのではないかと言われ、あの時、すれ違ったのは母親であったか何とも不思議な気持ちでした。しかし、パンツにランニングシャツで何の荷物も持たず、顔中ヒゲだらけの私を見た母親も、はっきり自分の息子とはわからなかったでしょう。全く裸一貫の復員でした。復員を知った近所の先輩が訪ねて来て着る物のないことを知り、青年学校の服を持って来てくれました。

私の実家は父が製材業をしていて、戦前は南満州鉄道用の坑木などを扱っており、復員後は家業を手伝いました。敗戦後、球磨郡は塩不足が深刻で、荒尾市長を辞して人吉へ帰っておられた若竹少将や味岡良戒氏など数名の人たちが二十一年ごろ、人吉市協同製塩組合を設立。芦北郡田浦で製塩業を始めました。私は田浦製塩工場の工場長として田浦に移り住んで働きましたが、二十四年六月に日本専売公社が発足し、塩の専売制が本格化。製塩組合は事

業を終えることになり、田浦から人吉に帰って中原農協に勤務しました。

復員後一番目に特に感じた事は、食糧難と物資不足の事でした。遠い道程を経て物々交換の為、葦北海岸方面より塩を背負って、途中取締り（食管法・物資取締り）に会う事をおそれてか、子供を背負った様にして一軒一軒をまわり歩く姿を見て、我等復員軍人数人で相談し若竹、味岡両氏に頼んで、製塩組合設立に及んだわけでした。

また、場所を田浦とした理由は、海水濃度（ボーメ〇・二八〇・三）燃料の供給、資財、人員、交通の便等の為でした。

これもひとえに、田浦の方々の御了解のたまものと深く感謝致しておる次第です。

台湾から命から引き揚げる

木原 和 恵

昭和三年生（願成寺町）

私は昭和三年一月二日、台湾で生まれました。家族は私のほか両親と弟二人で、父は台北州庁に勤めていました。小学生のころはのびのびとのん気に過ごしていました。支那事変か

ら大東亜戦争が起ると、女学校では軍事教練や部隊の清掃、飛行機の防弾ガラス用の雲母^{うんも}を薄く剥^はがす作業の毎日で、そんな中で授業があっていました。

生活面では、父の仕事のお陰で食べ物に苦労することはありませんでしたが、台北市内に居ては危ないと郊外に疎開しました。そこは小高い所にあり、グラマン機から爆弾が落とされた台北市内の様子がよく見えました。

昭和十九年三月、女学校を卒業しました。そのころはアメリカ軍の空爆がひどくなっていました。卒業式の帰り道、空爆で死んだ中学生の死体が道端にありました。母は、私が「卒業式から無事に帰って来られるだろうか」と心配していたそうです。

女学校卒業後は役所に勤めましたが、戦火はますますひどくなる一方で、爆弾がサッサッサツと雨が降るように落ちて、グラマン機の急降下で防空壕に飛び込むことも度々ありました。防空壕に逃げ込んだ女学校の先生が爆風で亡くなるということもありました。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を役所で聞きました。灯火管制がなくなつて、「もうガラスに障子紙を貼ったり、明りが外に漏れないように電球を黒い布で覆ったりする暗やみの生活をしなくてもよく、屈辱的な生活は終わった」と、うれしく思いました。でも、内心、



そのような思いを抱く自分を「非国民」と後ろめたくなり思い直したりもしました。しかし、終戦になると暴動が始まり、ピストルの音が恐ろしく感じられ、「早く、日本本国へ引き揚げたい」と願いました。父母は引き揚げの準備を急いでおり、そのような時、父の知人だった山奥に住む高砂族の方（見かけはひげづらで恐い感じでしたが日本に友好的）が、大事にしていたたんすを背負い持ち帰られた光景が今でも忘れられません。

いよいよ引き揚げの日が来て、身一つで両手に持てるだけの荷物しか持ち出せないため、母はアルバムから私たち兄弟や家族の写真を剥いで持つて行けるよう用意していました。外には

港までのバスが待っていて、気が動転していた私は母に、「急いで、急いで！」と急がせたばかりに、母はせっかくまとめておいたその家族写真を忘れてしまいました。このことを今でも思い出すと涙が出てきます。「母に悪いことしたなあ。急いでなんて言わなければよかった」と。そのため私が今持っている三歳の時の写真は、叔母からもらったものです。

引き揚げ船は台湾のキールンから出港し、二つの船に分かれて乗船しなければならないと聞いた母は、「家族は一つ、一緒の船に乗れるように」と懇願しました。母のお陰で私たちは家族は後の同じ船に乗ることができました。前に出た船は襲撃され沈没したそうです。

昭和二十一年三月、台湾を引き揚げることができました。船の中では、同船していた心ない復員兵から金品を盗まれる引揚者も多く、和歌山の田辺港で上陸すると、アメリカ軍からDDT（ジクロロジフェニルトリクロロエタン・殺虫剤、農薬）を頭から浴びせられ、とても屈辱的な思いをしました。田辺から父の本籍地の静岡県伊豆までは、押し合いへし合いの汽車を乗り継ぎ向かいました。伊豆では代用教員として国民学校の先生をしましたが、ノミが原因の風土病で包帯だらけで通勤したこともありました。そのころ、あまりのつらさに母に「いつそ死んだ方がよかった」と言ったことを、今でもはつきり覚えています。その後二年

間の代用教員を務め、昭和二十三年父の仕事の関係で人吉に移り住みました。

今、しみじみと思うことは、子どもたちには私が体験した恐くてつらい思いは絶対にさせたくないということです。平和のありがたさを感じる現在です。

シベリアで過酷な労働に耐える

木 本 敏 雄

大正十三年生（南泉田町）

私は昭和十二年四月、県立人吉中学校に入学しました。授業は高等師範学校卒業の正規の先生が教えていましたが、週二回ある軍事教練には熊本の十三連隊から予備将校が来校して教えました。本来は現役の大尉クラスの人が来て教えるのですが、日中戦争が始まると出兵して人員不足となったので、志願して将校となった予備将校が代わりに来て教えました。

昭和十七年三月人吉中学を卒業し、同四月、陸軍士官学校に入学しました。二年の予科を終え、三年目からは陸軍航空士官学校に進みました。同校には整備科・航法科・操縦科とあり、私は操縦科の爆撃機を選びました。本科は二年課程でしたが繰り上げとなり、昭和二十年四

月、満州での訓練が始まりました。練習機はドイツのユングマンを使い、昼夜問わず、休みなしの訓練が連日続きました。

一級上の先輩たちは布地の二枚翼の飛行機で訓練をしましたが、私たちからは金属機となりました。当時、先輩たちは台湾からフィリピンに南下してレイテ作戦を展開しており、その戦闘では操縦科のほとんどの先輩たちが特攻隊員として亡くなりました。

八月九日、日本と不可侵条約を結んでいたソ連軍が参戦し満州に侵攻してきました。その数日後の八月十五日、終戦を大連近くの飛行場で知りました。終戦の報を受けて、満州の戦線にいた日本軍の部隊長らが終戦会議を行うため、八月二十日ごろ、新京（現在の長安）に集り、私も新京に飛びました。そのころ、関東軍はあくまでも「ソ連と戦う」といきり立っており、それを鎮めるために天皇の命を受けた梨本宮殿下が来られました。しかし、既に新京の制空権はソ連軍にあり、ソ連のミグ戦闘機が新京の上空を旋回し、落下傘部隊が降下してきていました。そのような状況下、新京から逃れようとする日本軍のいくつかの部隊は、運よく飛行機で飛び立つことができました。我々の部隊も飛行機のエンジンをかけたまま部隊長の到着を待っていましたが間に合わず、ソ連軍将校にエンジンを止めさせられ、大学を改造した

捕虜収容所に監禁させられました。

十一月、捕虜になった日本の兵は五十人ほどを一組にして、車内を二段に仕切った貨車に乗せられ、ソ連シベリア地方の炭鉱の町チエレムホーボに連行させられました。その日はみぞれ混じりの冷たい雪が降っており、とても寒く、日本兵の捕虜を詰め込んだ貨車は延々とつながって発車しました。

そんな寒い中、日本人の女性たちが道端で饅頭やタバコなどを中国人に売っていた光景が今でも印象に残っています。それは終戦とともに満州にいた日本人が財産を没収されて、食料や衣類等を買うお金に困っていたからです。

チエレムホーボの収容所では、捕虜になった日本軍の将校と兵士とが分けられ、将校は現地での作業の指揮に当たられました。作業は地上と地下に分かれ、地上作業とはソホーズ（国営）やコルホーズ（村営）の農場整備や道路清掃をしました。この作業には身体が弱い人が主に従事しました。私は炭鉱で石炭の選別や運搬をする地下作業となりました。シベリアは資源が豊富で炭層が厚くダイナマイト爆破して採掘しました。作業中に落盤で胸まで埋まったこともありましたが、純度が高い石炭なので質量が軽く、すぐに救出されたこともありま

した。収容所は不潔で南京虫の害で痒さに悩まされました。また、寒さで風邪をこじらせて肺炎になる人や、栄養失調で亡くなる人も大勢いました。収容所での食事は黒パン、カーシャ（えん麦のおかゆ）、肉の入ってないスープだけで、そんな食事で寒さと重労働によく耐えたものだとも思います。

昭和二十三年の初め、日本軍捕虜は帰国のため大きな都会に集結させられました。我々はイルクーツクの近くに集結しました。そこではまた家屋造りの作業をさせられました。道路の整備作業もソ連の民間人と一緒にしました。ある時、ソ連の人が「ドイツ人はかわいそうだ」と言っていたことがありました。それは日本人捕虜より与えられる食事が三割ほど少ないからだそうです。その理由は「ヒットラーがレニングラードやスターリングラードを攻撃したから」でした。シベリアでは六〇七万人の日本人捕虜が亡くなりました。

十二月、いよいよ帰国の時が来ました。ナホトカから舞鶴港へ着き、故郷の岩野に帰郷しました。当時、日本はマッカーサーの公職追放令で日本軍で将校の地位にいた人と共産党員は公務員になれませんでした。二年間静養後、昭和二十六年、中央大学三年生に編入しました。途中、肺結核で再び静養し二十九年卒業しました。昭和三十六年、願成寺郵便局開設と共に

人吉に戻り、同局に勤めました。

私は日本に無事に帰国でき、幸せだったと思います。

夫の戦死後、子ども三人を育てる

黒 木 イトノ

大正七年生（大畑町）

私の夫は学校にはあまり行けなかったのですが、芝居などは一度で覚え、浪花節が上手な人でした。結婚して五、六年たった昭和十八年十月、夫に召集令状が来ました。翌年四月に次女が誕生しましたが、その年の九月、夫はフィリピンのマニラで三十二歳で戦死。私は二十六歳でした。

夫は大工だったため、中隊が移動する前に次の駐屯地に行き、兵舎を造っていたそうです。五人で屋根造りをしているところを銃で撃たれ、頭を銃弾が貫通して即死状態だったようです。五人中四人が死亡し、生き残った一人が隊に知らせたということでした。位牌^{いはい}は届きましたが遺骨が来たわけではなく、子どもたちは、「お父さんが死んだ証拠にはならない」と思っ



ていました。後になって、部隊長さんからの手紙が届きました。

昭和四十年代から五十年のころ、その隊長さんが天草におられ、本渡の信用組合の理事をされているとわかり、息子夫婦が訪ねて行きました。隊長さんは残念なことに、はつきりと覚えておられず、手紙も自分が書いたものではないと言われました。ただ、手紙を読んで、「確かに、こういうことがありました」とおっしゃったので、隊の中の兵隊さんが代筆して届けられたのかもしれない。

夫は幼いころから漆田の旧家に働きに出ており、勉強したり文字を習ったりする機会はないと思っていましたが、戦地からマメにはがきが

届きました。はっきりした文で生活上の指示や自分の近況が書いてあり、往復はがきで来るため、私も近所の方に代筆を頼んで返事を出していました。次女誕生の際も、自分が出征したから「征子」と名付けてほしいと書いてあり、命名を知らせた次のはがきには「征子ちゃん」は元気でしょうか……」と名前を入れてありました。規定の郵便物であれば戦時中とはいえ、きちんと届いていました。スタンプのない物は、「非国民」と言われて届かなかったようです。

夫の戦死後、三人の子どもを一人で育てました。幸い、田畑で米や野菜を作っていたため、ご飯を食べられないということはありませんでした。しかし、たとえ自分たちの食べる米がなくても供出の分は出さなければならぬ厳しいものでした。自宅近くの大畑小学校には日本兵がたくさんいて、高原の飛行場を造りに来ているようでした。各家庭から班ごとに一人ずつ、高原に奉仕作業に行っていました。兵隊さんのおかずの材料（トイモやカボチャ、カライモなど）を、班ごとに班長さんが集めて持って行っていました。

都会から衣類を持ってきた人と、米や野菜を交換したこともあります。交通手段が鉄道しかなかったため、大畑駅で降りて山道を下って来られていたようで、鹿児島など県外の人

が多かったようです。「指宿から来た」という人もいました。駅への道も人がやつと通れるくらいの狭い急勾配の山道で、夫が坂道で馬を引いている写真が今も残っています。

夫が出征する二、三年前に炭焼き小屋を作りましたが、木の立て込み（炭焼き窯の中に木を立て並べる作業）をして焼くばかりにしたところで召集され、一度も炭焼きができないまま戦地へ行ってしまいました。小屋を作った時に借りたお金を返すため、馬を処分するよう戦地からはがきで指示があり、近所の人に頼んで馬を売ってもらいました。

終戦後、鹿児島から引き揚げてくる米兵が学校付近にいましたが、それまで聞いていたような怖い人ではなく、子どもが通りかかるとコンペイトーを分けてくれるような優しい人たちでした。

昭和二十九年、学校の授業料が百円くらいのころ（昭和二十七年の米俵一俵＝六十キログラムの価格が三千円ほど）、免田にいたおばさんが私に仕事を探してくれました。免田に田植えに行くと日当が五十五円くらいで、とても助かりました。また、営林署の苗作りの手伝いに行ったりして生活を支えました。遺族年金は少しは来ていたかもしれませんが、戦後十年ぐらいたってからしか来なかったようです。

当時は卵やバナナも貴重品で、病気の時しか子どもの口に入らないくらい高価でした。子どもが小学生のころの弁当は日の丸弁当で、皆、腕で弁当を隠すようにして食べていたそうです。衣類は木綿製が多く、モンペ、げた、ゴム草履、ゴム靴が流行していました。

敗戦後、国民の必死の働きで復興した日本

佐無田 穆

大正十五年生（七日町）

支那事変始まる

昭和十二年七月七日、北京郊外の盧溝橋で演習中の日本軍と中国軍が衝突し、支那事変が勃発。当時、私は天草の本渡北小学校五年生で、戦局は拡大し、私が住む町内からも若者が出征していきました。私たち小学生は隊列を組み、旗を振って港まで見送り、船影が薄くなるまで手を振りました。近所の遊び友達のお兄さんや、父の勤め先である天草農学校の先生が赤襷に軍刀を下げて出征される姿もありました。十二月には南京が陥落。私たちは昼は旗行列、夜は提灯行列で祝ったものでした。

父の転職により満州移住

昭和十三年、父の転職で満州の安東市に移住。私は安東大和小学校六年に転入しました。支那事変一周年の時、綴り方（作文）で、天草で体験した出征軍人を送る本戸八幡宮での戦勝祈願や旗行列などを書いたところ、講堂の全校生徒の前で大声で読まされてびっくりしました。外地では内地の田舎における状況が珍しく、異郷にあつて先生方も郷愁を感じられたのかもしれません。

十四年四月、安東中学校に入学。学校も戦時色が強く、学業のほか教練に力が入れられていました。八月には北満で日ソ衝突からノモンハン事件に発展。北満のハイラル師団は壊滅的な打撃を受けました。そのころには、私たちの受け持ちの先生方も臨時召集で入隊され、教え方が熱心な先生方だっただけに、授業が受けられずショックでした。十六年十二月八日、大東亜戦争が始まり、ハワイの真珠湾攻撃やマレー沖海戦などの戦勝に日本国中が沸き立ちました。

弟と二人、内地に帰る

十七年三月、私がいまだ健康でなかったため弟と二人、祖父母兄弟がいる人吉に帰ることになりました。家族の見送りを受けて朝鮮を南下し、関釜連絡船に乗って二十七日の早朝、霧の人吉に到着。転校試験に合格し人吉中学四年に転入しました。満州では病気がちだった私も、気候や食事が合ったのか欠席することもなく卒業。在学中は勤労奉仕で麦刈り、田植え、稲刈りなどをしたのが楽しい思い出として残っています。

鹿児島農専（高農）に進学

同級生で優秀な生徒は陸士、海兵、予科練、飛行学校など軍関係を希望し、五高や七高を受験して進学する者もありました。私は父が農業関係の教師、兄も鹿児島高農（鹿児島大学農学部的前身）に在学中だったことから高農を受験。運良く合格できました。しかし、高農では毎日が午前中授業で午後は五時まで四時間の農場実習。寮の食事は毎食、ドンブリ一杯の麦飯、にしめ、たくあん、栄養バランスもとれず、空腹で学業どころではありませんでした。

十九年十月ごろになると戦況も厳しくなり、鹿児島には沖縄に出陣する兵隊が集結。学校

の一部も宿舎に当てられ、私たちは港まで荷物作業の奉仕に借り出されたりしました。時には高農の近くにも敵のグラマンが飛んで来て爆弾を落とし、跡には穴がぼっくり開いていました。二十歳以上の生徒は次々と召集されていきました。

二十年、私も二十歳になり、一月に繰り上げ徴兵検査（国が国民の義務として兵士に適切に身体検査など行うこと）で第二乙種合格。二月に学徒動員（太平洋戦争時に労働力不足を補うため学生・生徒を強制的に集め勤労させたこと）で、茨城県の満蒙開拓内原訓練所に行き、農兵隊（ふだんは農業をしている兵隊）の指導者としての訓練を受けました。

「萬世一系類なき天皇（すめらみこと）を仰ぎつつ…」と義勇軍の歌を歌いながら行軍し、雪や霜溶けの田畑を耕してジャガイモの切片植えの技術などを教わります。当時の石黒忠篤農林大臣や訓練所長の、「君たちの手によって食料を増産し日本国民を餓えさせるな」と壇上からの熱烈な励ましに感激したものでした。三月四日には帰途に着き、鹿児島で真っ黒に汚れた顔や体を温泉で洗い落としましたが、帰りが一週間、遅かったら三月十日の東京大空襲に遭っていたかもしれません。

熊本西部第一六部隊に入隊

三月下旬、私は農兵隊に派遣が決まりました。ところが、阿蘇へ赴任しようとしていたところへ赤紙(召集令状)が来て、四月五日に熊本西部一六部隊に入隊との通知です。親類や近所の方がみたて(送別会)を開き、人吉駅まで見送っていただきました。

入隊して二週間ほど内務班の訓練を受けた後、護南二二四〇三部隊が編成され、四月十五日に臨時列車で鹿児島へ。約二カ月の訓練の後、六月十八日に知覧方面に移動しました。大隊砲二輜を引きながらの行軍でしたが、左手の空が真っ赤に染まるのが見え、「ああ、いま鹿児島が空襲でやられているな」と思いました。

護南部隊は川辺に師団司令部を置き、私たちの中隊は大隣という集落に移住。山中にカヤで屋根をふき竹材を利用して寢床を作りました。そこで壕掘りや陣地作りなどをしてアメリカ軍の上陸に備えましたが、そのころの食料はコーリヤン、麦飯、塩の汁などで兵隊の体力は衰えるばかり。ある時、下痢で瀕死の古兵(軍隊に長くいる兵士)殿を仮設の陸軍病院まで運びましたが、途中で息を引き取りました。妻も子もある身の上を思うと、本当にかわいそうでした。戦後になって、衛生兵をしていた同年兵から当時、赤痢が流行していたと聞き、

啞然としました。

七月に入ると幹部候補生の試験があり、私は合格したものの終戦まで初年兵のままでした。そのころ、山中での生活は敵機が飛ぶのを見るだけで、アメリカ兵を見るわけでもなく戦争をしている実感もなく、毎日が空腹の思いと古兵連中に殴られずに過ごすことで精一杯。八月十五日、山中で終戦の情報を聞きましたが何の感慨もありませんでした。私たち学生出身は炭坑関係者に次いで帰され、九月十二日、人吉に帰宅しました。

復員、そして復学へ

家に帰ると祖父母や兄弟が喜び、家族で無事



を祝いました。兄は壱岐の島の守備隊から、弟は海軍兵学校から、私より先に無事に帰っていました。翌年十二月には満州安東市にいた両親と妹たちも全員無事に引き揚げて来て安心しました。が、戦後は国民全部が生きるために苦労の連続でした。余談になりますが、兵隊土産にノミがあり、身に着けた物は全部、風呂場に行つて熱湯で煮沸しました。ノミも退治できない軍隊では勝てるはずがないと思つたものです。

後日、アメリカ戦史を読むと、二十年十一月ごろには吹上浜、宮崎の高鍋海岸、志布志海岸に上陸予定、明けて二十一年の初めに関東の七里浜に上陸予定だつたとあります。そのまま戦争が続けば十一月には米軍が上陸し、私たちは一日で全滅したのではないかとぞつとします。私がいた部隊は本当にお粗末な装備で、また、周辺には民間の老若男女が日常生活を送っていました。兵隊は覚悟の上でも民間の人々こそ哀れです。本当に陛下のご決断があつて助かつた、よく今日まで生き延びてきたなと幸せを感じます。

復員後、兄と私は高農（農専）に在学中だったので、二人で鹿児島を訪ねました。鹿児島は焼け野原で、学校も一部の校舎を除き焼失。焼け残つた同窓会館で一夜仮眠し、授業再開の予定を尋ねて人吉に帰りました。十一月ごろ授業が再開し、登校。弟も将来の進路を真剣に

考えており、熊本の壺溪塾を経て五高に進学しました。

町内隣保で平和を祝う

終戦の翌年の正月、隣保こぞつて新年会が開かれました。持ち寄つた配給の焼酎に、ご婦人方の手料理、芸達者な人の六調子や小原節、ハイヤ節の踊りで大いに平和を祝いました。

私たち若い者は囲炉裏を囲み、日本の将来について議論。座談の中心になつたのは東京外語を中退し、よく本を読んでおられた博識の方でした。その方は、「日本技術の母胎」という本の内容を中心に、「戦艦大和、零戦を生んだ日本の技術は世界のどこの国にも引けをとらず、きつと再び立ち上がることができる」と主張されました。この予言は当たり、敗戦後の若者は貧困に耐えて必死に働き、戦後日本の復興の原動力となりました。私たちも将来の日本や生き方について意見を述べ、夜の白むのも忘れるほど話が弾みました。

農専（高農）卒業後、結核に

昭和二十二年の春、農専を卒業。しかし、思うような職はなく、父が昔お世話になつた方

の農場で一年間、父と一緒に農作業に従事しました。翌年、人吉の河南中学の教員に採用され教員生活に。その後、八代農高から採用の話があつて転勤しました。ところが、農学校に半年も勤めないうちに結核を発病。ただちに父に連絡して汽車で帰宅し、学校を休職して自宅療養の生活に入りました。

そのころは、周囲にも結核になった若い人が多く、お互い励ましあつて療養しましたが、若くして亡くなる人も多々ありました。五年間、自宅療養に努めたものの体力は回復せず、教職も解雇に。このまま大の男が遊んでいても生きていけないと、当時、司法書士を開業していた祖父の補助者となりました。二十八年に司法書士試験に合格。認可されて開業し五十年、曲がりなりにも生きてこられました。これも、家族をはじめ、お世話になった皆さんのお陰で、幸せというほかありません。

日本は敗戦後、憲法で戦争放棄をうたい、六十年以上も平和が保たれている例は世界の歴史でも稀です。それでも、自国を守る心構えだけは大事なことだと思っています。

分散教育と防空壕掘り

白 濱 陽 三

昭和七年生（願成寺町）

戦争中、学校は各地区ごとに分散教育を行っていました。私の地区では青井町にある空き家を利用し、分散教育には先生が回って来ていました。二年生がいなかったため、私が一番上級生で責任者のような立場だったにもかかわらず、よく遊んでいました。

まだ終戦前の高等科一年のころ、人吉駅前に朝、十二、三人の生徒が集合し、蟹作（現在の川上記念球場の少し先）、現在の水道局の下付近、東間上（川上記念球場より手前付近）の山に防空壕を掘りに出かける作業がありました。その時は軍用トラック（ガソリン車）が人吉駅に迎えに来て、作業が終わると歩いて帰っていました。バスは、木炭を使って走っていた時代でした。

私たちの仕事は、朝鮮兵が掘った時に出る土を竹で編んだ担架のような形のモッコで運び出すことで、十メートルくらい掘り進んでいました。その作業を行う兵隊さんは幹部が日本



人で、働く人は朝鮮の人がほとんどだったようです。午前十時と午後三時の小休止では、朝鮮兵が「トラジ、トラジ、トラジトラジ」と歌っているのをよく聞きましたが、意味はわかりませんでした。

蟹作での穴掘り中に、落盤事故で二人が生き埋めになったことがあります。一人は助け出されたものの、二級上の方が亡くなりました。掘っている所ではなく出入りしている所が崩れたようでした。私たちは別の場所で作業をしていて、「落盤！」という声で驚いて見に行きました。地質がシラスで、もろかったようです。最近、その現場を見に行きましたが、山はなだらかになっ

ていて当時の様子は想像できませんでした。後

に、当時の遺体の引き取りはリヤカーだったとご遺族が話してくださいました。

そのころ、食料は親せきの農家から分けてもらい助かっていました。五、六年の頃は田植、稲刈り、麦刈り等の奉仕もありました。学校の運動場や空き地には、すべてイモが植えてありました。終戦後は早々に学校に通い始めましたが、教科書にも墨を塗り表紙もない数枚の紙でした。

八月十五日に、「日本は負けたらしい」とのうわさを聞きましたが、「うそだろう」と思い信じられませんでした。八月十六日になると、「駅前集合しラジオで聞いた」と、他の人も皆、敗戦のことを口にしながら家に帰っていました。

終戦後は混乱し、わが家も出征していた家族の消息が不明なことから、入隊年月日や場所などの書類を提出し、その後、二人の兄の戦死が市からの知らせで分かりました。長兄は召集兵で二十八歳の時にフィリピンのレイテ島で亡くなり、次兄はおそらく十八歳で志願兵になり、二十歳の時にサイパンで亡くなりました。佐世保からサイパンへ渡った時、一緒だったという植木町の方が訪ねて来て話をしてくださいました。入隊して間もなく軍艦をバックにした本人の写真が届き、亡くなってから、つめが井ノ口に嫁いでいた姉の元に送られてい

たようです。亡くなった時の遺品は他には何ありませんでした。

父は終戦前に病気で亡くなっていたので、このつらさを知らなくてよかったかもしれないと家族で話したものでした。

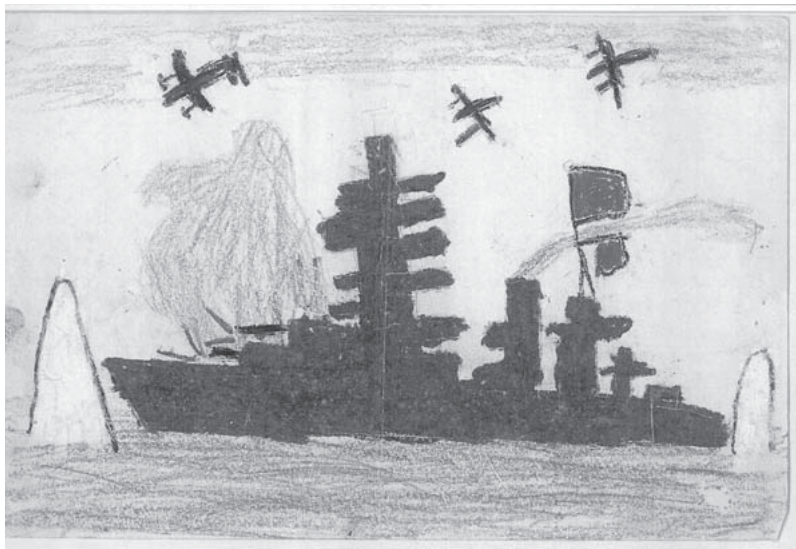
二度としてはいけない戦争

瀬戸 致行

昭和八年生（西間上町）

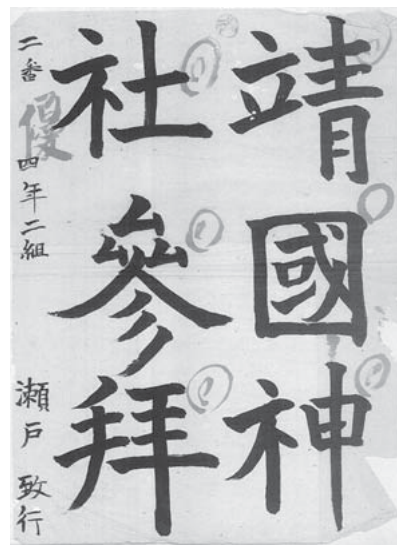
私は長崎市で生まれ、五歳のころは裁判官の父の勤務で博多に住んでいました。中国では日本が戦争を拡大し、大陸に出征する前の兵士が、わが家に民泊したりしました。当時の子どもは、「大きくなったら兵隊さんになる」というのが当然で、天皇陛下のために戦争で死ぬのは名誉だと信じ込まされていました。しかし、私は戦争で死ぬのが怖い自分を恥ずかく思っていました。

小学二年だった昭和十六年、大阪市で大東亜戦争の開戦のニュースを聞きました。大人が万歳を唱え、私たちも、この戦争は正しいので負けなと思いました。次第に食べ物や衣類



が不足し、配給切符で買うようになり、母は宝石を供出。男は国防色というカーキ色の服を着て坊主頭になり、女はモンペ姿でパーマは禁止。「欲しがりません 勝つまでは」の精神をたたき込まれていきました。

昭和十八年、私は病気になり、都会では栄養がとれないため熊本市に移り休学。まだ、空襲がないところで、近所の青年が海軍兵学校の白の軍服で帰って来た姿にあこがれました。漫画映画でも戦争物が数多く上映されていました。十九年、父の転勤で鹿児島市に転居。転校先は軍国主義の盛んな小学校で鉄棒、走り高飛び、飛び箱がよくあり、学校の指導で早朝に新聞配達をさせられました。



五年生になった二十年四月、鹿児島市内に初めてアメリカの軍艦から飛んで来た飛行機の空襲がありました。私たちの町の四つ角に大きな爆弾の穴が空き、自宅の窓はめちゃめちゃに破れ、爆弾の破片が家の中の柱にまで刺さりました。自宅の防空壕では心細くなり、一家六人で城内の大きな防空壕へ逃げました。そこには、片足をもぎ取られた人や衣服が血だらけの人が運ばれて来ました。若い母親が赤ちゃんを背負い、「病院はどこですか」と聞きますが、赤ん坊は両耳から血を出し、ぐったりしていました。わが家は母の実家の球磨村に疎開することになり、祖母と病弱な私が一足先に汽車で出発。途中、空襲で何度も停車しました。母の実家は

温かく迎えてくれ、着いた日の夕方、雨戸を閉める大きな音に驚いた私が、「空襲だ！」と外に飛び出すと、おばが慰めてくれました。

転校した学校では、初めて農作業を体験。雨の中での田植えが怖くなり、早引きしたのを恥ずかしく思いました。八月十五日、日本が負けたと知り、「なぜ、神風は吹かなかったのか」と不思議でした。後に、「神風」とは神風特攻隊の若者のことだったのだと思いました。九月になり、私たちは人吉市の父の実家に帰りました。

戦後、一番苦しかったのは食べ物がないことで、白いご飯は高根の花でした。麦ご飯にサツマイモをたくさん入れ、フキの入った味の薄いみそ汁などを食べ、サツマイモのツル、カボチャの花、豆腐のおから、食べられるものは何でも食べました。サツマイモ、カボチャ、ジャガイモなどは腹もちがよく、食べられるだけ食べると胸焼けがしました。また、農家でない人は竹の子生活といって、着物や家具などを食べ物と交換しに農家に行っていました。

成人も迎えられない若者が大量亡くなり、戦後は国中が苦しく貧しい生活だったのは、身の丈に合わない戦争を始めた軍国主義の政治家たちの責任です。二度と戦争はせず、軍備も持ちたくありません。憲法を変えて徴兵制を行うなど真っ平です。日本は昔から農耕民族で

あり、もつと農林業が栄える政策を考えるべきではないでしょうか。徴兵制の代わりに徴農制をして、男も女も若者は二年間、農林業を経験してはどうか、と思っています。

奉仕作業と学徒動員の女学校時代

田 中 キクエ

昭和三年生（合ノ原町）

昭和十六年、私の女学校時代（今の人吉一中、その後、女学校と人吉中が合併して人吉高校に）に太平洋戦争が始まりました。男の人は皆、出征して働き手がいないため、農家へ田植えや稲刈りの奉仕に行き、とても喜ばれました。奉仕作業がない時は学校用のクライモ作りで、授業はたまにあるぐらい。ほとんど勉強はしませんでした。

女学校四年の時、学徒動員で熊本市健軍の飛行機製作所に行きました。飛行機の鋸打ちや清掃をしました。が、県内外から百人くらい来ており、宮崎の人もいました。秋津に寮があり一時間ほどかけて行き来していました。仕事としては、それほど大変ではなかったのですが、十月から卒業までその生活が続きました。

寮の食事は専門の人が作ってくれ、入寮の日だけは、ご飯にクライモが入ったご馳走でした。その後は米にひじきや他のものがいろいろと混ぜてあり、食べにくいものでした。食器は竹を切ったものを使い、日曜日の昼食だけはコッペパンを一個もらえました。家から炒った大豆などが届くと、一部屋十人くらいで分けて食べました。一度は父が餅を持って来てくれ、部屋の皆がとても喜びました。一度だけ夜中に警報が出て、防空壕に入ったことがあります。寮の中でも気の小さい人は寝る時も履物（草履）を履いていました。

二十年三月、四年生の卒業式を他の学校の人と合同で迎えました。ただ、式の最中に空襲警報が出て寮に避難する途中、機銃掃射があり、皆やっとな防空壕にたどり着きました。式の途中でバラバラになり、とうとう卒業証書はもらえませんでした。

卒業すると、挺身隊（市町村長・町内会・婦人団体などの協力で構成されていた勤労奉仕団体）に行くか、代用教員（旧制度の小学校で教えていた無資格教員）になるか、農業要員になるか、三つのうち一つを選ばなければいけません。実家が農業だったため農業要員を選びましたが、代用教員を選んだ人が多かったようです。三月に人吉に帰ってから空襲警報があり、被害はなかったのですが、竹やりの稽古に行かなければなりませんでした。

そのころ、親せきのおばあちゃん一家が疎開してきて、おばあちゃんが買い出しに行きましたが米が手に入らず、子どもたちもカライモやカボチャの生活でした。都会から来られた方から砂糖を持っておられ、いただいたことがあります。戦争中は米を供出で全部出すので、米農家なのに買って食べたり、沖縄の人が持ってきた茶煎り釜と米を交換したりしました。当時は着物を米と交換しており、他の地域から衣類を持ち込まれることが多くありました。

終戦後、出征していた兄と一緒に行動していた人から兄への香典が届きました。兄は生きているものと思っていたため、家族皆で驚きました。特に父は信じられなかったようで、小倉にいるその方を訪ねて話を聞きに行くほどでした。兄はマラリヤと栄養失調症で亡くなったそうで、想像を絶する苦しみを味わったのではないかと、今度は父親がどうかなるのではないと思うくらい、嘆き悲しんでいました。私も兄のことはつらかったのですが、父の身体も心配でした。

何十年たっても戦争のことを思い出すと、あの時の怖さ、つらさがよみがえってきます。

卒業式の当日に受けた空襲

田 山 尚

昭和三年生（願成寺町）

昭和十六年四月、私は桜の花と共に、あこがれの人吉高等女学校の門をくぐりました。同年十二月八日、大東亜戦争が勃発。二年、三年と進級するにつれ、学業時間は勤劳奉仕作業へと移行し、農家の田植え、稲刈り作業、防空壕掘りの毎日が続きました。戦局はますます苛烈を極め十九年十月、県下の高等女学校の四年生全員が、学徒動員で熊本市健軍にあった熊本三菱重工業航空機製作所に入社する事態になりました。

入社後、早速、工場の中や飛行機の中を見学。その後は、製図やマイクロメーターの勉強（金属板などの素材を何百分の一の厚さの製品にする）、ハンマー打ち、ジュラルミンの板を継ぐ鉚打ちの仕事をしました。私たちが作っている部分は「飛竜」という飛行機の胴体部分で、爆弾を落とすところだと聞いて驚きました。後になるとジュラルミンが届かないため仕事ができず、何もしないと班長にしかられるので、ほうきを持って掃除をしている風にして



過ごすこともありました。

私たちは健軍秋津村（現在の熊本市秋津）の秋津寮に入り、県下の女学校の生徒とそこで暮らしました。寮でも女学校の担任の先生の授業があり、池斐研磨機という機械の使い方を習いました。八人ずつで教えてもらいましたが、加減によっていつまでも削れなかったり削りすぎたりで、かなり難しい作業でした。機械の使い方まで習得して、生徒に教えなければならぬ先生方も本当に大変だろうなと感じました。女性には難しい授業でした。

十一月から翌二十年三月までの厳寒期、工場はもちろん寮も火の気一つありません。同級生同士、部屋で体を寄せ合って過ごしたことが、

今は懐かしく思い起こされます。手足にしもやけができた人もいました。食事は非常食で、米らしい米は数えるほどでも、おいしいものでした。部屋中、何よりの喜びは家からの慰問、小包の到来でした。同室の十人で円座になり、白いおにぎり、炒り大豆、蒸しパン、干しカライモなどなど、家族からの温かい愛を分かち合う時でした。

当時は靴がなかったため、配給されたげたや草履ばきで工場と寮を行き来していました。服装は、モンペ姿に綿が入った防空頭巾、名前の横に血液型を記した救急袋、中にはハンカチ、ちり紙、包帯の代用になる長い布、乾パンを入れておくようにと指示があっていましたが、乾パンではなく、炒り大豆や生か干しカライモを入れていました。けれど、いつも食べ物ばかりの状態でした。

防空壕掘りもあり、ただ地面を深く掘るだけなので、「たこ壺掘り」と呼んでいました。学徒動員日記は毎日、書いていました。夕方、私も含めた室長が日記を集めて先生に渡し、翌日は質問事項や気になる文に先生が朱書きで意見や感想を書いて返してくださいました。

昭和二十年一月、神風特攻隊の隊員から女学校挺身隊（ていしんたい・戦時中、勤労奉仕を目的に町内会や婦人団体、学校などで組織された）へ手ぬぐいが送られてきました。日の

丸に「神風」と文字が入った手ぬぐいで、それまで白い手ぬぐいでハチマキをしていましたが、それ以後は送られたハチマキを締めて通勤しました。

【当時の日記より】

S 20・3・27（火） 晴れの卒業式・地獄絵の機銃掃射

人吉女学校第二十七回卒業式が早朝、寮の面会室で学校別に簡単に行われた。

9時30分 県下高等女学校の学徒全員寮庭に集合。

健軍青年学校講堂へ向かって行進。

健軍青年学校講堂にて合同卒業式開会。

厳かな中で式が始まり、県知事代理の力強い訓辞が始まって間もなく、後方でざわめく声が流れ、何の指示もないのに、ぞろぞろ講堂の出口へと動いている気配がした。前方にいた私が後ろを振り向いたときは、すでに半分以上の人が出口に向かつて走っていた。

「空襲警報！ 空襲警報発令、全員待避」の声で式は中断。講堂から出た時、空が真っ黒に見えるぐらい多くのB 29が地上三メートルくらいの低空を「ワーン!!」とすごい音で飛ん

でいた。皆、散り散りバラバラで走って逃げて行った。人吉高女の間みんながどちらへ行ったのか、どこへ進めばいいのか右往左往しているうちに、「敵機来襲、伏せ！ 伏せ！」の怒鳴り声で、思わず道端の茶の木の中へ頭から突っ込んだ。間一髪のところ今、私が来た道にプスプスツと機銃掃射の弾が地面に刺さるのが見えた。

低空飛行のすさまじい爆音で、何もかもわからなくなっていた。しばらくして空を見上げると、不気味な音を立てながら移動するB 29の群れが見えた。「神様お助け下さい」と、いつの間にか手を合わせて拝んでいた。周りを見回したが、そこら辺には誰もいなかった。消防団らしい人が一人、腰をかがめて走り過ぎて行った。

遠くで爆音が響き、また来るのかと思うととても怖かった。どのくらいだったのか、空襲警報解除となったが、みんな防空壕のたこ壺めがけて田んぼのあぜ道を走って行くので、私もついて走った。命からがら三人入りの壺に飛び込んだ時、先に入って泣いている二人を見て私も泣き出しそうになった。二人の名札を見たら阿蘇高女の生徒さんたちだった。ようやく我に返った時、あたりは静かな田園風景で何事もなかったかのようにだった。たこ壺から出て、畑やあぜ道を通り、やっと秋津寮にたどり着いた時は正午を過ぎていた。

部屋に帰り、みんなの顔を見るなり、手に手を取り合って無事を喜びあった。どの部屋も騒々しく、空襲の話で興奮していた。翌二十八日には帰郷することになり、夜は荷物の整理と準備に遅くまで忙しかった。五カ月間お世話になった秋津寮とも、いよいよお別れと思うと嬉しさと寂しさが交錯した。

*

*

*

卒業後は三つの中から一つを選んで仕事に就くことになっていました。助教(代用教員)か、病気をしているか、一家の大黒柱(男性が戦死された家庭など)は帰郷が許され、挺身隊はそのまま残ることになっていました。卒業式当日の空襲で、私はついに卒業証書はもらわないままになってしまいました。

忘れられない悲惨な東京大空襲

田 山 光 則

昭和二年生(西大塚町)

昭和十二年七月七日、支那事変が勃発。十六年十二月八日、ハワイの真珠湾攻撃が行われ、

大東亜戦争(第二次世界大戦)が始まりました。「米国及び英国に対して宣戦を布告する。真にやむを得ざるものなり」。昭和天皇のラジオからの声を現在の人吉高校の講堂で聞いたのは、私が中学三年生のころでした。昭和十四年、尋常小学校大塚ひぞえ分教場に五年生まで通い、六年生の時、先生の勧めで人吉中学へ。下青井町にあったお宅に下宿して通っていました。

三年生ごろになると戦死者を、人吉駅までお迎えに行き、駅から産交交差点(現在の青井交差点)にある病院の前まで道路の両端に並び、ラッパ隊、町長、戦死者の行列がゆっくり歩かれるのを、「英霊に黙禱」と頭を下げて見送りました。隊が通る間は頭を上げてはいけません。先生の中からも何人か出征されました。

奉仕作業で、免田付近まで麦刈りに行ったことがあります。戦死した方の家のお手伝いで、勉強より奉仕作業が楽しみなこともありました。自宅も農業をしていたので家に帰してもらったこともあります。また、家の敷地が広がったため、戦時中は京都から来た兵隊さん二十人ぐらいが寝泊まりされていました。食べ物がコリーヤンなどしかなく苦労されていたので、家にいい食べ物があると分けてあげていました。



昭和十六年十二月八日を境に戦争が激しくなりました。十九年三月一日に卒業予定でしたが、一月六日に仮卒業して東京へ。東京築地にある海軍水路部へ配属され、横須賀の海兵团で三カ月間の訓練を受けました。航海学校では、航海訓練、運航技術、電波での水深計測、船の位置を確認する勉強などがありました。二月から三月にかけて、空が黒くなるほど多くの編隊でB 29が来ました。日本の飛行機が一機突っ込み、すぐ真っ黒になって落ちていくのを目撃しました。昭和十九年八月、毎日のようにB 29の空襲を受けました。決まって午後三時ごろ、空襲警報のサイレンが鳴ります。そのころは、ただ逃げだけの戦争で、すぐ防空壕に入っていました。

あまりに空襲が続くので勉強にならず、東京から伊豆半島の戸田^{へた}に移動して訓練がありました。二十人から三十人が移動したと思います。

九月か十月には本部に呼び戻され、静岡の沼津、三津、相模湾で航海術を勉強。上から戦争の情報は知らされず、割とのんびりと訓練を受けていた気がします。そこには私たち以外にも兵隊が何百人といて、海辺に穴を掘り、海に線路を引いて特殊潜航艇が海に出る準備をしていると聞きました。その特殊潜航艇に、訓練を受けている私たちが乗り、海に出なければならぬと言われていました。

重要な任務が計画されていたためか、昭和十九年、十八歳で一等陸尉の称号が与えられ、給料もよく洋服も新しい物をいただき大変、待遇が良好でした。そのころは他では考えられない銀飯(ぎんめし・白米のご飯)が出され、付近の人からは魚の差し入れをバケツでいただいていた。八月十五日まで、そこで暮らしました。

沼津が空襲を受けた時は、夜中の十時から十一時ごろに飛行機から焼夷弾(しょういだん・都市や建物などを焼き払うことを目的とした砲弾または爆弾)が落とされ、真っ赤な弾が下でパーツと花火のように飛び散るのがきれいに見えました。後で見に行くと、畳一枚に一

個くらいの割合で不発弾が落ちていましたが、幸い人への被害は少なくて済みました。

二十年三月、「三月十一日、十二時に東京本部へ集合」の知らせが来ました。今回の召集は何かあると感じ、前日の十日に皆それぞれ近くの親類や知人にあいさつに行きました。私は吉祥寺に住む叔父を訪ね、叔父はイカの塩辛とお酒で歓迎してくれました。その際、私に何かあったら、つめと髪の毛を人吉に届けてくれるよう叔父に頼みました。「大和魂をもって天皇陛下のために命を捧げる」という教育を受けていたため、「自分の命は長くない」と死への恐怖はありませんでした。三津にいる時、仲間が銃撃を受けて亡くなっても、「俺も後から行く」という気持ちでした。

三月十日の夜は叔父の家へ泊まり、午前零時に「光則、大変！」と叔父に起こされました。東京大空襲です。東京が真っ赤な火の海になっているのが見えました。すぐ東京に向かいましたが、いつもは電車で一時間位で築地に到着するのに新宿までしか電車が行かず、芝区付近から神田、有楽町を歩いて築地に向かいました。街中は焼け野原で何も残っておらず、真っ黒になった男女の区別もつかない遺体がたくさんありました。夜通し歩き、本部に着いたのは昼の十二時ごろでした。

大空襲の直前の昼間、米機がビラを撒き、「十二時に空襲する。命が惜しい人は皇居に集まっておくように」と予告があったらしいのですが、だれ一人信じず避難していなかったため、何十万人の方が命を落としました。予告どおり、皇居は狙われていませんでした。本部で三津へ戻るように言われ、品川までは電車、品川からは山越えで二日かかって到着しました。ここでも敵を迎え撃つ訓練を受けました。

八月六日、広島に黒い雨が降ったと聞き、後に原子爆弾だと知りました。八月九日、長崎にも原爆が落とされました。このままでは日本全土が焼け野原になると思い始めた八月十五日、ラジオの前に集まるようにとの指示がありました。天皇陛下の玉音放送なのにガーガーという音が入って聞き取れず、ラジオをたたいたりしましたが、何を言われたのか結局、わかりません。後になって無条件降伏したと聞きました。

その直後、「米兵が上陸するから家に戻って待機せよ」と命令を受け、十五、六日ごろ自分の荷物を持ち、十人から二十人乗りの漁船のような何艘かの船で沼津駅まで送ってもらいました。駅は復員兵などでごった返していましたが、身分証を見せると兵隊は優先して列車に乗せてくれました。石炭で走る汽車で、トイレ付近から飛び込むようにして乗ったように覚

えています。広島まで来ると焼け野原で、原爆でつぶれたらしい建物も見えました。広島からは線路を歩き、知らない人同士で、今までどこにいて、これからどこに向かうのかなど語り合いながら歩きました。

宿舎を出る時に持たせてもらった二、三升しょうの玄米があったお陰で、米と交換で民家に二泊させてもらい、大分に到着しました。鹿児島本線は不通となっており、豊肥線に乗ったり歩いたりしながら八月三十一日に真幸駅に到着。そこで地元の人たちが話す九州の言葉を聞き、やっと安心しました。列車の乗客は兵隊は少なく、一般の人が多かったようです。乗り切れない人は屋根にまで乗っていました。九月一日昼ごろ、人吉駅に到着。町がガラーンとしているという印象を受けたものの、すぐに下宿していたお宅に行くと、「よく戻った！」と泣いて喜んでくださいました。

あと半年でも戦争が続いていれば、私の命はなかったと思います。私より一歳以上、年上の人は戦死された方が多く、年齢が低かったことで生きて戻ることができ運が良かったといえるかもしれません。大塚地域でも四十五人いた青年の中から数名が欠けました。三月十日の東京大空襲の悲惨な様子は、今でも一番、記憶に残っています。

武器も食料も薬もなく歩き続けた戦場

築地 堅

大正十五年生（北泉田町）

昭和十九年一月十五日、十七歳で志願兵として入隊し中国に渡って初年兵教育を受けました。まず、戦死した時に家に送る写真を撮られ、髪やつめなど遺品になる物を残し、一筆書いて家に送りました。私のような十代の志願兵は少なく、ほとんど徴兵の兵士でした。中国からベトナム、さらに軍の船でメコン川を下ってタイへ。ベトナムではフランス（フランス人が居留していた地域）の集落に駐屯のため二週間ほど滞在しました。庭園や芝生のきれいな一般住宅で、フランス引き揚げ後の日本侵入でした。

私の所属部隊は鹿児島四五連隊西部第一八部隊でしたが、日本から離れると冬三五四五部隊第三大隊第一二中隊と呼ばれていました。南方へ行く時には、ばかにされないように二等兵の星一つから星を三つにしてみました。私たちが出征した時は、もう負け戦が目に見えている状態で、武器は小銃だけ。弾もなく一人二個ずつしか渡されていませんでした。

飛行機から落とされる爆弾に太刀打ちできるはずもなく、ただ逃げるばかりでした。

若い私は時々、母親の顔がフツと浮かび、何とか生きて帰ろうと思いましたが、四十歳代の家族持ちの方で絶望して命を絶つ人もあり哀れでした。私たちの隊は戦うことはなく、先隊が戦った後について行く形でした。道端に並んでいる店の試食でおなかを満たすこともあり、「シェーシェアー（ありがとう）」と言うともうえました。

中国では、民家に蓄えてあった米や絹などの略奪や女性への乱暴を討伐として行うこともあり、耐えなければなりません。そのつらさから、「便所へ行きます」と言ってトイレに着く前に靴のかかとの鋌^{びょう}で手榴弾^{しゅりゅう}の雷管をたたいて発火させ、自殺する人もいました。亡くなった人の服は中国軍のスパイに悪用されないよう、ほとんど持ち帰って宿営で焼きました。

道路を歩くと敵に狙われるため毎日、夜に田んぼのぬかるみの中を移動しました。股が擦れて皮膚がめくれましたが薬もなく、粉末の歯磨き粉を塗って歩きました。当時、私に渡されていた銃の弾は二発分。捕虜になったら、それで死ぬよう教育されていて、そのころには手榴弾も行き渡っていませんでした。メコン川を船で移動した人は生きて帰れましたが、徒歩だった人は玉砕してしまう確率が高かったようです。私たちより先に出発した部隊は、マ



レー半島到着前に玉砕したと聞きました。

一日に約四十キロ歩いて移動しましたが、初年兵は休憩でも上官の食事の世話などに追われます。私は一番年少なので移動時には常に六十キロもある背囊^{はいのう}（軍人や学生が物品を入れて背に負うかばん）を背負いました。中身は靴下に米を詰めたものが十本ほどと粉末のしょう油、みそ、上官と自分の着替えなど。兵隊では上の人が若い人に荷物を持たせるのが普通で、中には理解のある上官が背負うのを手伝ってくれることもありました。その代わり、夜にはあんまをしてお返しをしました。荷物があまりに重くて口バのしつぽにつかまって歩いたこともあります。

上官は水筒にお茶は入れず、「ちゃんチュウ」

と呼ぶ焼酎しょうちゅうを入れているため、私たち下の者はお茶を飲むことも少なく、地面をスコップで掘って、ため池の水を飲みました。洗濯のため池の水で洗いました。理解のある上官は水筒にお茶を入れさせてくれましたが、部下のことを思ってくれる方は少なく、絶対服従でした。アマーバ赤痢りやマラリヤなどの病気にかかることもありましたが、軍医は後続の最後尾にしかおらず、敵地までは来られません。各中隊にいる衛生兵が手当てしてくれるのですが、ケガをしても粉末を薄めて付ける赤チンキしかありません。手榴弾が手をかすり、破片が右手中指に入った時はえぐって取り出してくれました。今でも指は曲がったままです。

同年兵の死が一番つらく、手首か指を焼いて骨を持ち帰りました。人を焼くのも初年兵の仕事で、薪まきでは一晚、たき続けても焼ききれず、青い炎が出ても怖いと思う余裕はありませんでした。遺骨として帰れる人は恵まれている方で、ほとんどはどこで亡くなったかもわからず、石ころや他人の骨が戻ったりしていたようです。

韓国から中国の北京、運城に向かう時には、バツ缶バケツ（バケツ）のご飯が凍っていました。水を汲むにも凍ったクリーク（水路）をつるはしで割り、飯盒はんごうで汲んでバツ缶に入れていました。一、二度、慰問袋（出征兵士などを慰めるため、中に娯楽品・日用品などを入れて送る袋）

が届き、食べ物が入っているのが一番うれしかったです。母親があくまきを入れてくれ、外はカビていても中身はおいしく食べられました。米俵にはし箱のふたを突っ込み、生米を食べたこともあります。

終戦を迎え家に帰りましたが、「ただいま！」と言っても母親は何がなんだか分からない様子でした。戦死したと思い込んでいた息子が現れ相当、驚いたようでした。ベトナムから出した手紙も届いていなかったのです。

わが家は兄弟四人全員が戦地から生きて戻ることができ、本当に珍しいケースとなりました。昨年、同年兵で、もう一人の生き残りだった枕崎の方が訪ねて来ました。戦時中のつらかった話や私たち以外の班の人たちは今どうしているだろう、何人くらいの方が生きておられるだろうと一晩中、話が尽きませんでした。今にして思うと、中国の運城からベトナムまで行軍したことになります。

空襲警報で駆け付けた学校

築地 美津子

昭和三年生（北泉田町）

昭和十九年、私は女学校に通っていました。学校では麦刈り、稲刈り、カライモ用の土地の開墾のために竹やスキの根を掘ったりと奉仕作業がほとんどでした。「眠い」「きつい」「つらい」と言える状況ではなく、言葉に出そうものなら、「大和なでしこが何を言う！」としられました。手榴弾を投げる練習として三十センチくらいのカシの棒を投げる体力検定や、米兵に立ち向かうための、なぎなたの稽古などをしていました。

本当は同級生と一緒に女子挺身隊に入り、熊本市健軍にあつた傷病兵の白衣を繕う所に行きたいと思っていました。しかし、教員不足だったこともあり、先生から二、三人が呼ばれて教員を勧められ、昭和十九年の卒業と同時に東小学校の代用教員になりました。二十年三月、東小学校で空襲を受けました。私は家が近く若かったため、サイレンが鳴ると学校へ駆け付け、校舎の窓を全て開けるのが役目でした。空襲の際は、わら草履で駆け付け、焼夷弾の類焼を免れるため東校舎から西校舎まで全ての窓を開けました。

靴のない時代で、普段はわら草履での出勤でしたが、雨の日にげたで行ったところ、「げたを履いていては子どもたちを助けられない」と校長先生からひどくしかられ、それ以来、霜柱が立ったたり道が凍ったりしてはだしで通いました。

校内には、校門から近いこんもりとした森のような所に奉安殿があり、天皇陛下の御真影が置かれていました。出入りの時には奉安殿に向かって最敬礼していましたが、恐れ多くて人が近寄れないことを利用してか、厳しい食糧事情の中、あるはずのない砂糖が隠してあるのを見たという年配の方がいました。自宅に置くと没収されるので誰かが隠したのだろうと、うわさされていました。

陛下のお写真は四大節（一月一日元旦、二月十一日紀元節、四月二十九日天長節、十一月三日明治節）の時だけ、講堂に造り付けられた奉安殿に移されていました。普段は、教室で授業の前に「東方遥拝」の号令の下、千八百人の先生、生徒が最敬礼の姿勢で、教壇の宮城の写真に注目しながら君が代を斉唱。斉唱中は鼻もすすってはいけないと言われていました。運動場には防空壕が掘られ、内部は畳四枚を縦に並べたくらいの長さで、入り口は丸太と土で隠してありました。三月十八日、日本の飛行機の音とは違う、キンという金属音が聞

こえました。グラマンという艦載機（航空母艦に搭載された艦上機）で、白髪岳の方からの低空飛行でした。早朝で児童はいなかったため、職員だけで防空壕に避難しました。避難の際は、腹は地面から離して四つんばい（爆撃を受けた時に内臓が飛び出さないように）、目を押さえ（目が飛び出さないように）、耳をふさぐ（鼓膜が破れないように）と言われ、ふだんから訓練していましたが、生徒が避難したことはありませんでした。

人吉高校の一带にはカライモを植えてありましたが、高校を軍関係の建物と間違ったのか、飛行機から機銃掃射を受けたことがあります。自宅のカライモ畑も機関銃でバラバラと撃たれ、その時、機内でニヤニヤと笑いながら銃を撃っている女性兵士の顔も見えました。後に、人吉高校の校舎に弾が当たった跡が多数見つかり、自宅の畑だった所からは薬莢も出てきました。錦町由留木地区では飛行機を見ようとしたのか、外に出た子ども兄弟二人が機銃掃射で死亡しました。当時は、国民にアメリカやイギリスを「鬼畜米英」と教え込み、新聞などでも、この言葉はよく使われていました。

私がまだ西小学校に通っていた子ども時代は、一日と十五日に全員で歩いて青井神社へお参りに行き、武運長久をお願いするのが恒例でした。女子全員で千人針を縫い、普通の人は

一針、寅年生まれの人だけは自分の年齢の数を縫い、兵隊さんがその布を腹に巻いて出征して行きました。

靴や米、衣類は配給制で全く手に入らず、割り当てられた切符を持って行くと買うことができました。それも抽選で、一組七十二人学級（当時東小学校は七十二人学級でした）で二人が当たる程度のものでした。実家は農家でしたが、働き手がなく収穫が少なくても米は反数に応じて供出しなければならず、家に残るのはわずかばかり。家族十八人の食事は、みそ汁に米粒が泳いでいるようなザブザブした汁でした。

二歳違いの弟は人吉中学の学徒動員で福岡の軍需工場に行き、栄養失調で歩けなくなって帰ってきました。総合病院に入院しましたが薬も注射も元気をつける食べ物もなく、夜明けを待ってやっと牛乳を手に入れました。ただ、同じ病室の八人全員にも、おすそ分けしなければならず、一本の牛乳を一口ずつ飲ませ、イワシ一匹も八等分しました。学徒動員から同じ症状で帰って来て亡くなったのは、弟が十八人目でした。

国民の心をズタズタにした戦争

土屋 歳明

昭和八年生（矢黒町）

私は昭和八年一月一日、自営農の父の末っ子として生まれました。地主から田んぼを借りて米を作り、収穫したらその半分を地主に返し地代としていました。家族は父・母・兄・姉と使用人の七人で、六歳上の兄は小学二年か三年のころ、八代の松田農場に一年間農業の勉強に行きました。そのころ、松田式農業を勉強した農家は生き生きと働き、作物もよく収穫できるとの評判で、人吉からも何人も勉強に出かけていました。

昭和十四年四月、西瀬小学校に入学しました。支那事変ごろからだんだんと国民の暮らしは物不足になっていき、小学校に入学したものの靴がなく、兄や姉のお古を履いて通学していました。靴下などの衣類も配給制で、三十人のクラスで二十足が割り当てられるぐらいで、冬でも靴下も履かず草履を履いていたこともありました。また、足中（つま先だけのわらじ）を履いている子供もいました。

一年生の時は男先生でしたが、優秀な先生であったためか、後に人吉中学校（現・人吉高校）

の先生とられました。

二年生になると、男先生はすぐ召集されて女学校卒の代用教員が多くなりました。家では八代から帰ってきた兄の農業の手伝いをしました。鍬で畑を耕すのは子どもの身体にはとてもきつく、毎日よく鍛われました。

昭和二十年四月、人吉中学校に入学しました。入学したものの授業らしきことはなく、毎日分散して作業にあたりました。一カ所にまとまっていると爆撃されるという理由からで、それぞれの地元に戻って人手がなくて困っている農家の手伝いをしました。私も西瀬校区の農家の手伝いをしました。夕方になると、「明日はどこどこに集まれ」という具合でした。

人吉上空にもアメリカの敵機が飛来していました。ある日、学校の帰り空襲警報が鳴り、すぐ道端の溝に体をうずめました。空を見ると高ん原の方角から飛行機が何機も飛んで来ていました。矢黒の球磨川沿いには海軍の療養所（現・国民宿舎）があり、そこを目がけてグラマン機が機関銃で撃ってきたことがありました。矢黒に住んでいた私は、その様子を目の当たりにしてとても怖い思いをしました。そのころは何十機ものB 29が北の方角に編隊で飛行し、「今日はどこに飛んで行くのだろう」と、おびえた日々を送っていました。

夏休みになり、いとこと叔父がいる宮崎県村所の発電所に行きました。湯前まで汽車で行き、その後は山道を七〇八時間歩きました。ちょうど発電所に到着した時、天皇のお言葉を聞きました。村所はラジオの電波状態が悪く聞きづらかったのですが、「戦争に負けた」ということは理解できました。戦争によって国民の心はねじれてズタズタになって、平常心はなくなっていたと思います。それで、「もう、空襲警報や飛行機の爆撃におびえなくてもいいんだ」と思いました。

終戦後一カ月もしないうちに、高ん原にアメリカ軍が進駐して来ました。住民の中には、旧日本軍の食料や衣類を奪い合う人たちがいたと聞きました。そのようなことがあっても、もともと根はいい田舎の人たち、治安は悪くなかったのでアメリカ軍の駐留も長くは続きませんでした。

勉強や進学もかなわなかった戦時下

津茂谷 マサ子

昭和三年生（南町）

昭和十二年、私が尋常小学校四年生の時に支那事変が起きました。六年生の時には伊勢神宮参拝の旅行が行われ、人吉市内の小学校から旅費（十一〇十三円くらい）を負担できる児童だけを募り、中川原の石を二個、伊勢神宮の敷石に持参したことを覚えています。十五年、熊本県立人吉高等女学校（現在の人吉第一中学校）に入学。百五十人が入学し希望を胸に学校生活を過ごしていましたが、二年生の師走、十六年十二月八日の真珠湾攻撃で戦争状態に入りました。

三年生になると敵国語のため英語の授業は廃止に。音楽の授業でも英米の音楽は禁止となり、音楽担当の先生は心を痛められたのでしょう、あるイギリス民謡を、「この歌はとても旋律がきれいだから歌いましょう。でも、小さい声でね」と語りながら伴奏していました。音階も「ドレミファソラシド」ではなく「ツエ・デー・エー・エフ・ゲエ・ア・ハ・ツエ」

とドイツ語で発音。卒業式では、「螢の光」もスコットランド民謡が原曲ということで歌えませんでした。

また、美術の時間になると運動場でほうきを持って敵に立ち向かう訓練がありました。今ではとても非現実的で考えられないような授業でした。出征された家庭は男手が足りないため、勤労奉仕でたびたび農作業の手伝いに行きました。当時は九日町に住んでいたので、幼いころから顔見知りの友人たちと共に、西瀬、中原、川村（現在の相良村川地区）へ、麦刈り、田植え、草取り、稲刈りなどに向かいました。先方では喜べましたが、通常の授業や勉強の時間はあまり確保されていなかったように思います。教科書も年度初めに手にしてから、あまり開くことはありませんでした。

当時は地域全体が労働力不足で、異常な状況であるとの認識もあり、勉強できないことに對する違和感さえ持ちませんでした。四年生の中には講堂にミシンが何台も持ち込まれ、軍服の縫製や修理を行っていました。家庭科ではたき出しの練習として、おにぎりを手早くにぎる練習や野草の料理、イナゴの乾煎り調理もしました。また、負傷者を移動する担架の使い方の練習、体育では陸軍将校による分列行進、なぎなたの練習が頻繁に行われました。最

も勉強しなければいけない時期を戦争のために失い、修学旅行や運動会もありませんでした。

昭和十九年三月十六日、敗戦の色濃い春に人吉高女を卒業した百五十人の軍国乙女たちは、国家総動員法（戦時に国防目的で政府が人や物などを統制、運用すること）により、五、六人の進学、結婚、病弱などを除き、百人近くが人吉高女挺身隊として熊本三菱重工熊本航空機製作所（三菱健軍工場）に動員されました。残りの五十人は人吉球磨の助教に配置されました。上級学校への進学希望は「非国民」などと言われとても困難でした。学ぶことを許されなかった苦しい現実を突きつけられたと現在も思っています。

挺身隊に行った同級生の中には、過酷な労働環境だったのでしよう、体調を崩し結核を患って亡くなった友人もいます。十六歳の娘を強制労働で亡くしたご両親やご親族を思うと今でも胸が痛みます。

「昭和十九年三月三十一日人吉東国民学校助教ヲ命ス月俸三拾貳円支給」

半紙に書かれた辞令が私の生き方を決めることになりました。教員の道を選んだ私は同級生五人と共に人吉東小学校に赴任。当初は衣服を新調することもできず、女学校時代のセーラー服のまま教壇に立ちました。

当時、十六歳の私が担任したのは高等科一年の女子、年齢差は二、三歳。生徒も、「先生」と呼ぶには心もとなかったに違いありません。私にとっても気が重く、校長に、「挺身隊に変更させてください」と直談判しましたが聞き入れられません。生徒たちも戦争で大きな痛みを受けており、沖縄から疎開して通学している子もいました。疎開といっても実際には戦争孤児で、お寺などに身を寄せていたのではと思います。ある日、その彫りの深い美しい女生徒が、「先生、私はこれからどうやって生きていけばいいか教えてください」と言ってきた時は、言葉が見つかりませんでした。

昭和十九年ごろの学校の教員は、男性はほとんど四十歳以上。女性が主で助教が二十人くらい、師範卒が十人くらいの構成でした。職員室の配置も前方に校長と教頭、あとは講演会のように机を前向きに並べ、上意下達という感じでした。ある日、欠勤届（そのころは年休はない）の書式を十分知らず、自分の名前に並べて父の名を書き、全職員の前で公表された時は、悔しくて涙があふれたのを覚えています。しかし、十六歳ではまだ保護者がいて当然の年齢でした。

二十年ごろになると毎日のように空襲警報や警戒警報が出て、分散教育を開始。各町内の

お寺や公会堂に二十人ほど分散する授業で、警報が出ると生徒を帰宅させ学校に駆けつけねばなりません。たとえ夜中でも職員は学校に急行し、奉安殿の御真影を守るよう命令されていました。校門に走り込むと仁王立ちの校長先生の姿があり、「ただ今まいりました。〇〇です」と報告するのです。出産間近の女性の先生が、暗い所で涙を流しておられた姿が今でも脳裏を離れません。

このころには校庭にも防空壕が作られ、警戒警報が出るとそこに集まり、先輩職員が戦時中という非常時の中での教員の心構えや、子どもたち、保護者との関わりをどうしたらいいのかなど、私たち新米教員に話してくださいました。また、師範学校卒の女性の先輩方から放課後に時々、「裁縫室へいらつしやい」と声をかけていただきました。そこでは、そのころ貴重だった大豆を炒ってつまみながら女教師の会が開かれ、十六、七歳の私たちにとって先輩方との語らいは、とても新鮮で心が揺さぶられるものでした。言論統制が厳しく、ふだんはとても口にできないようなことも、オープンに聞くことができました。そこには、後の平和な時代の教員の基礎となる糧があったように思えてなりません。

昭和二十年八月に終戦を迎え、学校にも復員軍人が続々と帰ってきました。軍服に軍靴の



まま出勤し、敗戦のショックから抜けられず、職員室で口論になり軍刀を抜かれた場面もありました。助教採用の同窓生も次々と辞めさせられたり、辞めたりする中、「何とか教員免許状を取得したい」と講習会、現職教育、通信教育で単位を取り、二十九年に資格を取得。戦後の混乱もあって十年の歳月を要しました。

昭和三十二年に結婚し翌年長女を出産。当時は産前産後十二週間の休暇制度がありましたが、完全に休める状況ではありません。私の前に出産した先生が出産前日まで勤務されたそうで、校長から、「あなたも頑張ってください」と言われ、秋の運動会のダンスを、出産四日前くらいまで指導しました。異常分娩で難産でしたが六

週間で職場に復帰。その後の子育ては、現在とは比較にならない困難が待ち受けていました。まだ首も座らない長女を子守のお手伝さんに背負わせ、一日分のオムツを抱えて列車で通勤。日中は保健室に寝かせ、授業の合間の十分間の休憩時間に走って授乳に行きました。

幾多の困難に立ち向かいながら教壇に立った日々、二人の子育てを教員の夫と共稼ぎで乗り越えられたのも、苦難の時代を過ごしたからとも考えます。

戦場に散った軍人、空襲や原爆の犠牲になった方々、理不尽な悲劇に遭われた方々の苦しみや、悔しさとは比べられません。正常な学校生活ができず、上級学校への進学も断念しなければならなかったこと。一つの希望さえ見いだせない戦争孤児を生み出してしまう現実。どれも悲しいことに違いありません。二度と悲惨な歴史が繰り返すことのないように未来永劫、平和な社会が続くことを心から願っております。

父の戦死後、母子二人で懸命に生きる

徳田 清 則

昭和十六年生（西間下町）

「こいが最後かもしれんとじゃつと、よお見とつきゃい」。私は鹿児島で、出征する父を抱き抱え上げられて見送りました。一つ違いの弟は母が抱いており、鹿児島駅に向かう電車の線路が二本、白く光っていました。弟が生まれてすぐのことで、私はまだ二歳になっていませんでした。でも、この光景は記憶の奥底に鮮明に残っています。この時、母は二十三歳だったと聞いています。

ほどなく、鹿児島は空襲で危ないとのことと、おじ夫婦と一緒に人吉へ疎開。以来、私たち親子は母の生家である人吉の家で過ごすことになりました。空襲警報のサイレンが鳴って庭先の防空壕に逃げ込むと、庭に実弾の列がプスプスッと不気味な音を立てました。高原飛行場の方からアメリカの飛行機の低い音と激しい爆撃音がよく聞こえ、遠い所のように聞いて妙に胸騒ぎがしたものです。

終戦になると生活は少し落ち着きましたが、私は疫痢^{えきり}にかかりました。怖い病気だと知ら

され自分でも気をつけていましたが、弟に感染して亡くなりました。私のせいで弟が亡くなったとの思いに時がたつてもさいなまれ、私にとっての戦争はまだ終わっていません。

母は洋裁学院で学び、洋装店で働き始めました。母の生家の離れで母子二人暮らしの中、引き揚げ者（外国を引き払って本国に帰って来た人）の列車が着くと伝わると、母は赤飯を炊きました。父は戦死したと言われても、もしかするということ期待がありました。赤飯は私たちにとって特別の意味を持つ、ちよつとほろ苦い父の味です。

学校へ行く年齢になると、戦争遺児として周囲が温かく接してくれました。自宅近くの先生と一緒に下校してくださったり、靖国神社参拝団に加えていただいたりしました。学校から帰ると、まきでご飯をたき母を待ちました。中学生になると経済的理由から母は徹夜仕事をするようになり、そんな時は私が弁当を作って洋装店へ運びました。日々の暮らしは平坦ではなく、母は夜中遅くに帰って朝の支度をしました。生きていくのに懸命でした。

私が受験勉強するころになると、母はコーヒーをいれてくれました。インスタントはない時代で、ひいた豆のドリップコーヒーは苦かったけれど少しリッチな気分でした。たまの外食で、「今日はごちそう」と、おじに「チャンポンを食べた」と言ったら笑われたものです。

苦しい家計を思うと学費の話を切り出すのは気が引けました。中学校の部活動で物を壊して先生から弁償を求められ、「お金がありません」と言ったら、厳しく叱られました。将来、自分の子どもには貧しい思いはさせまいと心に誓いました。

後になって、父が戦死したニューギニアの慰霊友好親善訪問団に加わったことがあります。美しい島だけに戦闘があったことに違和感を覚えました。近年、硫黄島^{いおう}で戦う日米両軍をそれぞれ別に描いたアメリカ映画の二部作を見ました。父の戦地と重なり、胸がつぶれる思いでした。くしくも、その映画の監督は、「彼らは祖国のために命を捧げた」と話しています。退職後の私は今、地域社会のために公民館にいます。

終戦前後にソ連の収容所へ

那 須 信 敏

大正十三年生（上青井町）

私は満州（中国の東北部）の奉天（現瀋陽）で、三人兄弟の長男として誕生。父親は熊本薬学専門学校を卒業し、薬品関係の仕事で早くから満州に移住して商業を営んでいました。昭

和十六年、私は奉天第一中学校を卒業し、満州医科大学付属薬学専門学校に進学。戦時体制が厳しくなって二十年三月の卒業予定が十九年九月に繰り上がり、召集されて満州と朝鮮の国境近くに駐留する部隊に入隊しました。

その時、薬学専門学校の同期生四十人前後が召集されましたが、満州各地に散ってその後一度も会えませんでした。部隊では軽機関銃の担当で訓練を受けましたが、射撃訓練はなく、ただ担いで走る訓練ばかり。ある日、深い雪に足を取られ倒れて機関銃の一部が壊れてしまいました。この時は日ごろ殴られている数倍も顔を殴られ、二、三日は口が開けられず、ほとんど食事もできなかったほどのです。

昭和二十年になって早々、幹部候補生になるための受験で部隊から一人、牡丹江^{ぼたんこう}の会場まで行きました。五、六月ごろ合格の連絡があり、新京（現長春）の教育隊に入隊しました。途中、一日か二日の休暇があり、ハルピンに住んでいるいとこの家に遊びに行ったことがあります。それから何日かして、奉天の両親が新京まで面会に来ました。私からは何も連絡していないのにとしたら、いとこが親に私の所在地を連絡してくれたそうで、驚くやらうれしいやらの気持ちでした。

八月九日、ソ連軍が対日参戦して満州侵攻を開始。新京の部隊は列車で南へ脱出するということで、奉天へ行くのかと思っていたら四、五日後に着いたのは朝鮮の平壤でした。ここでは、中学校の校舎に軍医・薬剤師などが中心となって病院を開き、治療に当たりました。しかし、数日後にソ連軍によって全員、収容所に入れられました。そこで全員を健康な者、病弱者に分けることになり、私もその仕分けに当たりました。しかし、その仕分けは特に診察して行うものではなく、ただ見た目で健康・病弱と分けただけ。私は当時、大変やせていたので最後に病弱の方に入りました。

病弱とされた組はまとめられ、「トウキョウダモイ（東京へ帰る）」と言われ列車に乗せられました。帰るなら東海岸の港のある元山か清津へ行くかと思ったのですが、そうではなく朝鮮とソ連国境近くで降ろされ、二カ月ほど足止め。十月か十一月になったところ、そこから何日も何日も歩き続け、国境を越えてソ連領へ入り、着いたのはナホトカでした。当時のナホトカは単なる砂浜の続く海岸で、それから帰国する二十二年四月まで、港を作る作業が続きました。服は同じ物を着たまま、風呂は時々ドラム缶を利用したもので沸かしたようですが、私はほとんど入りませんでした。

二十二年四月に帰国することが決まり、四月十七日に舞鶴港に到着。両親がどこにいるかわからなかったので、心当たりを考え、愛媛県で製材業をしている親類を思い出して頼って行き、製材所で働きました。二十三年になって両親が人吉に帰っていることがわかり、ようやく本当に親元へ復員することができました。

動員学徒で県外の飛行機製作工場へ

西 峯 多木次

昭和四年生（東間下町）

昭和十七年、私は人吉中学校に入学し、十九年十月二十日に中学三年生で学徒動員として人吉中の生徒は三つに分かれ、御船中、宇土中の生徒と合わせ百人ほどが行くことになりました。服装はドンゴロス（粗末な生地）の制服と戦闘帽、足には脚絆（きゃはん）（旅行や作業の時、すねにまといひもで結び、動きやすくする布）を巻き、多良木のえびす祭りの日に青井神社に集合。お参りをして、臨時列車で長崎県大村市の第二十一海軍航空廠（こうくうしょう）（飛行機製作工場）へ向かいました。

動員先では大村寮という寮に入り、部屋では毛布の並べ方が悪いと何回もやり直しをさせられました。工場へは寮から隊列を組んで歩いて出勤。戦闘機の部品を作るため、海の見える野外でハンマー振りの基礎訓練を受けました。動員五日目の十月二十五日、B 29が七、八機飛んで来ては大空襲を受け、工場は一瞬にして火の海になりました。御船中と宇土中の生徒十数人の死者が出ました。自分たちのいる寮にも爆弾が落ちていて、ガラス窓はメチャメチャでした。

福岡の雑餉隈ざつしょうがいの九州飛行機会社に配置転換となり、薬院の昭和寮に入りました。ここでは毎朝、朝食前に裸で駆け足をして住吉神社まで行き、参拝。帰りは柳橋の上で、「カシラ右、カシラ右！」と寒さに震えながら号令調整させられました。朝食はコーリヤン飯一杯。兵隊は山盛り、他の者はすり切りの盛り付けで、もみながら多く入ったご飯でした。

工場までは電車通勤で、母が作ってくれた誰よりも大きい防空ずきんがとても暖かでした。駅から工場までは、「ここはお国の何百里」と歌って行進するのですが、「大きな声で歌え！」「元氣を出さんか！」と怒鳴られながらでした。この道すがら、阿久根女学校の生徒に会い、日の丸鉢巻きの赤が印象に残りました。

職場では治具課に所属し、ハンマー振りやヤスリ掛けを黙々と行いました。ヤスリ掛けが済むとマイクロメーターで計測。誤差は〇・三ミリ以内と決められ、できないとビンタをもらうこともありました。鍛冶仕事の募集があり、わが家が鍛冶屋だったので申し込んだところ、友人と二人で当たりました。この仕事は冬場は暖かく、重労働のため特配のおにぎりが支給されます。ある日、なました鉄を切った時、破片が飛んできて唇の下を切り、四針縫ったことがあります。仕事中のけがのため公務傷害が取れました。

ひもじい、腹が減った、食べたい。毎日、こんな思いの中で耐えていかねばなりません。お風呂は一週間に二回。皆の体は栄養失調と病気で青白くやせ、あばら骨が何本も見えていました。布団は綿が固まって足が冷たく眠れません。やっとぬくもったころには朝で、服にはシラミがわき、かゆくてたまりませんでした。親は面会の時にリュックいっぱい食料を持って来てくれました。近くの食堂で母や姉たちと会い、皆が寝てから布団の中で差し入れの硬い硬いもちをかじります。こんなにおいしいものがあるのかと思いました。二十年三月十八日、肺門リンパ腺という病気になり三泊四日の休暇で帰宅。そのまま床に就き、療養中に原爆と敗戦のニュースを聞くことになりました。

軍国主義の下、受けられなかった授業

野 中 藤 夫

昭和八年生（西間下町）

私が五歳の時、その二年前に出征していた父が支那事変で戦死しました。昭和十五年、私は支那事変の終結前後に小学校に入学。そのころまでは勝ち戦だったためか、割と平和な感じでした。昭和十六年十二月八日、二年生の時に第二次世界大戦が始まりました。十六年から十七年ごろまでは戦況が良かったせいかな、あまり生活の変化は感じられませんでした。日本軍がシンガポール付近まで南下を始めたころから、戦いは下り坂になっていったように思いました。

しかし、庶民にはあくまでも日本は勝っているという情報が流されており、十七年から十八年の初めのころまでは、先生たちからも勝っていると言われていました。その後、戦況は危うくなっていき、東京が大きな爆撃を受けたのも、十八年ぐらいだったと思います。

二十年三月、春の彼岸のころ、高原飛行場が攻撃を受けました。当時、春と秋に大掃除をしていましたが、四月の掃除を始めたころに人吉は来襲を受け、駅通りが機銃掃射されまし

た。四月十二日か十三日ごろだったと思いますが、南町に営林署の貯木場があり、そこに飼われていた馬が顔を出したため、兵舎と間違えられて掃射されたとも聞きました。

当時は分散教育で、公民館で授業を受けていました。学校は閉鎖されて軍の駐留に使われており、講堂は武器の機材置き場、教室は兵士の宿舎として使われていました。村山、西瀬、西間上の三カ所に横穴防空壕があり、万が一に備え兵士の連絡所として本部（通信）が置かれていました。空襲警報時は役所からサイレンが鳴らされ、各町内に電話連絡が入られました。各地区には防空連絡の係の人がおり、メガホンで空襲警報や夜の消灯を促していました。戦争に行っていない男性で組織を作っておられたようです。

終戦までは、学校からも「少年航空」「少年海軍」として高原に訓練に通い、足袋にわら草履ばきで朝四時半ごろから出かけていました。高原に飛行場を作る時には、母たちも奉仕作業として行っていました。また、大畑紫笠には軍用道路が作られ、それも奉仕作業によるものでした。「米軍が沖縄を占領したら次は鹿児島上陸だ」と言われており、鹿児島へ軍用品を運ぶための道路で、紫笠から加久藤へ続くトンネルのない峠道でした。軍用道路のため勾配をつけ、車が通れるように作っていましたが、完成したのか実際に使われたのかは不明

で、現在はループ橋として生まれ変わっています。

小学四年生から分散教育となりましたが、食糧増産、馬草刈り、カライモ作りなどで授業は全く受けていません。河南中学(現人吉一中)の二年生の先生から、「昭和八年生が一番ほんくら」と言われたことがありましたが、本当に六年生まで何も勉強していない状態で、大事な九九も習っていませんでした。そのころまでは学校も義務教育制になっておらず、中学も都合のある人は二年生で終わることもできました。昭和二十一年から二十二年に六・三制になり、小六、中三の義務教育制になりました。当時はポッポ草を夏に刈り取り、コウゾのように皮をはいで繊維を取り、服にして着ていたこともあります。麻のような感触の布ができていました。

現在の石野公園の下付近に東間校の農場があり、三十分くらいかって赤池原町から下り、畑へ行き来していました。昭和二十年、その畑で作業中に空襲警報がありました。B29の襲来です。大編隊で北の方向へ通過していましたが、北九州が攻撃されたようでした。その編隊の様子は、今の高い所を飛ぶジェット機をいっぱい並べたような感じで、アルミのような機体の色が真っ白くきれいに見えました。



二十年六月、沖縄が攻撃され、学徒動員の生徒たちが火炎放射器で焼かれ、壊滅状態になっていると周辺から情報が流れました。そのころは、町内の人数は二百七十～二百八十人で、ラジオや電話は数軒にしかなく、口伝えの情報や連絡でした。国防婦人会(主婦らが発足させ、戦争協力機関として活動した女性団体)が、町内に支え合っていました。隣り組の歌詞(トントンカラリと隣り組、障子を開ければ顔なじみ…)にあるような状況で、住民同士が互いに教えられたり教えたりしていました。

戦時中は外国の言葉や歌、文化的なことは一切禁止で、徹底した軍国主義の教育がされており、むやみなことは言えませんでした。ちまた

では、戦争終盤の情報で「日本はもうダメ、負け」と言われていましたが、公の場では絶対口に出さず、そう思っていることを漏らさないようにしていました。

昭和十六年（二十年）の長い戦争の間には、みんな発言したいこともあったでしょう。今の北朝鮮を見ていて感じますが、そのころの日本はどうしても戦争を始めなければならない状況にあったのかもしれませんが、国民が払った代償はあまりにも大きかったのではないのでしょうか。

戦後、六十年がたちました。人も六十歳で還暦を迎え、元に戻り第二の人生となります。竹も六十年に一度、全部枯れて新しい竹に生まれ変わります（苦竹の実がついた時は翌年枯れる）。日本も戦後六十年、今が変わり目、節目の時。今後、絶対に戦争を始めることがあってはならないと思います。大事なことは「真っ直ぐなことは一つ、そこから外れてはいけない」ということです。

三十六歳で召集された父の無念な死

濱口 敏行

昭和八年生（願成寺町）

昭和十五年、私は人吉東尋常高等小学校に入学。翌年、国民学校という名前に変わりました。教科書は十四年十二月六日発行の小学国語読本巻一を現在も持っています。「サイタ サイタ サクラガ サイタ コイ コイ シロ コイ ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ」と、カタカナから始まりました。科目は小学国語読本、修身、算術、初等理科、唱歌などでした。

十六年、国民学校二年生になった十二月八日、日本は米英に宣戦布告し大東亜戦争が始まります。このころ、物資はまだ何でもあり、日本が攻めていく様子をラジオや新聞で見聞きました。五年生から六年生にかけての十九年、有利に進んでいた戦況は長くは続かず、少しずつ生活が厳しくなりました。十月十一日のおくんち祭りの日、肥後西村駅に勤めていた父は、三十六歳で赤紙の召集令状を受け出征。下関の重砲隊に入隊し一週間で満州に出兵し

ました。

終戦後、父はソ連の捕虜となり、昭和二十一年一月三十一日に病死したと、後になって秋田の戦友の方から手紙をいただきました。その間、満州にいた時の父のはがきを何通か受け取っていました。中三の時、お骨を受け取りに市役所に行くのと外の倉庫に呼ばれ、位牌いはいの入った箱がいっぱい積んでありました。政府広報にも載っていましたが、父は零下三〇〜四〇度で木の伐採などの労働をしたようで、さぞつらかっただろうと思いました。

十九年ごろには生活も厳しくなり、学校では食糧増産のため校庭いっぱいに一メートル四方の畝うねを作り、サツマイモを植えました。また、学校の畑がある土壌原にも行つてサツマイモを作りました。教室に焼夷弾が落ちた場合、弾が止まってくすぶり火が広がるのを防ぐため、天井板は木や唐竹で突き破ったものです。自宅の分は丁寧に外したので、今でもきれいに収まっています。

校庭には天皇の奉安殿があり、祝日には開けて全生徒でお祈りをしていました。また、あこがれていた航空少年隊では上級生がグライダーに乗り、下級生がゴムを引っ張って飛ばします。友達と球磨川で水泳をして遊んだり、飛行場まで何回も「赤トンボ」と呼ばれる二枚



羽根の練習機に乗りに行ったりしたものです。二十年四月からは分散教育が始まり、教会と願成寺に分かれて勉強しました。

大変だったのは防空壕掘りで、庭に掘った二カ所のうち一つは食料庫でした。地域では婦人部のお母さんたちの防火訓練、規律訓練、竹やりの練習で、「エイヤー」と黄色い大きな声が飛んでいました。警戒警報や空襲警報の時には願成寺の釣り鐘が乱打されました。

やがて、軍用道路の建設が始まりました。現在の相良村柳瀬の台地に向けた海軍航空隊の飛行場に通じる道路です。人高通り、今の願成寺郵便局西側の三差路445号線

が交わる地点から東へ。わが家の土地も道路用地として接収されました。しかし、東部は水田、その向こうはシラスの一二三ヶ迫で、どちらも雨に弱く、なかなか工事は進みません。この工事は完成せずに終戦を迎えます。終戦の玉音放送をラジオで聞き、涙が出ました。

母は三十三歳で夫をなくし、祖父母と共に六人の子育てと農作業に励み、六十五歳で亡くなりました。思えば祖父や母と一緒に田畑に行き、たくさんの仕事を教わりました。すべて手作業です。しっかりとした祖父や母、やさしい祖母のもと、食べ物にあまり困らなかったのは幸せだったのかもしれませんが。それでも、戦争当時の弁当は麦と梅干しの入った日の丸弁当でした。高原たかんぼろ飛行場から人吉中・現人吉高―高射砲塚―人吉西小とグラマン機が機銃掃射して行ったのを前の土手に這って見上げていました。

無念に死んでしまった父を思うと、割り切れないものがあります。つらかったらうとの思いは今でも消えません。戦争はあつてはなりません。

飛行機組み立てで過ごした五カ月

林 田 典 子

昭和三年生（願成寺町）

私は現在のおさざり町にあった岡原尋常小学校を卒業し、昭和十六年四月に人吉高等女学校に入学。当時、岡原からの通学は交通の便が悪かったので、女子寮に入って通学しました。その年の十二月、大東亜戦争が始まり女学校での勉強は落ち着いて受けられなくなりました。各家庭に農業奉仕で田植えや稲刈りに行き、食糧増産のため上原原城でカライモや野菜を栽培しました。相良村の高原では竹やぶの開墾作業に精を出し、夏の暑い日はのどが渴いたり頭痛がしたりと苦しく、とてもつらいものでした。ここでは、朝鮮の人と一緒に働いていました。時節柄、英語の授業はほとんどなく、体育の時間はもっぱら竹製のやりで突きの練習をしたり、手榴弾に似た物を遠くに投げる練習をしていました。

女学校四年の十九年十月三十日、学徒動員で熊本市健軍の三菱工場に行き、飛行機組み立ての奉仕作業をするようになりました。健軍に近い秋津の寮に入りましたが、寮での生活は

いろいろと苦勞も多い日々でした。一室が五、六人部屋で、学校や家庭への恋しさは毎晩のこと。夜中は空腹で熟睡できず。食事は主食となるご飯が、ほんの少しの米粒と、たくさんのカライモ、ヒジキ、糸コンニャクを混ぜた雑炊みたいな物。孟宗竹を節のところで切ったり焼いたりして食べました。梅干しやゴマ塩、いり大豆など、家族の者が交替で持ってきてくれるのが何よりの楽しみでした。

工場での作業は機体へのハンダ付け、鉦^{びょう}打ちが主でしたが、慣れない作業で、「こんな、あまいハンダ付けで良いのかな」と思ったりしました。鉦^{びょう}も五カ所打たねばならないところを三カ所で良かったり。完成した機体の座席に仲間たちと乗ってみた時のうれしさは何ともいえず、戦争に一部、加わったようで感無量でした。ただ、この飛行機に若い特攻隊の人が乗り、再び帰って来られないと思うと申し訳なく、胸が痛みました。

昭和二十年三月二十七日は、私たち女学校の卒業式でした。県下の高等女学校（阿蘇・松橋など）の生徒は工場の一室で、それぞれの学校ごとに代表の先生方の臨席のもと、簡単な卒業式が始まりました。来賓の方の祝辞が始まったところ、「空襲警報、全員待避」の声が飛び、

式は中止に。「伏せろ！ 伏せろ！」と怒鳴る声にどのようにしてわが身を守ればよいのか、ただ地面に伏せるのみです。プスップスッと機銃掃射の音、低空飛行の爆音に生きた心地はなく自分を失いそうでした。

こうして、うれしいはずの卒業式はB 29の機銃掃射で終わり、卒業証書もとうとう授与されず、今でもいただいていません。翌二十八日には荷物をまとめて秋津寮を後にし、五カ月間の学徒動員の日々は終わったのでした。

その後、二年間助教諭として勤め、おばの後継者として二年間の助産婦学校に進学。助産婦の資格を取得し、検定を受けて看護婦の資格を取りました。その後、保健婦研修所での一年を修了し保健婦の資格を取得。人吉、八代の保健所に結婚後も保健婦長として勤めました。五十六歳で県庁の衛生総務課の主幹として赴任し、六十歳の定年まで勤務。その後は相良の老人保健施設（みのり）、リバーサイド御薬園、桜の里の老人ホームの設立準備時より勤務しました。今日まで元気に過ごして来られたことに、今は感謝の日々です。

日本を守った先人を忘れずに

早田 亮彦

大正十四年生（北泉田町）

昭和十八年三月、県立人吉中学校を卒業した私は、陸軍予科士官学校に入学。自分たちの国は自分たちで守るという思いを、誰もが持っていました。士官学校の入学試験は身体検査が最初にあつて、それに合格した人が学科を受験します。体が弱かった私は水を飲んで体重を増やし、二度目の身体検査で合格しました。

予科で一年過ごした後、陸軍航空士官学校に入校。二十年四月に満州に渡り、戦闘機の訓練を受けました。八月九日にソ連軍が参戦したため、十二日に国境の通化（とんふあ）飛行場へ移動。十五日に終戦を知り、学校の命令で帰国することに。十六日、通化の一般の日本人と一緒に汽車で南下を始めました。釜山から船に乗り、二十日ごろ博多港に着きました。

帰国した私たちは航空士官学校の本部へ直行。山陽本線で大阪に行く途中の夜、原子爆弾で焼け野が原になった広島で、まだ青いリンが燃えているのを見ました。職業軍人は東海道本線に乗ると捕まるからということで、大阪からは北陸本線と信越本線に乗り換えて東京ま

で行きました。

埼玉の本部に帰ってみると、飛行隊の隊長が自決されていました。私は戦友と共に隊長の故郷の鹿児島へ、ご遺骨を届けに行きました。汽車は復員する人たちで満員のため座るところもなく、隊長のご遺骨は空けてもらった洗面台に安置し、二人でお守りしました。熊本まで来ると、川尻の鉄橋が爆破されていて通れません。熊本駅近くの母方の祖母宅に一泊し、八代から肥薩線で鹿児島へ向かいました。途中、車中で出会った先輩の原義敬さん（後に東小の先生）に私の荷物を預け、ご遺骨と軍刀だけになりました。隊長のご両親にご遺骨をお渡しし、鹿児島で一泊して肥薩線に乗り人吉に向かいました。私の乗った列車が真幸のトンネルを通過する前に事故があり、復員の人たちが多数亡くなりました。人吉駅に着くと駅前の文房具店で先日、先輩に預けた私の荷物を受け取り、両親が待つ湯前へ向かいました。自宅へ着くとすぐ警官がやってきました。軍人である私が復員して来るのがわかっていたのでしょう。警官は私の軍刀を没収に来たため、私はその場で軍刀をたたき割りました。

二十一年四月、熊本師範学校に入学。二十四年三月に卒業し、四月から人吉市立第一中学校の教員になりました。

誰でも、つらい戦争体験は話したくないものです。どうして戦争になったかを考えてください。本当の歴史を学んでください。日本が生きてきた道を、正しい歴史を大切にしてください。毎朝、新聞の天気図を見ると、東アジアのユーラシア大陸に沿って長く日本列島が伸びているのが、よくわかります。大昔から大陸と生活や文化の交流があり、時には争い事も起こりました。鉱物資源も乏しい日本ですが、春夏秋冬の四季に恵まれた風土が日本人を心豊かに育ててくれました。

振り返ってみますと、私たちが青春をささげた昭和の時代は、東から押し寄せて来る「銃を持った民主主義」と、北と西からひたひたと迫る「共産主義」との間で振り回された時代だったでしょう。若い人たちよ、日本の国を守った先人の魂を敬い、素晴らしい日本人としての誇りを持ってこの国を守り続けてください。

学徒動員先で病氣になり帰宅

春 口 照 代

昭和四年生（北泉田町）

私は昭和四年二月、九人兄弟の六番目として生まれました。ぼたん雪の降る寒い日だったと聞いています。川村の尋常小学校を卒業し、昭和十六年四月に人吉高等女学校に入学。このころは、すでに戦時下で、女学校に入学したものの授業を十分に受けた記憶がありません。上原原城でのカライモの栽培、農家に出向いての麦刈り、稲刈りの手伝いなど食料増産のための奉仕作業が主でした。

慣れない作業ながら、夏の暑い日も一生懸命に頑張りました。普通、一週間といえば日月火水木金土ですが、私たちの一週間は月月火水木金金。英語の授業は、ほとんどありません。体育は竹製のやりでやり突きの練習や、手榴弾に似た物をできるだけ遠くに投げる軍事訓練のような内容でした。時折、体育館で陸軍や海軍の方の破れた制服の修理をしました。

女学校四年生になった昭和十九年十月、学徒動員で熊本市健軍の三菱工場へ。秋津の女子



寮に入り、そこから奉仕作業で飛行機を作る工場に通うことになりました。仕事は機体の鉦打ちや配線のハンダ付けなど。完成した初めての飛行機を目の前にして、その大きさに驚き、座席に座って少し喜びを味わいました。ちょっと離れた所に二、三人の若い航空パイロットの方の姿が見え、話が盛り上がっているのか高い笑い声がかすかに聞こえてきます。この飛行機でいつか戦場へ飛び立って行かれるのかと複雑な思いでした。

寮生活での食事は粗末なものでした。カライモにはんの少し米粒が混ざってあるご飯に、家から持ってきたごま塩、梅干しをおかずの足しにしました。器は孟宗竹を節のところで切って作っ

たお椀で、水の使用も制限されていたため、竹の器の底がドロドロとして気持ち悪く感じました。食べ盛りの私たちの夜のおやつは、いった大豆で同室の人たちと分け合って食べたものです。ある日、私の姉がリュックにごま塩、梅干しをたくさん入れて慰問に訪れ、元気づけてくれた時はとてもうれしかったです。

そんな中、微熱が続いて体がだるく、きついと思いながらも仕事を頑張っていたら、肺浸潤はいしんじゅんという病気を発病していると判明しました。ちょうど動員の交替の時期で、寮からわが家に一時帰省でき、そのまま自宅で療養生活を送ることになりました。同級生と一緒に再び秋津の寮に戻って仕事をするのができず、悔しい思いで卒業式間近まで過すごしました。療養中に先生の勧めで師範学校の試験を受けました。当時は、今のように医学が進歩しておらず薬も十分ではなく、一向に治療の効果は見えません。毎日、微熱や体のだるさが続き、食欲が全くない日々でした。

二十年三月二十七日、小康を得た私は卒業式に出席。式は熊本市の三菱工場で行われ、来賓のお話が始まったところ空襲警報に見舞われました。やっとの思いで無事に避難できましたが、卒業証書をもらうこともなく翌日、秋津寮を後にして帰宅。五カ月間の学徒動員の日々

でした。

その後は、川村の自宅で療養を続けて元気になりました。終戦後は青年学校の指導員として勤めたりしましたが、まだ教材が不足していました。二十三年ごろ、各地で婦人参政権についての学習会が始まり、私はほかの先生と共に学習会を巡回しました。その後、農林省直轄人吉球磨食糧事務所人吉支所に勤務。結婚を機に家庭に入り、主婦として家庭を守りました。四十四年からは社会福祉協議会に勤めました。四十六年社会福祉主事を取得しました。

戦争で青春時代もなく、勉強も十分にできませんでした。でも今は、当時の苦しかったこと、楽しかったこと、学校生活を思い出して精一杯、前向きに生きています。

弱音を吐かず戦後を乗り越えた母

東 和子

昭和十五年生（願成寺町）

私の母、倉本愛子は明治四十三年に山形県新庄市に生まれ、両親と大連に移住。両親は大連市の郊外で果樹園を経営していました。昭和四年に同志社女子専門部（現・同志社大学）

を卒業し、大連の幼稚園に就職。大連関東州庁に勤めていた人吉市出身の倉本政頼と出会い、昭和七年に結婚しました。当時の大連市は環境が整備された美しい街で、文化の香り高い豊かな生活を送っていました。

母は五人の子どもに恵まれましたが、昭和十四年に次男と次女が、十七年三月には父も三十六歳の若さで病死。十二年に始まった日中戦争で生活が不安定になり、病気の治療も思うようにできなかったのだと思います。母は三十三歳にして、十歳の長女、八歳の長男、二歳の三女（私）の三人が残されました。その年の十一月から母は関東州庁に勤め始め、父亡き後の生計を立てました。二十年に終戦となり、敗戦国となった日本人の私たちの大連での生活は、次第に不安定なものになっていきました。そのような生活の中でも夕食後、母が弾くオルガンに合わせて歌ったフォスターの曲や、賛美歌が懐かしく思い出されます。

二十二年二月、私たち親子は父の遺骨と共に、父の故郷である人吉に引き揚げてきました。父の実家は九日町にありましたが、そこにはすでに他の人が住み込んでいました。やむなく下戸越の兵舎に入居しましたが、兵舎には台湾から引き揚げてきた家族や戦争などで家をなくした人たちも多く、それぞれ大変な生活でした。それだけに、互いに助け合って生活して

いました。母は周りの人のお世話で、ワカメやイリコなどの海産物の行商をして夜遅くまで働き、私たちを養ってくれました。

その年の十月、母は市役所勤めの方のお世話で、西村中学校（現・錦中学校）の英語と家庭科の助教諭として勤務することになり、リヤカー一台分の家財を積んで西村に引っ越ししました。西村の借家は元は農家の養蚕室で、お風呂は隣にもらい風呂でした。当時は大家族で、何人もの人が入浴した後のお風呂はせっけん臭かったことを覚えています。それも今だから言えることで、当時はありがたく、人の親切に甘え、近所の方々からもよく野菜やカキなどをいただきました。そのころを思い出すと、私たちに与えてくださった恩はいつまでも忘れられません。

当時、兄は中学生から高校生になるころでしたが、同年の男友達と裏に流れている球磨川で毎日、ウナギ捕りや魚釣りをして遊んでいたことを、今は楽しい思い出として話しています。

母はその後、助教諭から教諭となり、上村中学校、五木中学校、山江中学校、最後は錦中学校で退職しました。その間、住居は上村、相良と移り住みましたが、四十二年に現在の人吉市に家を建て、この地に落ち着きました。私たち三人の子どもも高校や大学に進学し、今

はそれぞれの地で結婚し家庭を築くことができました。

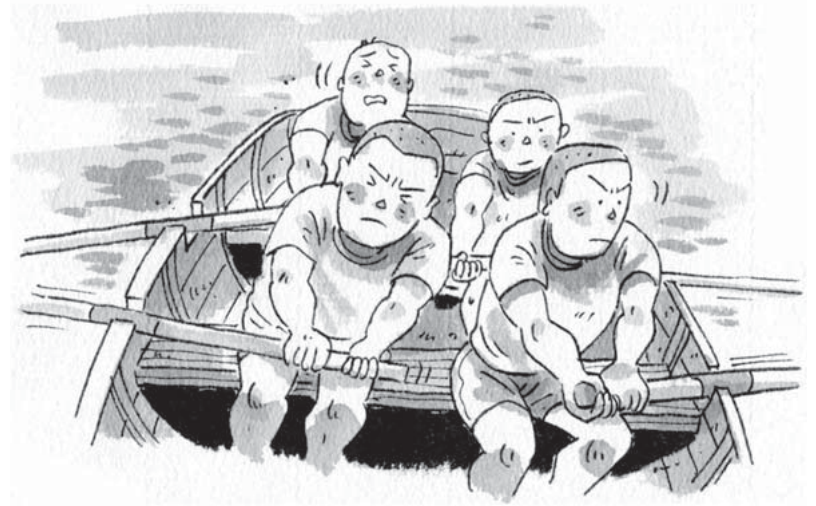
母は山形生まれでしたが、大連を離れることになった時、両親がいた山形に帰らず見知らぬ人吉の地に帰ったのは、亡き夫への深い思いがあったからかもしれません。どんな時にも決して弱音を吐かず明るく振る舞い、常に前向きに物事に取り組んだ母の姿勢は、私たちにも大切な人生の道しるべとなりました。私は今も「口は人を傷つけるけれど、手はどんなに汚れても洗えばきれいになる」という母の言葉を大切にしています。

佐世保の海兵団で受けた厳しい訓練

東 一穂

昭和三年生（下田代町）

私は昭和三年に西村（現錦町西）に生まれ、幼児の時に藍田村（現人吉市）田代に移りました。八人兄弟の長男で大畑小学校、高等小学校を卒業し、家業の農業を手伝いました。昭和二十二年二月、十六歳五カ月で志願兵として徴兵検査を受け、海軍を希望。どうせ兵隊になるのなら一日でも早く入隊しよう、また、陸軍は歩くことが中心だが海軍は軍艦に乗れるからいい



だろう、というくらいの気持ちでした。

二十年二月一日、長崎県佐世保市で南大村湾に面した針尾島にあった「針尾海兵団主計科」に入団。海兵団の生活は五時の起床ラッパに始まり、全体遊戯(体操)の後に朝食。「三分で食べよ」とか、ひどい時は「一分で食べよ」と命令が出たりします。休憩後は日課があり、特にカッター(小型のボート)の練習は大変でした。班対抗で競争させられ負けたら気合いを入れられます。大きなオールをこいで終わるころには、しりの皮がむけて歩くのが苦痛になるほどでした。

また、日常ささいなことで班長に殴られることが多くありました。特に、「精神注入棒(一メートルほどの長さの木の棒)」や、一握りもある青

竹でしりを思い切り二、三回殴られる。立っていられず倒れると、また立たせて殴る。気絶すると真冬でも防火用のバケツの水を二、三杯顔にかけて気づかせます。

宿舎では皆、ベッドを並べていますが、よく持ち物が取られました。なぜか帽子がなくなったり洗濯した物が取られたりで、油断できません。自分の所有物がなくなれば必ず罰で殴られるから、誰かの物を取って間に合わせる。次から次へと人の物を取る連鎖で、たとえば点呼の時に帽子をかぶっていなかったら殴り飛ばされる。ベッドに置いた衣囊(いのう)〔衣類などを入れる袋〕の中に入れておいた物でも油断すると、いつのまにか取られたりしていました。

一班は班長のもとに十五、六人で、一人のミスは全体責任になります。食事時でも、「テーブル支え」という罰で、全員の食事を配膳した大きなテーブルを長時間、頭の上に支えさせます。誰かが力尽きて手を下げると食器が滑り落ち全員、食べられなくなる。全く理不尽なことが行われていました。こうした生活の訓練が三カ月あった後、同期の者全員が佐世保海兵団に移り、十五日間ほど主計の訓練を受け、日本国内や南方地方など各地の部隊へ配属されました。私は佐賀の唐津派遣隊に配属され、そこには三百人ほどの兵が公民館のような家を宿舎としていました。

主計の仕事は衣服や食料、部隊で必要な物資などの管理で、毎食の準備も行いました。海軍でも二十年五月ごろは毎日、開墾や食料生産の作業が主で、空襲もあり十分にはできませんでした。八月十五日の終戦の玉音放送は昼食の準備中でしたが、すぐに終戦とわかり、翌日には約三百人いた兵がほとんど復員していきました。

やがて、佐世保鎮守府（＝軍港に置かれた海軍の機関で所属部隊を指揮・監督した）から数人の上官が物資の引き継ぎにやってきました。私は海軍上等主計兵として、物資整理と引き継ぎのため一週間近く残務整理をし、上官に全てを渡して二十日に復員。唐津派遣隊では終戦による混乱は一切ありませんでした。

軍人の父を亡くし必死で働く

深 水 和 子

昭和十年生（西間下町）

私の父は阿蘇出身で海軍の軍人でした。十二人兄弟の五男で、母は公立病院の看護婦。両親は昭和七年に結婚し、十二年には台湾に住んでいました。私は十六年に佐世保の小学校に

入学し、その年に弟が誕生。父は上海にいましたが十七年に人吉に帰り、紺屋町のおじの家へ。一年間、世話になった後、十八年に西間町に移転しました。

十九年、父がマーシャル諸島で玉碎。その時、母は三十三歳で葬儀は父の実家の阿蘇で執り行われました。その後、母は永国寺の前にあった農機製作所で働き始め、再婚話はいろいろあったものの、子どもがいるからと断ったそうです。当時は食べ物が少なく、キャラコや天竺木綿などの衣類を農家に持って行き、米と交換していました。

学校は三年生まで東校、四年生から東間小へ。運動場の隅が畑になり、カライモ作りが行われました。もっこを二人で持ち、「馬ふんひらい」といって馬ふんを集めに行きます。畑を開墾した所に埋めて肥料にするのです。また、釜のくど（今の石野公園）までカマやクワなどを担いで歩き、畑を作りに行きました。カライモやカボチャを作っており、収穫すると目の色を変えてかぶりついていました。

学校には、はだしで通い、冬はわら草履、雨の日は竹の皮でできた「たかんぱち」をかぶって行きました。どこも同じですが、この上ない貧乏で、寒いときはガタガタ震えていました。小遣い稼ぎに九日町まで花売りにも行きました。

やがて分散教育が始まり、毘沙門堂に畳を敷いて黒板も机もなしで、代用教員によって一年から六年まで一緒の勉強がありました。勉強中も防空ずきんをかぶり、空襲が始まれば避難しなくてはなりません。永国寺の裏山に防空壕がたくさんあり、飛行機が低空飛行で飛んで来て、機銃掃射の弾がバラバラと落ちてきます。よく当たらなかったものです。

父の死後、父の実家の阿蘇で育てられたことがあります。冬休み、春休み、夏休みに汽車で阿蘇に行くと、駅にはおばさんが、まんじゅうを持って出迎えてくれます。農家だったので腹いっぱい食べられました。大きなザルにご飯が盛られ、ふきんをかけてつるしてあります。とうきびや阿蘇高菜もありました。父の兄弟の子どもたちも大勢、来ていました。母は米をもらいに阿蘇に行き、当時は米を自由に運ぶことが禁止だったので、背中に子どもをおんぶしてねんねをかぶったふりや、お腹の大きいまねをして米を持って帰りました。

お風呂はもらい風呂で、人が入った後の真っ白に濁った五右衛門風呂に家族で入っていました。水は川から汲んで沸かし、飲み水以外は米など一切を川で洗います。上流で魚を洗えば下流で洗濯をしているという状態でした。まきは永国寺の裏山を一山買って、木を切って担いで持ってきていたそうです。毎日、皆おなか为空いていましたが、必死で働かねば生き

ていけませんでした。

母は小野小町と言われるほどの美人でしたが、働きづめで十年ほど苦労しました。遺族年金が来るようになってから楽になり、娘と同居して孫の守りをしたり、三味線や日舞を習って八十六歳で亡くなりました。

南方で戦死した夫と弟

前田 ゆか志

大正七年生（北泉田町）

夫、牛島守は鹿児島の種子島で生まれ育ち、長じて鹿児島の薬局に勤めていました。戦争が始まり二十歳で入隊。中国で十年間、戦いました。その後、兄弟が朝鮮にいたので朝鮮へ行き、一年くらいして人吉のお兄さんの所に嫁探しに来ました。

私は近所の人の世話で夫と見合いし、その二日後の昭和十八年五月、青井神社で結婚式を挙げました。夫が三十一歳、私が二十五歳でした。その翌日に私の弟に赤紙が来て、夫のほうはそのまま朝鮮に帰りました。



私は八月に朝鮮に渡り、夫と京城（現ソウル）に住みました。十九年三月、おなかに子どもがいたので朝鮮を引き揚げ、人吉の実家に帰りました。夫は召集を受けて現地入隊し、ニューギニアへ。そして、二十年八月九日に戦死しました。同じく、弟も南方で戦死してしまいました。

私は実家で母と妹二人と同居し、塩販売などの配給所を営んで生計を立てました。家の裏に防空壕を掘り、いつでも逃げ込めるように家は開けっ放しにしていました。高ん原に予科練（海軍飛行予科練習生の略称）の基地があったので、夜になるとウォンウォンと音をたててアメリカの飛行機が飛来します。球磨川の川筋を低空飛行でやって来て、人吉市内と高ん原が空襲を受

けていました。その後には川端にずっと薬莢^{やつきょう}が落ちていました。

幼い私の息子は、警戒警報のサイレンが鳴ると自ら帯を持ってきて、おんぶされていました。昼間、サイレンが鳴らない時にご飯を炊いておにぎりにし、オムツを持って防空壕で休みました。防空頭巾をいつも備え、夜は外に光が漏れないように電気に覆いをかぶせる生活でした。

当時は何でも配給制で、カライモ、米、麦の粉、砂糖や塩など全部、人数に応じて支給されたキップと引き換えでした。配給だけでは足りないのです、自分でも必要な物を作ったりしていました。着物がボロになって修繕する糸もキップが必要でした。米は一日に一人につき茶わん一杯。雑炊はいい方でカボチャやカライモのツルも食べていました。

十九年に戦死した弟は、人吉市による市葬がありました。夫は二十年の戦死でしたが、人吉別院にトラックがいっぱいお骨を積んできて、名前を呼んで渡されました。箱をもらったときカタツと音がして、帰って開けてみると中にあったのは位牌^{いはい}だけでした。

現在、一人息子は市議会議員を三期務めて、薬局を営んでいます。同じ屋敷に四世代で暮らし幸せですが、ただ、足が思うようにならないのが残念です。毎月十三日に、遺族会の方々と相良護国神社にお参りをしています。戦争は、もう絶対にいやです。

下益城の開拓団で満州へ

丸 田 ヤエ子

昭和四年生（瓦屋町）

私は下益城郡坂本で生まれ、小学校卒業後、下益城の開拓グループに入った父に連れられ、兄や弟と一緒に満州に行きました。母は祖父母が二人きりになるということで満州へは渡りませんでした。下益城でも父は農業をしていましたが、仲間と一緒に新しい開拓地に行くということが“あこがれ”だったのでしょう。今思えば、戦争に巻き込まれに行ったようなものでした。

満州では私も毎日、兄や弟たちと農作業の手伝いをしました。食べる物は父がどこから買ってきていたようで、不自由はしませんでした。が、今のように水道もガスもありません。ヤンソ（草）を毎日刈って干し、たき物にしていました。水は二、三百メートル離れた堤の水を使っていました。満州の冬は、とてもとても寒いものでした。あまりの寒さに堤の水も凍ってしまい、氷をがち割って持ち帰り、温めて溶かしてから料理や飲み水に使っていました。外に出る時はマントを着て防寒靴を履き、雪の上をザックザックと歩いていました。雪の日

は外での農作業はお休みで、家の中でじっとしていました。荒野を開拓して田畑を作り、やつと稲穂が実ったのが昭和二十年八月。「よか米ができた！」と父は大喜びしました。

その喜びも束の間、八月十五日を迎えることになりました。終戦になると満州人が日本人の田畑を全部、縄を張って立ち入り禁止にしてみました。それは開拓仲間の一人が、スイカ売りに来た満州人をスイカ欲しさにたたいていじめ、奪い取ったことがあったからでした。満州の隣のロシア人が女性を襲うと聞き、家から外に出る時は、かまを持って野に行くふりをして遊びに行っていました。途中、日本人から殺されたのか、満州人が小川に浮かんでいるのを見たことがあります。隠れておくようにとの父の言葉で、私は友達二、三人と防空壕に潜んでいました。そのうち、女性だけで逃げてよその集落に行きました。

日本に帰国したのは終戦から一年後の二十一年八月。プサンから下関に渡り、母が待つ下益城の実家に帰り着きました。帰国後は、よそに住み込みで農作業の仕事をしました。朝は田畑に出る前に、むしろばたで袋を編むのが仕事です。そして、日中は田んぼで米を作り、夕飯が済んだら、また、むしろばたで袋を編んで夜なべをしていました。自分の家で農業をしてもお金はもらえず、外で勤めとして農業をすればお金をいただけるということで、仕事

がきついとかやりたくないかと思ったことはありません。楽しかったことは何ヶ月かに一度、松橋に映画を見に行くことでした。十八歳から結婚する二十九歳まで勤め、三十歳で長女を出産しました。

小学校しか出ていないので、もっと勉強したかった。そうすれば、お金の稼ぎ方や節約の仕方わかります。特別、楽しいこともつらいこともない、このくらいの人生かなと今、思ったりしています。テレビを見ていて感じるのは、今でもどこかの国で戦争があっているという。どうして、戦争がなくならないのかと思います。

旧ソ連収容所で過酷な抑留経験

丸 目 光 喜

大正十四年生（矢黒町）

昭和十九年十月十五日、十九歳で熊本十六部隊に入隊しました。私の場合は召集令状で呼び出されたのではなく、現役入隊（常時軍務に服している現役兵としての入隊）でした。熊本に一晚泊まり、その夜、満州の十八部隊に行くことを知人から伝えられました。入隊と同

時に新品の冬の軍装シャツ、ふんどし、ズボン下と地下足袋、巻脚半、水筒、雑囊（ざつもの）（＝種々雑多な物を入れる袋の意味。肩に掛ける布製のカバン）が配られます。

翌日、夜の十二時に出発。歩いて熊本駅に行き、軍用列車で門司へ。一晚民宿して輸送船で釜山へ渡りました。朝鮮の京城を通り、満州のハイラル（現中国モンゴル自治区）に到着。途中、奉天（ほうてん＝現中国遼寧省瀋陽市）で停車しました。しかし、十八部隊は南方へ出た後だったため、ハイラルで国境守備隊一五一に編入され、初年兵教育を受けました。

部隊は一度に多数の兵隊が入隊したので編成替えがあり、部隊名も満州第三六二部隊となり、我々が所属する中隊は大隊本部中隊でした。軍旗も拝受して十八部隊の空兵舎に移り、それぞれの勤務に就きました。その後、私は一期の検閲（軍隊での検査、試験など）を受けて一等兵に。二期の検閲の修行後の昭和二十年六月、部隊は興安嶺山脈のブトハ（現中国モンゴル自治区ジャラントン市）の山奥に、陣地を構築しに行きました。

八月九日、小さな飛行機が飛んで来て、ソ連と開戦したとの知らせが入り、弾薬を受領。十一日ごろ、留守中隊の人たちが五、六人、ハイラルから歩いて撤退してきました。ハイラルは全て爆破され、全滅したとのこと。十三日にはソ連軍の戦車隊がブトハの下まで入って

来ました。十三日夜中、興安嶺から出勤命令があり、牡丹江あたりがやられているから、ここに行くようにとの指示です。

十五日昼、ハルビン駅に着いた時に、天皇陛下の玉音放送を聞きました。一発の銃声が聞こえ、見習い士官が拳銃自殺したとのこと。ハルビンで下車し、宿営のため小学校に向かいます。夕食後、ハイラルから本願寺に避難してきた軍属（ぐんぞく）軍人でなくて軍に所属する文官、文官待遇者など）や軍関係家族の人たちを警備するよう命じられました。子どもたちの用便の世話などする中、断水で若い母親の母乳が出ず子どもが死んでいきます。その遺体を毎日、板壁などの板を集めて作った箱に入れて埋めました。若い娘さんが水をもらいに行くと、そのまま帰って来ませんでした。

三日ほどして、部隊は武装解除して避難民と一緒に行動するようにと命令が来ました。軍服を脱ぎ、避難民と共に帰国するつもりで天幕をリュックに仕立て、食料もたくさん入れて準備をしていました。ところが、朝まだ薄暗い中、ソ連兵が自動小銃を向けて男を皆、引つ張って行きます。着の身着のままです。途中、ハイリンで野宿しましたが食べ物も与えられず、このままでは死んでしまうと思いました。ちょうど、近くに日本の部隊が駐留しており、

その中に所属中隊を見つけ原隊復帰として、本部要員になりました。

十一月七日、内地帰還のため牡丹江駅を出発。国境を越えてウラジオストクへ行くと船が待っているということでした。しかし、貨車に乗った途端に鍵をかけられ翌日、思っていたのとは反対の方向から日が昇ります。「シベリア行きだ、だまされた」と知りました。混乱の中、貨車に二十日以上乗せられ、食事は一日一食という状況でした。

その後、バルナウルの収容所に三年間いました。そこには、たくさん収容所があり、工場のボイラーの石炭積みや貨車の石炭降ろしなど雑役の仕事をさせられました。昭和二十二年十月ごろ帰還命令が出て、私たち作業大隊の総員、約八百人が営門前に整列。そのうち、ソ連将校から名前を呼ばれた者は列外に出されます。帰還停止の該当者で、その中に私も入っていました。兵隊二十人、下士官が若干名、将校全員が、直ちに同じバルナウル市内の大きな鉄道関係の工場近くにある、小さな収容所に入れられました。そこで一年間、工場の鉄くず集積や貨車積みなど、いろいろな雑役をしました。

二十三年四月下旬、帰還命令でナホトカへ。帰還に際し、作業服と新品の星の付いたままの日本軍の戦闘帽をもらったので身に着けていくと、日本人の思想指導員が来て戦闘帽をか



ぶっている理由を尋ねます。「ソ連兵がくれた」と言うなり、乗ってきた貨車から降ろさず、再び奥地にやらされました。ウオロシロフ（旧ソ連沿海地方の地区）という土地で一冬を過ごしました。当時、厳しく目を付けられていたのは、憲兵、警察、ブルジョア、地主、官憲などで、私の家は地主で私自身は検察庁に勤めていました。二十二年に帰国できずに残された者は、皆そうした理由がある人ばかりでした。

二十四年十二月、再びナホトカの収容所（作業大隊収容所）に移動。ここが一番、厳しい状況でした。ソ連批判や、その他のことも一言も口にできません。石割りをして海に入れ、港を作る土木作業をしていました。帰国せんがため

に共産主義の勉強もしましたが、日本に戻って半年くらいは日本の公安警察にも監視されていました。

収容所時代、死体を運んだことが三回ほどあります。倉庫に裸の死体は何体も積んであり、骨ばかりで尻にも肉が付いていませんでした。栄養失調で餓死し、凍ってしまった遺体でした。そりに重ねて積んで運び、まきをたいて凍土を溶かし、四十センチほどの穴を掘って埋めました。

昭和二十四年七月二日、収容所から船に乗り、日本に帰還しました。その後、昭和四十年に全国抑留者連合会が結成されました。しかし、どういう理由で私たちがシベリアまで連行されたのか、いまだに政府にもわからないままです。また、抑留者は捕虜とは異なります。その区別を若い人に伝えたいのですが、ほとんど知られておらず残念な思いでいっぱいです。

戦争で暮らしが一変、家業を手伝う

三 倉 重 成

昭和十四年生（瓦屋町）

私は中国の大連で、六人兄弟の四番目に生まれました。大連は五月ごろアカシアの花が咲き香るきれいな町で、広島市出身の父は貿易会社を営み、戦時下とはいえ平和に暮らしていました。

昭和二十年四月、私は大連国民学校に入学。太平洋戦争は八月に終戦となりましたが、ソ連軍が来て毎晩、物を取ったり暴行するようになり、私たち家族も近所の人たちと逃げ回りました。女性は男装してソ連兵に襲われないよう用心し、隣り組で自警団をつくり、にわかロシア語を習って身の安全に気を付けました。

九月には立ち退き命令が下り、日本人は一地区に集団移住させられました。その一カ月後に再び移動命令が下ります。そこでは一軒の家に二家族が住み、真冬になっても暖房もなく水道は凍結。電気一灯で暗く不便な生活を強いられました。食料は配給制のような形で一日一食に。時には食べられないこともあり、仕方がないので寝て日を過ごすこともありました。

やがて、日本人は内地（日本）引き揚げのため、続々と大連港に集結し始めました。しかし、父は会社経営者だったため、資本家階級は人民の敵だとされ引き揚げ許可が下りません。秋が過ぎ冬になっても許可されず、年を越して食料も燃料もだんだん厳しくなっています。今思うと、親の気持ちは悲痛であったと想像します。

一家に許可が下りたのは、他の家族より半年遅れの二十一年二月末でした。引き揚げ船の興安丸で舞鶴港に上陸。母方のおばを頼って葦北郡津奈木町に身を寄せ、四月に小学一年に再入学しました。

父は大連時代に蓄えた資金を何とか持ち帰り、人吉市の現在地かなりの広さの農地を手に入れました。しかし、農地改革により大半の優良な田畑が自作農家に取り上げられてしまっています。父は持病があつて力仕事が出来ず、母が生け花の先生の免状を生かして教室を開き、細々と家計をやり繰りしました。

一家の希望だった長兄は戦前、東京外語大のドイツ語科を出ていたので、「新制中学の英語教師に」と市の教育委員会から何度も要望がありました。断っていました。軍隊に身を置いた者として、敵の語学を教えることや民主主義に対する考え方など、なじめないものがあつ



たと話していました。兄はしばらく農業に従事した後、二十六年に試験を受けて国家公務員となり、人吉を離れました。兄の仕送りで一家の生活は少し息をつくことができました。

残された農地で収入を得るため、父はつてを頼ってヤギを仕入れて飼い、養鶏を始めました。ヤギの乳は我々子どもの栄養源になり、鶏卵は大きな収入源になりました。ヤギ二頭、ニワトリ二十羽から始め、最盛期にはヤギ六頭、ニワトリ二百羽の規模でした。兄弟三人で父を助けて動物の世話をし、卵は旅館などに届けました。小学校から中学、高校時代にかけて朝早くから夜遅くまで、えさやりや小屋掃除など時間がいくらあっても足りない仕事量でした。きつい、

汚い仕事で下の弟たちは途中から逃げ出しても、私には逃げ出すことはできませんでした。弟と川でウナギを捕まえて小遣いにしたこともありました。

貿易を営んだ父はワインや洋酒を好み、焼酎や、杯のやり取りにはなじめず、地域とのつながりが薄かったようです。その後ろ姿が、この地で生きるうえで大事なことを私に考えさせてくれ、現在は老人会長や公民館の理事などを務めています。

昔のことを振り返ると苦しくも懐かしい思い出ですが、外地での恐ろしい体験を思うと、平和のありがたさを実感する昨今です。

三カ月の結婚生活。待ち続けた戦後

溝 下 榮 子

大正八年生（上新町）

私は小学三年生から実家を出て、球磨郡相良村のおじの家で子守奉公をしていました。五年生の時におじは亡くなりましたが、六年生までおじの家におり、小学校を卒業しました。当時、女性は満州（中国の東北一帯の俗称）に身売りされる人も少なくなかったのですが、私

は熊本市の製糸会社に就職でき、昭和五年(十一歳)から十年あまり勤めました。それまで勉強する機会がなく何も身につけていなかったため、上司からはよく叱られ、つらい思いを静めるため日記を書くことが習慣となりました。

十七年九月十五日、相良村の二十九歳の人と結婚。知人の紹介もあり、朝鮮(現在の朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国に相当)で仕事に就いて生計を立てるため、九月三十日に朝鮮へ移住しました。夫は会社就職し、十一月一日に借家住まいから新築の住宅に入居できました。周りは日本人ばかりでしたが周囲の状況がよく把握できず、物資も配給のみで暗中模索の日々でした。

同年十一月二十二日、夫に召集令状が届き、二十六日に入隊との内容。夫は二十四日の夜、一人で日本に向けて出発しました。あまりに急で今後のことを話し合う時間もなく、私は一人で朝鮮に残ることになりました。夫は満州十八部隊に入隊したため、いずれは二人で日本へ帰れるかと思っていました。一人の生活はとても寂しかったのですが、子どもを抱えた奥さんたちはもっと大変だろうと、自分に言い聞かせるしかありませんでした。

昭和十八年、日本の両親から帰国するようになると言われて翌年の六月、一人で日本に帰りま



した。夫は自分が帰るまで実家にいるようにと言いましたが、結婚して家を出た身では実家に帰りづらく、おばの家にお世話になりました。実家と夫の実家の手伝い、時には土木作業をしながら生活費を稼ぎました。後でわかったのですが、夫の入隊の支度金、会社からの給料は夫の実家に送られており、私には届いていませんでした。夫の実家も家族が多く生活が苦しかったのだろうと、仕方ないことだと思っています。

昭和二十年、終戦の年に戦地の夫が朝鮮にいる知人へ手紙で、「今から南方に行く。妻をよろしく頼む」と書いてあったと聞きました。この年に国(県)から、「(ご主人は)行方不明だから戦死したことにしてくれ」と依頼がありました

が、私は承知しませんでした。その後、夫からは何の連絡もなかったのですが、二十三年ごろ「栄子、苦劳かけたね」と大きな声で帰って来た夢を見ました。現実のようで今でも忘れることはできません。昭和二十四年の最後の引き揚げ船でも帰らなかったため、「戦死したのかな……」と思うようになりました。それでも、ひたすら夫の帰りを待ち続け、土木作業などで生活していました。

二十八年、人吉市内の履物屋に就職。店の下の部屋を借りて新たな生活が始まりました。三十八年六月三十日、熊本市春日のお寺に夫の位牌が入った白木の箱をもらいに行きました。この時、初めて夫の戦死を受け入れざるを得ませんでした。周囲の人はよくしてくれましたが、どうしても私はこんな目に遭うのだろうと時々、畑に出て誰にも言えない思いに一人で泣いたこともあります。夫の帰国を信じ、再婚話にも耳を貸しませんでした。

一生懸命に働いて店の人の信頼も得ることができ、昭和五十八年の店じまいの年まで店員として三十年間勤めることができました。生活も安定し、住まいも変えました。それまで、何のたしなみもしてこなかったので、三味線の習い事に精を出し、九州大会に二、三回出場したこともあります。造花も学び、生け花も楽しみました。習い事のおかげで、いい友達に

もたくさん巡り合えました。

昭和六十一年に現在地に引越し、今は妹と二人暮らしです。日記も昔のものは黄色く変色してしまいましたが、紐解けばさまざまなことが思い出されます。わずか三カ月間の結婚生活は戦時中でもあり、慌ただしいものでした。ただ、夫のことは決して忘れることはありません。

戦前・戦後の苦難を経験して

蓑 毛 英一郎

昭和八年生（瓦屋町）

私は小学校四年の時、免田国民学校から人吉東間国民学校に転校しました。父が免田校長から同校に転任したからです。講堂の横に四〇五メートルぐらいの魚雷が石の台座に置いてあったのが印象的でした。何年生の時だったか、海洋少年団員として訪れた高原飛行場では複葉機（赤とんぼ）が宙返りやきりもみの訓練をしており、そのエンジン音に「すごいなー」とあこがれを持ったものでした。

戦局が進むと、学校から田植え、稲刈り、麦踏みの勤労奉仕に出かけました。田の草取りをしていた時、足にヒルがくっついたことなど覚えています。当時はみんな食べ物に飢えており、手伝った農家でのよけまんに「握り飯が出た」とか「イモだった」とか、ワーワーと話題にしていました。学校には炭焼き窯があり、材料の木を古仏頂の山まで取りに行き、重たい木を抱えて学校まで歩いて帰ってきたこともありました。

昭和二十年の三月だったでしょうか。東間校の校庭で学校に駐屯していた兵隊さんたちと一緒にいた時、米軍の飛行機二十数機が高原飛行場爆撃に飛来しました。校庭から見ると、東林寺の向こう側の上空をグルグルと旋回しながら、やがて一機、次に一機と銀色の機体を輝かせて真つ逆さまに突っ込んで行ったかと思ったとたん、ドォーンドンとすごい音とともに黒煙がもくもくと立ち上がってきたのです。あつ氣にとられて見ていた時、「敵機だ、隠れろー」の声で慌てて学校の防空壕に飛び込みました。逃げ込むやいなやダダダッという機銃掃射の音が響きましたが、その銃撃目標は胸川岸沿いの貯木場倉庫だったものの、その時の感じとしては、今にも銃弾が私の体を貫通するのではないかという恐怖感でいっぱいでした。

この年の四月、県立人吉中学校に入学しましたが、戦局の厳しさとともに学校への通学はほとんどなく、各地区分団の作業に汗を流していました。雨天時には軍隊の物資を貯蔵した青年学校の教室で砲弾を入れた木箱の上などに腰かけながら、先生の漢文の授業を受けたことなども、今となれば懐かしい思い出です。

同年、つまり昭和二十年八月十五日が終戦の日ですが、その戦後も間もないころ、水の手橋を渡り東間の家に帰る時、今の市役所の裏あたりに昔は軍人会館という建物がありました。そこに進駐してきて間もないアメリカ兵がいて私を呼び止め、付近にいた小学生の女の子数人と一緒にして写真を撮りました。その際、アメリカ人がよくやるように私の帽子（戦闘帽）のひさしを上に向けてかぶらせ、撮り終わってからチューインガム一枚一枚を半分に切って配ったのですが、その時、私は敗戦国民として何か情けなく、初めて口にするガムの甘さより、かえって心の苦味を味わった気持ちでした。

戦争が終わり平和な世の中になっても、戦後の生活はそれは大変なものでした。我が家では父が公職追放を心配し、後七、八年の任期を残し校長を辞めたので、生活は一変してしまいました。まず父の収入がなくなった上に食糧難、物資の欠乏、現金封鎖、さらに追い討ちをかけるかのような急激なインフレの荒波の中、父は児童の学用品販売の仕事を、母は家で

商売のまね事みたいな店を始めたのです。幸い長姉が小学校教師だったので、いくらか暮らしの面での足しにはなったでしょうが、生活は苦しく、私も下校後など空き時間には父と一緒に自転車で荷物の運搬などをやっていました。最初はこんなことで人に接するのがすごく気恥ずかしく嫌でしたが、今は（当時は）以前の地位も立場も捨て家族のために働く両親を見ると、自分もやらなければという気持ちになり、家族が心を合わせて頑張った結果、苦しみが乗り越えられ今に至ることができました。

厳しい食糧事情で運動場も畑に

三 原 重 信

昭和十二年生（上漆田町）

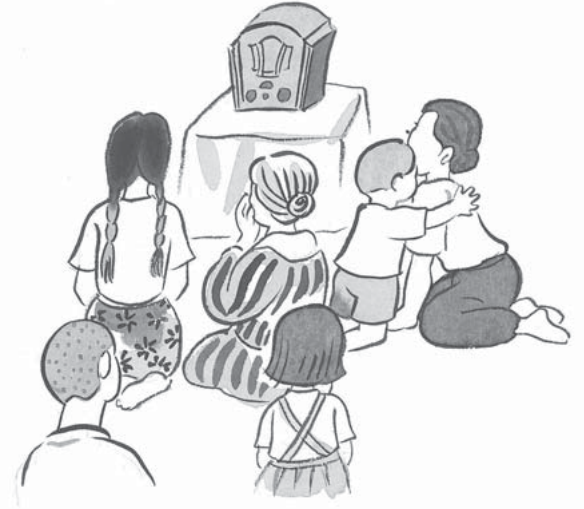
これから述べるのは、私が小学校二年の終わりから三年生の半ばごろまでの体験です。戦時中も授業はありましたが、登下校が危険なため公民館で授業を受けていました。上漆田町内だけで五十人くらいの生徒がいて、二人の先生がいたように覚えています。公民館から上った山の上に、畑を一枚借りて先生と生徒でカライモを作り、それを公民館で炊いて食べてい

ました。

学校までの道は山道で、一、二人は入れるような横穴が至る所にありました。敵が来たら軍隊がそこに入り、鉄砲を撃つためのものでした。小さい爆撃機が西側の芝田山から高原をよく通過していましたが、爆撃を受けたことはありませんでした。

公民館の庭には、きっちり詰めて三十人入るくらいの防空壕を掘りました。畳四、五枚ほどの深さに掘り、上に丸太などを並べて覆い、掘った時に出た土をかぶせて上からは分からないようにします。入り口には、はしごが付けてありました。防空壕は各家庭や班で作り、平地では庭や田んぼの片隅に作られていました。そばに山がある家は山に横穴を掘り、家から遠く離れていれば安全だとは分かっていますが、なかなか逃げ込むことはできませんでした。茂賀野には、約一・五メートルの高さで入り口と出口のある防空壕が最近まで残っていました。

食糧事情は厳しく、カライモを作っていたものの、それだけでは足りず、お腹が空いてカキヤクリ、シイの実などを拾って食べていました。今だったら口にしない石のように硬いナシでも食べていました。自宅周辺は米作り専門で、わが家でも米を作っていました。強制的に国への供出として出さねばならなかったため、カライモ、麦、くず米を主食として食べ



ていました。いつもお腹が減っていたのが、言い表せないくらい苦しいものでした。

上漆田地区には、兵隊さんが各家庭に五人から八人ほど泊まっておられました。地区を守るために来られていたと思います。現在は個人宅の車庫になっている所が、当時の兵隊さんたちの炊き出し場所でした。大きな釜^{かま}を五つほど並べて料理し、当番の兵隊さんが各家庭の兵隊さんに食事を配っていました。普通の家では兵隊さんに仏間を使ってもうため、家族は一つの部屋で頭の向きを互い違いにして雑魚寝^{ざこね}をし、服も兄弟で使い回していました。

兵隊さんは佐賀など遠方から来ている人がほとんどで、ポンポン菓子をもらって食べた覚え

があります。終戦の二カ月ほど前、実家に私の従兄に当たる大佐と呼ばれる人が里帰りしてきました。その時の周囲の兵隊さんたちの緊張した敬礼はただ事ではなく、子どもながらに「すごい人なんだ」と思いました。二泊した際に、竹を刀で斜めにスパツと切って見せてくれたことが今でも目に焼き付いています。その後、わずか二カ月の間に本部の空爆が何かで戦死されたと聞きました。生きておられると九十歳になられます。

四年生の初めに、家のラジオで天皇陛下のお言葉を家族みんなで泣きながら聞き、その後すぐに兵隊さんたちは全員、引き揚げて行かれました。戦後、公民館のそばに一時的に病院がありました。資格のある人がやっている感じではなく、すぐになくなりました。

昭和二十二年、戦時中にカライモ畑にしてあった小学校の運動場を、私たち五年生が全員でローラーを引いて整地することになりました。そのなかで、作業中の生徒がローラーの下敷きになってしまう事故が起き、一人は頭にケガ、一人は足を骨折、一人は死亡という大惨事となりました。その事故で親友を亡くしたことが大きなショックで、今でも思い出すと悔しい気持ちでいっぱいになります。

三度の召集で戦地を転戦

宮崎 繁

大正六年生（東大塚町）

私は大正六年七月二十八日、藍田村（現・東大塚町二八〇四番地）で生まれました。木地屋にあった東間小学校分校で六年間を学び、卒業後、東間小学校高等科に進みました。東間小高等科は自宅から遠く、人吉町灰久保の父親の知人宅に下宿し通学しました。しかし、学校でいじめにあい一年あまりで退学。実家に帰り、父親と一緒に農業や山の仕事をするようになりました。

昭和十二年、徴兵検査を受け甲種合格となり、輜重兵（＝軍需品の輸送・補給にあたる兵士）として、熊本市の藤崎台野球場辺りの訓練場で数カ月にわたり輓馬（＝二輪の荷車を馬に引かせる）、駄馬（＝馬の背中に荷物を載せて運ぶ）部隊の兵士としての訓練を受けました。

当時の社会状況は、昭和十二年七月の蘆溝橋（＝中国北京の南郊、盧溝河に架かる橋）事件で日中戦争が始まり、日本軍はその年の十二月、南京（中国江蘇省南西部にある省都）へと進軍し占領しました。その攻撃の主力部隊であった第六師団応援のために、昭和十三年五月、

熊本に第一〇六師団が編成され、私もその部隊の一員となり中国に派兵されました。

上海から船で揚子江をさかのぼり九江に上陸しました。九江では、攻撃部隊の後から近くの廬山にあった蒋介石の別荘跡にも行ったことがありました。九江で約三カ月の宿営を重ね南昌（中国江西省の省都）攻撃に加わりました。輜重隊では輜重兵の中から警備の者を選び、小銃・軽機関銃で部隊警護にあたりました。私は軽機関銃を与えられ二人一組で警備に就きました。南昌の近くでは部隊後方の馬繫場（＝輜重隊の馬を集めてつないでおく場所）に敵兵の攻撃があり、二百メートルほどの近距離で銃撃戦となり、ようやく撃退したこともありました。

昭和十四年十二月、南京で全員に夏服が支給され船に乗せられました。「どこか南方の戦場に行くのかな」と思っていたら、一週間ほどして上陸したのが香港でした。香港では子どもたちが日本兵を「シーサン」と呼び、バナナなどを売りに来ていました。その後さらに九龍（香港の対岸、九龍半島）から広東（中国南部の省、省都は広州）方面の作戦に従軍しましたが、昭和十五年に内地引き揚げとなり、広島県宇品港に上陸。検疫（＝伝染病予防のための検査・診断）後、召集解除となり、その年の四月、人吉に帰省しました。

家では再び父親と一緒に仕事をしていましたが昭和十六年六月、二度目の召集を受け、満

州（中国東北部）のハイラル（中国内モンゴル北東部の中心都市）第五五一部隊に入隊しました。ここで二歳下の弟が中国長沙で戦死したという連絡を受け、翌十七年除隊となり、再び実家に帰りました。そして昭和十八年二月に結婚。二十六歳の時でした。

しかし、同じ年の十一月に三度目の召集を受けました。今度は内地勤務となり熊本で一年ほど過ごし、その後、宮崎県都城部隊に派遣されました。都城には二三連隊や三菱の工場があり、特設警備工兵隊に所属しました。当時、私は伍長になっており妻子と共に営外（部隊の外）の住宅に住むことができました。そのころになると、連日アメリカ軍の空襲があり、爆撃の跡の補修などにあたりました。作業には近所に住んでいる男性を集めて行いました。また、物資購入や連隊本部が置かれていた宮崎県庁舎への連絡に自転車で出向いたり、熊本市の師団司令部への連絡などにもあたりました。

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送を全員集合して聞きました。その後、残った仕事の整理をして十月に自宅へと帰りました。が、父親は病気をしており、十一月二十五日に亡くなりました。

戦傷を負っても懸命に生きた夫

宗村 香

大正八年生（麓町）

夫は二十歳の時、体格が良かったためか徴兵検査では甲種に合格し、満州事変、支那事変に出兵したそうです。昭和十六年、大東亜戦争の初めに負傷して帰郷しました。馬に乗った写真があり、騎兵だったと聞いており、もうすぐ大隊長になるところで負傷したようです。帰ってから、人手が足りないとして市役所に勤務することになりました。東・西・中原・藍田地区が合併して人吉市になった頃でした。

昭和十七年、私は市役所の方の紹介で夫の身体に傷があることを伝えられないまま結婚しました。本人が傷の手当てや始末を自分でやっていたので、気づかないままでした。傷は右腹に銃弾を受けたもので、戦地で麻酔も何もないまま軍医さんが弾を取り出してくれたそうです。直径十センチぐらいの穴が残り、人工肛門を着けなければなくなっていました。便が出る時には、その傷穴がふくらんで大きくなるし、便意を本人が感じないまま便が外に



出るため、本人も家族も周囲への臭いをととても
気遣っていました。傷穴は、いつも本人が自分
でそつと処理している状態で、ガーゼ↓かじ紙
↓油紙↓腹帯を締めていました。

結婚当初は装着用ベルトがあつたものの、そ
の後は手に入らなくなり、さらに紐^{ひも}をつけて
手作りの腹帯を使用していました。戦争中には
かじ紙もなかなか手に入らなくなり、障子紙を
切って使っていたこともありました。引きのな
い紙は漏れてくることもあり、腹帯には汚れが
着くため川で洗って使用していました。

長女が二歳の時、飛行機が私たちの頭上を低
空で飛んで行きました。娘は「飛行機！」と喜
んでいましたが、夫は私たち家族の様子が心配

で市役所から飛んで帰って来てくれました。B29来襲の時だったと思います。

食料は配給で、町内の人数割りで配給の品を町内会長宅から持ち帰りました。味噌や醤油
があれば良い方でした。米が足りず、配給のコリーヤン（小豆の粒の小さいもの）を炊いてい
ましたが、コリーヤンは鶏にエサとして与えても食べないぐらいで、なかなか飲み込めず、
とても食べるにくかったことを今でも思い出します。

夫の姉が錦町で米屋をしており、少しの米を確保してくれましたが、それを取りに行くの
が大変でした。汽車には簡単に乗れるものの、米とわかれば没収されてしまうため一斗（約
十八リットル）くらいを背負い、ネンネコと帽子をかぶせて赤ん坊を背負っているように見
せかけて汽車に乗りました。人吉駅のホームから出ると「ホッ」としていたものでした。

夫婦とも勤めの経験がなく、カライモの作り方も分かりませんでした。幸い近所には農家が多
く、農産物をよくいただきました。家主さんも助けてくれました。助け合いの気持ちが当時
はとても強かったと思います。

夫は真面目な人で、市役所では重要な役目を任せてもらい五十八歳まで勤めました。自転

車で通勤し、帰りに職場の人が四～五人「送ってきました」と寄って、ささやかな宴会をするのがただ一つの楽しみでした。退職後は二人でゲートボールを楽しみ、夫が監督、私が選手の一として県大会で三度の優勝経験があります。夫は平成三年六月十八日、八十歳で亡くなるまで十二～十三回の入院を繰り返しました。入院しても私と娘以外には絶対に傷口の処理をさせず、常に付きそっていました。大部屋にいと、お見舞いの方が多く笑いが絶えないくらい話はずみましたが、周囲への臭いを気にして、よく個室を希望していました。亡くなる数ヵ月前、病室の窓から早くに亡くなった友人の家の方を見て、「○○さんはよかな。自分は戦争で人を殺して来たけん、いつまでも死ねん！」と、悔やむような言葉を発したこともあります。

亡くなった後に遺族年金がありましたが、軍人で負傷したことへの補償は何もなく、軍人恩給の要望に二十年、東京の担当部署へ通い続けました。四十年前にやっと認められ、国から補償されるようになりとても助かっています。補償額はけがの等級によって違うのですが、医師の診断の仕方で認定にずいぶん違いがありました。人吉では片足切断の方が三高傷で一番高く、夫は七高傷というところでした。当時、人吉で八十人くらいいた「傷痍軍人の会」

は現在三人になってしまい、当時のことを理解できる人たちが減ってしまうのが寂しいです。

戦争によって大きな傷を負い、八十歳まで明るく生きることができたのは、家族の支えはもちろん、本人が強く生き抜こうとした意志であつたらう…と、夫の生き方を聞いた人はだれもが驚かれます。人工肛門を着けていたことも、本当に限られたごく一部の人しか知らないことです。

戦争への思い綴った三通の手紙

村上 和 男

昭和二年生（北泉田町）

私は昭和二年、八代市で生まれ、十五年に旧制八代中学に入学。十九年三月、四年修了で繰り上げ卒業となりました。幼少の頃から空への憧れを強く抱いており、中学生の時はグライダーの飛行練習にも通っていました。中学卒業後は陸軍士官学校を受験しましたが、体格検査で体重が四十八キロしかなく、基準の五十キロに達せず合格できませんでした。そこで、甲種飛行予科練習生（甲飛）となり、四国の松山海軍航空隊に入隊しました。八代中から予科

練に入隊したのは私を含め五人。入隊には親は反対で、担任の先生も「是非にも行かなくてよいのではないか」と言われましたが、自分の意志を貫きました。

入隊時のことなど、人吉の商家に嫁いでいた姉あて三通の手紙が大切に保管されていて、当時のことを次のように記しています。

『―戦局は益々苛烈^{かれつ}の度を加えつつある今日、大君の為、米英撃滅^{げきめつ}の為、死に場所を得た事は非常に嬉しい次第です―』。また、当時の経歴は「昭和十九年六月五日海軍二等飛行兵、七月一等飛行兵、九月上等飛行兵、十一月兵長、昭和二十年七月一日海軍二等飛行兵曹」となっています。

昭和二十年五月、松山飛行場はアメリカ軍の空襲によってほぼ全滅の大打撃を受け、飛行訓練どころではなくなり、毎日、山中を開墾してサツマイモ作りや松根油掘りに追われました。そのころ出した手紙には、『―私も元氣百倍、新しき訓練に邁進しております。しかし今は敵機の空襲が盛んになり、それどころの話ではありません。私も誉れある七つ釦^{ポタン}に身を固め、帝国海軍々人として決戦場に参加出来ることとなりました。：今度会うのは九段で―』。

文面には七つ釦の予科練生の誇りと、戦死を予想した九段（靖国神社）などの言葉が記され、



今思えば悲壮な感じがします。

六月初め、部隊全員が集合し、「特攻隊を希望する者は一步前へ」と言われ、全員が前に出て志願しました。ただし、長男はだめで、かつ十キロ程度の遠泳ができることが条件でした。特攻隊といっても、どのような特攻であるのかは全然わからず、特攻隊の一員に選ばれたことを姉に伝えた手紙には、『―私もついに特攻隊の一員となる事が出来ました。往きますからには奮闘一番敵艦にぶつかる覚悟しております。：この事は決して他言しないで下さい―』と書き記しています。

訓練のため、広島県呉市南端沖合の周囲四五キロほどの小さな情島にあった「第二特攻戦

隊第八十一突撃隊嵐部隊伏龍隊」に移動しました。「伏龍隊」とは瀬口晴義著『人間機雷伏龍特攻隊』（講談社）によれば、簡易潜水服を着て海岸から海底に張ったロープを伝い深さ十五メートルほどの海底に潜み、炸薬さくの量十五キロの機雷を改良した五式撃雷に竹ざおを取り付けた全長三三メートルの通称「棒機雷」で、近づく敵艦船底に体ごと激突して攻撃するという、まさに肉弾兵器による特攻隊でした。

しかし、ゴム製の潜水服と頭にかぶる鉄鋼板でできたかぶとや酸素ボンベ、また肝心の棒機雷も量産が間に合わず、十分な訓練を受けることも不可能でした。

訓練に励んでいた八月六日、情島から約三十キロ北の広島市に落とされた原子爆弾のきのこ雲を見ました。その後「室戸岬付近で敵の上陸を迎え撃つため待機」と命令があり、移動直前の八月十五日終戦となり一切が無になりました。

八月二十六日除隊となり、大きな衣袋を担ぎ漁船で大分に渡り、汽車で熊本駅に着き、鹿児島本線に乗り換えて八代へ向かいました。途中、川尻の鉄橋が爆破されていて川を歩いて渡り、また汽車へと乗り継ぎました。八代駅には母と次兄とが出迎えてくれました。海軍にいた長兄もジャワ島で終戦を迎え、昭和二十一年に復員することができました。

帰省後、私は義兄の仕事を手伝うため人吉に移り住み、現在に至っています。

主計士官として軍事物資を管理

村 田 泉

大正十年生（原城町）

私は大正十年二月十八日山口県で生まれ、十一歳の時に神戸に転居し、昭和八年報徳学園に入学しました。同十三年、明治大学予科から大学へと進学。同十八年九月二十五日繰り上げ卒業となり、十月台湾銀行神戸支店に就職しましたが、十二月一日召集され、愛知県豊橋市の第三師団工兵連隊に入隊しました。ここで基礎訓練を受け、直ちに中国へ派遣されました。長江（揚子江）をさかのぼり南京に上陸して武漢、黄水を経て黄水から約六十キロ奥地の応山県で実戦訓練を受けました。

工兵部隊は陸軍の兵種の一つで、交通・渡河・鉄道等の技術的な仕事を担当し、背囊はいのうにはショベル・鍬などの作業道具、肩に小銃を担ぎ、腰には小銃弾ほかを着けて塹壕掘りや長江での折りたたみ舟や鉄舟による渡河訓練、爆薬作り等々がありました。

実戦訓練のさなか、甲種幹部候補生主計科の試験に合格。部隊と別れて漢口の奥地にある孝感の野戦倉庫に行きました。孝感の野戦倉庫は各地の部隊が前線に出動するに当たっての重要な拠点となる施設でした。そこで経理学校入学までの間、実地訓練を受け、実習を終えてから南京の陸軍経理学校に第二期生として入学しました。

昭和二十年五月、南京経理学校を卒業。主計見習士官として四百四十五名が日本国内へ転属となり、その一員として博多に上陸。埼玉県浦和で新たに編成された主計部隊に加わり、その部隊から全国各地へと派遣され、私を含め三名が主計士官として人吉へ配属されました。人吉旅館近くの簿記学校が事務所となっていて、久留米から配属されていた前任将校のもとで糧秣（＝兵隊の食糧）類の責任者を命じられました。主計が管理するのは戦時に必要なあらゆる物で、兵器・衛生材料・糧秣などに分かれていました。

当時は社会全体が極端な食糧不足で、戦争の状況は九州南部への敵上陸が予想されており、人吉・球磨は物資補給の重要な場としていろいろな物が大量に集まっていました。前線ですえ十分でなかった小銃類も新品が多数保管され、食料品も大豆・コーリヤン・味噌・醤油・甘味品・乾パン、そのほか毛布などが各地から大量に送り込まれていました。物資の運搬な

どには兵隊や住民の協力を得て、それらの物資を学校や民家の土蔵、各所に掘られた防空壕に保管しました。

日本が無条件降伏をした昭和二十年八月十五日は、鹿児島方面へ物資を送り出す命令を受けており、国鉄湯前線（現くま川鉄道）の湯前駅で貨車十五輦に乾パンなどの食料品をはじめ物資の積み込みをしていました。そのため天皇の戦争終結のラジオ放送（玉音放送）は聞いていませんでした。しかし終戦とわかったとたんに混乱状態となり、この貨車がその後どうなったのかわかりません。

熊本への占領軍の進駐は十月五日に第一陣二百八十名が上熊本駅に到着し、同七日に第二陣一千名が到着。そして同十五日ごろまでに約五千名が到着して、進駐を完了しました。

戦後処理としてまず行ったのが軍関係の書類を焼く作業でした。進駐軍が人吉にやって来る前、若気の至りもあったのでしよう、部隊員数名で軍用トラックに乾パンなど食料品を山積みして、人吉から湯前までの道筋でそれらの食料品を配って回り、沿道の住民からとても喜んでもらった思い出があります。

主計として最後の整理作業を進めているうちに人吉にも占領軍が進駐して来て、軍需物資

についての取り調べが始まりました。進駐軍は鍋屋本館に本部を置き、戦用品保管責任者だった私は必要に応じて呼び出されました。糧秣などについてはそれほど厳しい調べはありませんでしたが、兵器類については徹底的に追及されました。また、居住地からよそへの外出は一々許可が必要で、もちろん故郷へ帰ることさえできませんでした。

そのような中、昭和二十一年三月、私は人吉地区林産組合（人吉木材市場）に就職でき、新しい生活の土台ができました。

最後になりますが、家族の消息について記しておきます。父は早くからフィリピンのマニラ市で貿易商やゴム工場等の経営をしており、戦時中も帰国せず仕事を続け、米軍侵攻後は軍属として軍と行動を共にしている中、戦死しました。また、家族が住んでいた神戸市も戦火により家屋も焼失してしまい、勤務先の銀行も特殊銀行であったため敗戦後は閉鎖となりました。このような状況下、一人息子であった自分は神戸へ帰らなければならないと思いますが、戦用品保管責任者であったことから、進駐軍の許可がなければ帰られず、結局、実家は妹に継いでもらうことにして、神戸へ帰ることを断念。今日に至っています。

兵士、機関士として戦争を体験

元 田 袈 見

大正七年生（上永野町）

私は大正七年四月七日、西瀬村上永野町八二三の二番地に生まれ、同十四年西瀬小学校に入学。昭和八年三月同高等科卒業後、父親が私の希望など一切聞くこともなく、人吉九日町の薬局で店員として働くことを約束していたので、その店で働くことになりました。

しかし一年数ヵ月後、小学校の担任だった先生から「西瀬小の用務員の仕事があるが、自分で勉強することもできるから勤めてみないか」と勧められ、昭和九年七月から学校に住み込み働くことになりました。当時、検定試験に合格すると代用教員になれる制度があることを知り、ずいぶん勉強しました。検定試験は七科目程あり、全科目の合格を目指しましたが何科目かは合格できませんでした。代用教員になろうという気持ちは強かったのですが、夜になると酒に酔った先生が来られ、その言動を見ていて失望することが多く、一年二年と経つうちに教師になる気持ちは薄れていきました。

そういう時に、国鉄の採用試験があり合格しました。昭和十二年十二月に国鉄人吉機関区に就職。最初は機関助手として働いていましたが、翌年、徴兵検査を受け乙種合格となりました。同年十二月に召集令状が来て熊本第十三連隊第二大隊第五中隊に入隊しました。おもしろいことに、同時に徴兵検査を受け甲種合格だった者が、私たちより二十日程遅れて入隊してきました。軍隊では一日でも入隊の早い者が優位となりずいぶん得をしました。新兵訓練では機関銃の手入れがあり、私は国鉄時代に機械について十分勉強していたので、新兵の中であた一人、機関銃の分解手入れを短時間で仕上げることができ、すぐに機関銃手に配属されました。

三カ月の訓練後、昭和十四年二月、中国へ派遣となり上海に上陸。独立混成第十八旅団二中隊に編入されました。さらに南京から揚子江を船でさかのぼり九江に上陸し、同三月南昌攻撃に参加。その後、漢口・武漢・武昌で警備に当たりました。

軽機関銃は銃手一名、弾薬士二名の三名で行動し、戦闘では部隊の最先端で援護射撃をしました。戦闘はむごいもので、接近してきた敵との戦いでは目の前で戦死する者もあり、川を挟んだ百メートル程の距離の戦闘では敵兵の顔が見えるほどでした。戦闘で記憶に残って

いるのは、敵兵との銃撃戦でわが軍が土手を防衛としていた時、戦友の一人が土手を乗り越えて銃撃しているうちに敵の銃弾で鉄兜をかぶった頭に貫通銃創を負い戦死したことです。

昭和十六年七月、除隊となり上海から日本の留守部隊に帰りました。第二次大戦が迫っていた時期に除隊して帰国できたのは、軍の物資を輸送する動脈だった国鉄の機関士を補充する必要があったのではないかと思います。

人吉機関区に復職し、昭和十七年三月に結婚。復職一年十カ月後には機関士となり、その後一年半熊本機関区に移り、鹿児島本線で鳥栖駅までの運転を務め、また人吉機関区へと戻ってきました。こうして戦中・戦後機関士として勤務し、機関車の検査係となり、新人の指導教育を十五年間担当し、昭和五十年三月機関車検査長で退職しました。

その間、昭和二十七年四月、三十四歳の時、在職のまま人吉高校定時制に入学しました。一年終了後飛び級で三年への進級が認められ、四年間の課程を三年で終了し、昭和三十年三月に卒業しました。卒業と同時に推されて人吉市議会議員選挙に立候補し当選し、以後昭和五十年まで五期二十年間、市議会議員を務めました。

昭和五十一年からは人吉市遺族会の役員となり、昭和五十四年から平成二十年まで人吉市

遺族会会長を務めました。昭和五十年代には遺族会の正会員のうち戦死者の妻（未亡人）は約百三十人程でありましたが、平成二十年には三十人程に減ってきています。

現在も毎月十三日に人吉の護国神社に遺族会員が集まり、戦死者の慰霊式を行っています。

戦争に翻弄された青春

山田 次男

大正十四年生（五日町）

私は大正十四年八月、九人兄弟の次男として五日町で生まれました。生家は江戸時代から商売をしていた家系で、当時は折箱屋を営んでいました。幼稚園の頃、新聞によく戦争の写真が載っており、「敵が攻めて来たら困る。今のうちにトイレに行っておこう」という幼少のごろの思いを覚えています。

小学校六年間は何事もその他大勢の一番下のクラスにいて、目立たないとり得のない子でした。昭和十三年、人吉中学校に入学。入学試験に自信なく、合格発表の日は心配でご飯が一口も入りませんでした。それを見ていた兄が、先に合格発表を見に行ってくれました。無事、

中学生になることができ、帽子とカバンだけは新品でしたが、制服、靴、教科書は全てお古でした。

中学五年生の時、一つの事件が起きました。毎日悪友達と勉強し、また遊びもよくしました。ある日、悪友四人でカキ氷を食べに行き、運悪く私だけ人吉中の先生に見つかってしまいました。翌日先生から呼び出され、武道教員控室で正座させられ、「おまえたちはビールを飲んだな」と絞られました。「いいえ、氷を食べました」と言っても信用されず、二日目は職員室の黒板の下に一日中座らせられました。「何もしてないのに」と、腹の中では思っていました。翌日、父親召喚となり、これには困りました。何日も座って抵抗しましたが、結局、無期謹慎となりました。

上級学校の試験を受けると一週間の公認欠席がもらえるため、私も友人の吉富君の商船学校志願に合わせて、他の友人三人と「鹿児島に遊びに行こうか」と、出願することにしました。それで、中学生になって初めて数学の参考書を買って勉強をしました。

戦争のため農家の男子は兵隊に召集され人手不足となり、中学生、女学生が勤労奉仕といって動員されていました。私たちは上球磨方面に稲刈りに行くことになり、東駅（相良藩願成

寺駅）に集合して汽車を待っていました。そうしていたら、友人の久保園君が「あんたの家からこれ預かって来た」と、大きな封筒を持ってきてくれました。早速開封してみると合格通知でした。試験のことは忘れていて、無実の謹慎をくらった後で学校に行くのが面白くない頃でしたが、合格通知と書類をよく読んでみようと思い直し、汽車に乗るのをやめ帰宅しました。それで、「あと半年で中学校を卒業する。毎月授業料五円を払うと残りまだ三十円も払わなければならない。こんな面白くない学校に納めるより、せっかく合格したのだから商船学校へ行ってみよう」と入学を決意しました。

合格通知を受け取った翌日から中学校へは登校しませんでしたが一応、退学手続きをしなくてはならないと、手続きのため登校し職員室に行くところまで先生が近寄ってきて「なんだ、そんなところに行くのか。卒業証書はやらんぞ」と嫌みを言われるので、「いらんです」と面と向かって言い職員室を出ました。それで、中学五年の二学期に退学しました。

神戸に向かう夜行列車を友達が皆、人吉駅まで見送りに来てくれました。

昭和十七年十月、私は人吉中五年生を中退し、神戸商船学校大阪分校の機関科に入学しました。制服・制帽、教科書なども支給された上に三食付き、全寮制で全部無料でした。食事

は海軍からの補給があるので一日五合、食べ盛りの私たちには十分な量でした。戦争中ではありましたが神戸の町並みは美しく、物資も何でもありました。

翌年十月十五日、横須賀第一海兵団に入団しました。六ヶ月の教育期間で前半三ヶ月は午前中が学科。午後は手旗手先信号・カッター・毒ガス訓練等がありました。後半の三ヶ月は機関・航海・通信・工作・砲術学校等を見学しました。

昭和十九年三月十五日退団し人吉に帰り、わが家で一息つき四月一日、呉海軍工廠工場へ入所しました。ところが黄痘になってしまい、また人吉に帰り二週間療養し、回復後は再び呉に戻り実習に参加しました。半年の工場実習も三ヶ月で、二年課程も一年に繰り上げて、乗船実習もなく全課程修了となり、神戸の共栄タンカーに入社しましたが、何と、今度は自宅待機となりました。帰郷しても何もすることがなく、原ん城に畑を借りて自給自足のためにカライモやジャガイモ作りを始めました。このころになると、中学時代の同級生に召集令状が来て次々と出兵して行きました。

十月、「シタクシテ、スグコイ」との乗船電報が着きました。この決まり文句は私たちにとっては召集令状と同じものでした。商船学校時代の藤田教官から「鯉節一本とロープは必ず持っ

て行け。海の上でも一カ月は生き延びられるから」と言われていたので、早速、父が麻苧（あさお）で編んでくれたロープと鰹節、それに短刀と冬夏の衣類をバッグに入れて、市役所で住民票・食糧キップ・衣料キップの異動手続きをして、人吉駅を出発しました。

翌日、神戸に到着。出社すると、「船がないので相生の播磨造船所で待機」との命令がありました。当時は口が裂けても「船が沈没した」とは言えない時代で、播磨造船所ではエンジンの試運転を見学したりしました。毎日同じようなことで、今にして思えば、この研修はエンジニアにとってはまたとない勉強の機会であり、もっとよく習得しておけばよかったと悔やまれます。

昭和二十年二月、「資材がない、鉄板がない、日本に数日分の燃料しかない」という情報を知りました。「それでは軍艦も動かない。もう、この戦争も長くはない。戦争に負けるのではないか…」と思いました。しかし、そのことは決して口に出して言うてはいけなかった。そのころ、会社の寮では伝染性皮肤病の疥癬（かいせん）が流行し、私も手指の間が痒くなって、「この状態では乗船しても治療もできないし、乗船員に感染させても悪い。完全な身体で戦場に行かねばならぬ。家で治療します」と会社に申し出て帰郷しました。

「ついこの前、皆に見送られ人吉を出発し戦場に行くものと思っていたのに、四カ月でまた人吉に帰るとは…」と、独り嘆きました。母親はありがたいもので、薬湯入りの風呂を沸かしてくれて、早く治すことができました。

四月のある日、川で弟と鶏をつぶしてさばいていると、空襲警報と同時に大畑の上空に二十〜三十機の飛行機がハエのように見えました。それは敵機で、まもなく新馬場の方から低空で私たちがいる方に飛んできました。私と弟は「ここなら弾も通らないだろう」と石垣の間にびたりと身体を寄せました。敵機は屋根すれすれにブーと飛んできて、両翼から真っ赤な機銃を撃ちながら飛び去り、恐る恐る頭だけ出して見たら、水の手橋すれすれをグラマンが通り過ぎ、白いマフラーをなびかせた操縦士が見えました。人吉初空襲の出来事です。こんな田舎まで敵の艦載機にやられるようになったのです。

日々の生活は、夜は灯火管制で電灯の下だけが明るく、警戒警報、空襲警報と戦争は激しくなり、新聞は連日「敵の軍艦〇〇隻、飛行機〇〇機撃墜」と報じ、国民はこれを信じて苦しい生活に耐えていました。食料は全て配給制で、毎日、出兵兵士を婦人会や町内の人々が「祝入隊〇〇君」と書いたのぼりを立てて、駅の広場で「万歳」の声で送り出していました。

六月十日、再度出社の電報を受け取り、人吉を汽車で出発しました。途中の久留米の鉄橋は爆撃され不通で、佐賀経由で神戸を目指しました。広島では畑の真ん中で空襲のため汽車が停車し、乗客は蜘蛛の子を散らすように客車より走り出て畦に伏せました。空襲解除となり再び汽車は動き出しましたが、岡山ではトンネル内で停車、外は空襲中とのことで車内は煙でもうもうとなりました。明石付近に来たらゴットンゴットンと微速になりました。線路両側に二十メートルぐらいの穴ぼこがあちこちにあり、水が溜まっていました。爆弾が落ちた跡でした。

ようやく神戸到着して、へとへとに疲れて会社に行き「只今到着しました」と報告したら、船員課長が「君の乗る船が昨日博多港で沈没した。また自宅待機してくれ」と言いました。「おかしいな、昨日博多を通ってきたのに……」。本当は津軽海峡で敵に空爆されて沈没していたのでした。神戸には宿泊する所はなく、折り返しまた人吉に帰ることにしました。出発の際、見送りしてくれた人たちと顔を合わせるのには恥ずかしい思いですが、仕方ありません。帰途、食べ物はなく停車駅ホームで水を飲んで何十時間もかかり人吉にたどり着くことができました。再度、住民票・食糧キップ・衣料キップ等の転入手続きをしました。転出・転入・転出・

転入と二度も同じ手続きしており、変な目で見られてもその理由をはっきりとは言えませんでした。

また人吉での生活が始まりました。今度は下青井の製鉄所に勤め送風機係になりました。しかし、まもなく友人の紹介で新たな職場へ移ることになり、その職場に履歴書を持参する日が奇しくも八月十五日でした。昼の十二時から玉音放送がありました。ラジオからは『耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び……』と音声が続いていましたが、ガガガーと雑音が混じり何と言われているのか全く聴き取れず、しばらくは「しっかり頑張れ」と言われたのだらうと思っていました。そして身分証明書を取りに行った市役所で「戦争に負けた」ことを初めて知りました。

戦後、私は軍属の現地採用ということで食料の移動、各部隊への支給の現地作業員として二ヵ月働いて解散となりました。

ところが昭和二十年十二月二十五日、三度目の乗船電報を受け取り、鳥取県堺港で乗船すると船は佐世保に向け出港しました。途中、仙崎港に寄港し、機雷五十発が海に沈んでいる中を神に祈りながら航行しました。佐世保港では米船より重油を積み替えて、下関のタンク

に揚げました。これで油（燃料）がなく漁に出られなかった漁船も助かると思いました。当時はまだ日本のあちこちの海に戦争中に撃沈された船が沈んだままになっており、関門海峡の出入り口には三百八十隻の沈没船がありました。昭和二十二年二月下船しましたが、私が乗船した船は英国海軍のチャーター船となり、改装工事をして給水船となりました。

昭和二十五年六月二十五日、朝鮮戦争が勃発しました。同九月、私に乗船電報が着て兵庫県相生港にて乗船しました。船は神戸港に回航し英語で書かれた誓約書にサインをして、国連軍提供船X〇四〇乗組員として作業にあたることになりました。船は佐世保港回航されSKドックに入り、昼夜兼行での人海戦術で二週間かけて給水船に改装され、セメントを吹き付けて水を満タン・排水・満タン・排水と繰り返し、改装工事が終了しました。

給水船に改装された船は初めて韓国の釜山に入港し、検疫は滞りなく済みましたが税関でトラブルが発生しました。乗組員はいったん出港したらいつ帰れるか分からないので、二、三ヵ月分の日用品、石炭なら十個入り一箱、歯磨きチューブなら二、三本持っているのは当たり前でしたが、それらを全部密輸品として没収されました。乗組員は直ちに船長に税関へ正式に抗議するように申し込みましたが、預かりの文書もなく船長は抗議しませんでした。

これには落胆しましたが、言葉がよく通じないこともあって残念な思いをしました。

朝鮮戦争の戦況は不明でしたが、補給のため帰港した門司港で、釜山の近くまで北朝鮮軍が侵攻してきていることを知りました。

再度釜山港に入港すると、夜は近くの山でゲリラが出ると噂があり、船は港外に出て北上して給水しました。福岡の板付空港からは四十五分おきに戦闘機が飛来し、私たちの船のマスストすれすれに降りて行っていました。昼夜を問わず二十四時間ぶつ通しの爆撃、物資補給に戦局が緊迫していることがよくわかりました。

作業を終え空船になると門司港に帰港しましたが、海の向こう岸は戦場、生きて帰れるか死んで帰るかその保証はなく、平和で安全な日本では安心して眠ることができ、平和のありがたさ、尊さに感謝しました。

三度目の釜山への出港は、慎重な気持ちで心を引き締め任務に臨みました。釜山からさらに仁川に向かい十二月二十四日、仁川港外に投錨、米国船何隻かに補給しました。当日は直径五センチぐらいの今まで見たこともないような大きな雪が音もなく降り続き、デッキは真っ白となり「やはり北に來たんだ」と実感しました。翌朝、連絡に來た米兵が「クリスマス、

クリスマス」と言って浮かれている様子が印象に残っています。

昭和二十六年の新年を迎えましたが、正月と云えども機関部は休むわけにはいかず、海上を眺めていると、韓国の人が小さな帆を張った木の小船に家財道具を積んで航行していました。積荷の上には小さな子どもが乗っており、氷点下十数度の中を避難していく姿を見るとかわいそうで「戦争はするものではない」と、改めて思いました。

一月七日、日本の機帆船が韓国まで水の補給に来るようになり、仁川から漢江を上下してソウルまで輸送しました。陸上では中国軍が雪崩のように攻め込んでいるらしく、海上からは十日間ほど何隻もの船に引つ切りなしに水の補給をしました。

一月十日、撤退準備の連絡がありました。それは午前中「ドドーン」という音とともに黒煙が立ち登りドッグが自爆したらしく、また中国軍が岸壁付近まで攻めて来ているという事態からでした。外気の気温は氷点下で船の燃料の重油は羊羹のように凍り、ディゼル油に切り替えて出港準備を行い、夜八時撤退命令が出されました。錨を揚げてしばらく航行するとエンジンが故障しました。原因は潤滑油が凍ったためでした。悪いことは重なるもので、船体の広さ二十畳ぐらいの鉄板が溶接部のフレームより外れて、溶接のつなぎ目から海水が

吹き出してきました。応急処置でむしろと毛布を折り曲げて当てて角材で突っ張り押さえました。しかし、冬の低気圧と怒涛にもまれて船は南下し、島陰を見つけて避難仮泊することになりました。島に近づくと銃撃を受けました。それはゲリラか敵か味方かわからず全速力で逃げました。どれぐらいの距離を航行したかわかりませんが、ある島陰の近くまで来て船のエンジンを止め、甲板に上がって見ると、なんと長崎県厳原町(現・対馬市)の沖でした。島に上陸し二泊して釜山に帰港すると、我々が乗船していた国連軍提供船X〇四〇は消息不明と、米軍機が連日黄海から東シナ海をくまなく搜索して大変な事態になっていたそうで、全員殉職したものと認識して乗組員の各家庭に死亡通知の電報を打つ手はずになっていたそうです。船は佐世保ドックに入り、船体修理に一カ月を要しました。その間、正月のやり直しをしました。

修理後の六月、再度仁川に入港しました。夜は毎晩空襲があり、西の水平線上に対空砲火が炸裂し次第に頭上を飛び交い、赤青の尾を引いて連装砲や全艦船から撃ち出される砲弾は物凄いものでした。昭和二十七年三月 船は釜山に南下し乗組員は全員交替し帰国することができました。

私の青春は満州事変・上海事変・日中戦争・太平洋戦争、そして朝鮮戦争と戦争ばかりでした。戦争は一般市民がいちばん哀れです。「平和」、こんな良い言葉はしっかりと守り続けていかなければならないと思います。故郷は空気もうまいし、山は緑濃く、川は水清く、人は良く、いちばん良い所だからです。

悲惨だった戦時下の教育

山中 朋子

昭和八年生（合ノ原町）

昭和十九年から二十年の戦争が最もひどい時、豊橋（愛知県）と静岡も空襲に遭いました。家は町から少し離れていたので焼けずに済みました。そのころはモンペに防空頭巾、消毒液を入れたカバンを肩にかけ登校しました。学校ではほとんど授業がなく、目や耳をふさいで「伏せ」の練習があり、地面に水たまりがあっても、馬ふんがあっても号令がかかると、どこでもやらなければなりませんでした。運動場には奉安殿があり、見たことはなかったのですが、天皇陛下の写真を祀ってありました。ベルが鳴るとどこにいても奉安殿を向き直立

しました。

四大節（^{しだいせつ}＝戦前、祝祭日とされた四方拝・紀元節・天長節・明治節の総称）の時は、頭を下げて校長先生の話の聞きました。鼻をすするだけで、前に出されて往復ビンタという厳しさで、実際に十名ぐらいの人が鼻をすすったため、倒れそうになるくらいビンタをされるのを目にしました。兵隊上がりだった校長先生には、だれも反抗できず、今でもその怖い顔が浮かんできます。

各家庭に一つ、または二、三軒に一つ防空壕が掘ってありました。空襲警報があると入りましたが、大東亜戦争初めのまだ戦争がそこまでひどくないころは、ウサギを抱いて入って遊んだりもしました。

昭和二十年、焼夷弾が私の町に落とされ町が燃えました。夜だというのに昼間のように明々と燃え、山の方へ避難して田んぼの茶の木の下にはいつくばって「南無阿弥陀仏」と手を合わせ祈りました。町中が燃えているのでどうすることもできず、ただ祈るしかできません。水道もなく井戸水をくみ上げる生活で、火災に備え、バケツで水をかけるバケツリレーの訓練が学校であっていましたが、実際にはそんなものでは間に合いませんでした。兵隊さんも



何もできず、山の方へ馬で避難しているのを見ました。

翌日、学校で「何も触るな!」と言われていたにもかかわらず、男子生徒が不発弾らしきものを触り大やけどを負いました。登校途中にはコンクリート道路に人の形をした焼け跡をいくつも見ました。逃げ遅れた人がかなり多かったようです。登校すると生徒は全員焼け跡に行き、釘拾いをしなければなりません。鉄類が不足していたため、細かい釘も大事だったようです。釘拾いの途中にも、人が焼けた跡を目にしました。

そのころ、蒲郡(愛知県)が震源地の大きな地震がありました。上は空襲、下は地震、早く降参しろと書かれたビラが米軍機からバラバラ

とまかれたこともありました。

食料は配給で、切符でコッペパンを買うのにもすごい行列ができました。おかゆやだんご汁が食べられたらごちそうで、カライモをツルまで食べていました。イナゴを捕り袋の中に一晚入れておき、便を出させてから佃煮にしていました。魚肉に代わる唯一のたんぱく質だったのです。砂糖も手に入らない時でしたから、醤油か塩で煮てあったかもしれません。コーリヤンや油を搾った後のようなパサパサしたものが配給されていましたが、食べられませんでした。物々交換でやっと米を手に入れても、警察官に見つかりと取り上げられ、留置場に入れられることもありました。

夜はランプに黒い袋をかぶせて、外に明かりが漏れないようにし、家は常に開けっ放しでいつでも逃げられるようにしていました。広島と長崎に原子爆弾を落とされる前後が一番激しい攻撃を受けました。それ以前の戦争では勝ってばかりだったので、「日本はちょっといい気になっていたのかもしれない…」と後に思いました。

終戦を迎えたのは十三歳、小学六年の時で「米兵が来て、暴行される」とうわさが流れ、怖いと思っても逃げようがありませんでした。うわさがデマで済んでよかったと思います。

食糧難もあって、親の出身地でもある人吉に知人を頼って引越しました。人吉ではよく米の中にそうめんを入れて食べていました。人吉駅前にやみ市があり、カライモ三個くらいを十円ぐらいで買っていた覚えがあります。トイレの紙も鼻紙も新聞紙で、鼻をかむと鼻の頭が真っ黒になりました。そのころは戦争で亡くなった人が多く、「産めよ、増やせよ」と子どもの多い人は表彰されていました。

教師として戦前・戦後を生きる

山本 ヒサ

昭和三年生（南泉田町）

私は昭和三年人吉市で生まれました。同九年に尋常小学校に入学し、二年生から五年生まで東京音楽大学を卒業した先生にピアノを習いました。学芸会では必ずピアノ演奏をさせられ、寒い日は温めたこんにゃくを担当の先生が私の両方の手に握らせて手を温めてくださり、演奏がスムーズにできるように心配りをしていただきました。

昭和十五年人吉高等女学校に入学しましたが、十二年に日中戦争が始まっており、さらに十六年には大東亜戦争が始まり、学生生活は空襲警報の中で過ごさなければなりませんでした。祖父は小学校長、父は人吉高等女学校、おばも小学校教師という家庭環境で育ったので、私も教師になるのが将来の夢でした。

昭和十九年三月、女学校を卒業しましたが、戦争の最中で師範学校受験を余儀なく断念しなければなりませんでした。当時、女性の進路は女性挺身隊、代用教員、結婚のいずれかで、私は代用教員を選びました。人吉市内に住んでいたので東小、西小、東間小のいずれかを希望したところ、西小学校に勤めることとなりました。ピアノを弾くことができたので音楽の指導も受け持つことになり、これが私の音楽教師としての始まりとなりました。

昭和十九年は戦争がひどい時で、防空頭巾をかぶり救急袋を肩にかけて通勤し、帰りにB29の機銃掃射を受けたこともありました。戦時下であっても、生徒たちには一生懸命に教えました。昼食の弁当を持ってこない生徒もいて気をもみました。また中には弟妹を背負って授業を受ける生徒もありました。父親が戦死して、母親が大黒柱になって働いていたという事情があったのでしょうか。それで私の母が着古しのはんてんや古着を用意して、そっと持たせたりしたこともありました。そのような中、教師の身で召集された先生もおられ、詰襟

の軍服姿で生徒たちの前に立ち、凛々しく出征のあいさつをされたことを今でも思い出します。このころ、学校での私の役割は奉安殿の中に納められている重要書類を緊急の際、安全な場所に移し、保管するという仕事でした。

昭和二十年に終戦となり、二十二年に新しい教育制度が始まりました。新制中学は教科制で、私は第二中学校では音楽専科の教師となりました。戦争も終わり、平和な中での音楽の授業では、中学生たちから流行歌やジャズを演奏してくれとせがまれることもありました。

戦争で師範学校進学之机を失っていた私は、戦後、教員免許を取るため通信教育、レポート提出と大変な労力を使いました。免許取得のための最後の試験日はちょうど学校の卒業式の日で、君が代、校歌斉唱などのピアノ伴奏を終えて、タクシーで人吉駅までかけつけました。やっと列車に間に合い、熊本商科大学（現熊本学園大学）の試験場に無事到着し、試験を受けることができました。

来た道、これからの行く道

山本 泰弘

昭和七年生（下原田町）

私は父の仕事の関係で、関東州（中国東北部）の旅順市（現大連市）で昭和七年六月十七日に生まれました。関東州とは、日露戦争後に日本が中国から租借し、極東への発展基地として関東州庁を設け、大陸経営の拠点としていた所です。

満州事変が昭和六年九月十八日に、日中戦争が同十二年七月七日に勃発。十六年十二月八日には太平洋戦争が宣戦布告されました。軍人だった父の転属で、私たち一家は奉天市（現瀋陽市）に移り住みました。

その当時は毎朝、軍の副官が公用車で父を迎えに来るのを誇らしく思い、将来は自分も軍人になりたいと考えていました。小学四年の三学期に、父から家族六人は日本に帰国するよう言われました。最初は母の里の神瀬村（現球磨村）に行きましたが、十九年の大水害で家が流され、父の里の大野村（現芦北町）に引っ越しました。

昭和二十年四月、私は熊本県立人吉中学校に入学。当時、中学校は男子校、女学校は女子校となっていて、汽車通学も中学生は先頭車、女学生は最後尾車と決まっていました。しかし、肥薩線は軍用列車も走るのです、敵に攻撃される危険性があることから、汽車通学は禁止されて学校の寄宿舎に入寮しました。

そのころは食料不足の上に、一番の食べ盛り。いつも空腹でしたが、「精神力で頑張れ」とか「欲しがりません勝つまでは」とか言われていました。友達と将来のことを語るときは、幼年学校や士官学校、予科練、海軍兵学校など進学先も軍人養成機関でした。「お国のために尽くす」「お国のために死ぬ」といった教育でした。

寄宿舎生活の時、アメリカのグラマン飛行機が高原飛行場を攻撃したことがありました。人吉西小学校の上から人吉中学校の上を飛行し、高原飛行場を攻撃。反転して、また繰り返し攻撃でした。ちょうど、陸軍の兵隊が人吉中学に駐屯していましたが、私たちと一緒に運動場に掘ってあった防空壕に飛び込んで難を逃れました。

後から校舎を覗くと、校長室の歴代の校長先生の写真の横に弾の貫通した跡があったことを、いまでも鮮明に覚えています。その間、教科の授業はほとんどなく、敬礼の仕方、手榴

弾の投げ方、竹やりの使い方などの訓練が中心でした。

学校に集団でいると危険だとのことで、各地に分かれ公民館での分散教育が始まりました。地元の「出征兵士の家」や戦死者の「遺族の家」の田植え、甘藷^{かんしょ}植え、防空壕掘り、水害で崩壊した堤防作りに出かけました。

二十年八月十五日、天皇陛下の終戦のお言葉がラジオで流れ、日本は戦争に負けたのだと知りました。二学期が始まり全員、登校すると、古い教科書を墨で消したり破ったり。新たに新聞紙大の印刷物が配られ、はさみで切って教科書を作りました。

そのころは父の消息もわからず、収入は母の農業と女学校を出た姉が代用教員をしていただけでしたので、通学用のバス代とか学校への月謝、学用品の購入などを遠慮がちに頼んでいました。中学三年の時、担任の先生に事情を相談したところ、近く学校制度が新しくなるので、将来のことを考えて学校を続けるように勧められました。結局、三年生で学校には登校しなくなりました。

ある日、山で仕事をしていると、担任の先生がわざわざ山の上まで登って来て、「休学の手続きをしておいたから、来年度はぜひ登校するように」と言われ、教科書を置いて帰って

行かれました。新聞配達や道路工事などしてみました。貯金できずにいたところ、八代郡有佐町の瓦工場^{かわら}に行かないかと話があり結局、行くことに決めました。

親元を離れての生活は不安で、粘土をミキサーで練る仕事で指を切ったりしました。仕事がないときは、親方の一番下の赤ちゃんの守りをしたり、夜は先生に持つて来ていただいた教科書で勉強し、上の娘さんの勉強を教えたりしました。その体験から、小さい子どもはかわいいと思うや、人に教えることのうれしさを感じました。

翌年四月に学校に行くと、学制改革で同級生は高校二年生に進級しており、私は一年生に復学しました。同級生が、「よく帰ってきた」と喜んでくれたこと、先生方がアルバイトの紹介や奨学金の手続きなど、いろいろとご配慮くださったことに心から感謝しています。

高校三年生の進路決定時に、芦北郡では、「熊本大学の教育学部」に入学し、卒業後は郡内に五年間勤務する」条件で奨学金制度があることを知り、チャレンジしました。五年間の芦北郡勤務でも、校長先生をはじめ同僚も良い人ばかりでした。

父は戦後になっても十一年間、音信不通でした。新聞に抑留されていたシベリアからの引き揚げ者名簿が載っていたため、私は毎日、父の名前がないかと目を通していました。ある

日、最後の引き揚げ者に父の名前が載っているのを見つけ、そのころ勤務していた学校の校長先生にお願いして休暇を貰い、舞鶴港まで父を迎えに行きました。昭和三十一年七月六日、私が二十五歳の時でした。

舞鶴港には、かつて部下だった人たちも、「お帰りなさい」と父の名前を書いた幟を掲げて迎えに来てくれました。その父は九十一歳で亡くなるまで、私たち家族と人吉で過ごしました。私は教職退職後、福祉ボランティアをしています。二十五回以上続いている夏休みの小学五、六年生対象のボランティアスクール、中学生対象のボランティア体験教室、十五回を超えるボランティアワークキャンプを、福祉施設や保育園、人吉総合病院など九カ所の協力をいただいて開催し、子どもたちに人間愛の尊さを伝えています。

高齢者の方への接し方。どのように言葉をかけたらいいか。どういう形で自分気持ちを表したらいいか。子どもたちは一人ひとり真摯に考え、学んでいます。そして、帰り際の言葉は、「さようなら」ではなく、「来年また来ますから、お元気で」と、来年の再会を楽しみにして施設を後にします。自分の命はもちろん、他人の命も大切に子どもたちとなるよう、このボランティア活動が続けていきたいと思っています。

心を大切に人を大切にして生きよう

横川 克己

大正十三年生（願成寺町）

私は昭和十二年尋常高等東小学校高等科へ入学しましたが、勉強が嫌いだったこととお金欲しかったので中退し、長崎の三菱兵器製作所に入所しました。

仕事内容は魚雷を作ること、部品の歯車調整においては、百分の五ミリも狂ってもいけない緻密な仕事を受け持ちました。もともと勉強嫌いではありましたが、辛抱強く手先が器用だったので、頭のいい学校出の人より給料は良かったです。しかし、十八歳の時に結核にかかり三菱を辞めて人吉に帰り、二年間総合病院で治療することになりました。

太平洋戦争もいよいよ厳しくなってくると、身体に少しぐらい障がいがある人も入隊させられるようになり、私は結核が完治していたわけではなかったのですが、魚雷仕上げの腕をかわれたのか、昭和十九年十二月、陸軍少年隊へ入隊し、四国の松山に行くこととなりました。少年隊では、上官から打たれるのが仕事のようなものでした。

昭和二十年、私は山口に異動させられ、特攻隊の飛行機の脚の整備をするようになりました

た。しかし、そのころは飛行機もなく、いろいろな部品を寄せ集めて飛行機を整備し、送り出していました。

山口を飛び立った飛行機は鹿児島県の知覧を目指しました。二十機ほどの飛行機を見送りましたが、その中の十六歳の少年兵二人のことを今でも思い出すと涙が出てきます。彼らは一生懸命、純粹に国のため、親、兄弟のためと笑って飛び立っていました。私が最後に整備した飛行機に乗って行ったあの二人の少年とは話したこともありませんでしたが、今でもあの笑顔が心に残っています。生きて帰ってきたのか、亡くなったのかわかりませんが、飛び立った兵士たちの心を思うたびに、どういう気持ちだったのだろうかと考えます。

山口には韓国人が多く、その人たちとかまぼこ兵舎を造る工事をしていて、グラマン機による機銃攻撃が始まり、私たちは軒先に隠れ、とても怖い経験をしたことがあります。

八月十五日終戦を迎えましたが、兵舎には物資が残っており、上官は「みんな寄れ、タバコでも何でも持っていけ」と言っていました。

八月末、帰郷の途につきました。途中、山口、福岡では何かを燃やしていたのでしょうか、煙があちこち上っていました。軍事書類なのか兵舎なのか分かりません。引き揚げる際は「中



国人から狙われるから軍服は着ないように」と言われていました。後でデマだと分かりました。帰郷の途、いろんな人からもらったボロボロの服を着て帰ったので、母がびっくりしていました。今、私の人生を振り返ってみて思うことは、今まで困ったことがあると、誰からか助けてもらっていたことに気付きます。私には『不幸を与える人は、私を幸せにする人』という信条があります。そういう思いで生きているからでしょうか、何があっても幸せと思います。今の人は、自分を軽率に見ている人が多いようです。もっと自分の心を大切に、自分のことを真剣に心配してくれる人を大切にして生きていってほしいと思います。

一人暮らしの私を元氣にするためでしょうか、私の所に三歳のひ孫が每晚泊まりに来ます。それは、一緒に寝かせてもらいう幸せを感じる毎日でもあるのです。

様々な工夫をした戦時下の生活

吉澤 テル

大正十一年生（願成寺町）

私は大正十一年五月、一勝地三ヶ浦松谷に生まれました。小学校は那良口駅から一勝地小学校へ、女学校（現在の人吉一中）へは那良口駅から人吉駅まで汽車で通学しました。

昭和十七年四月三日、中根典雄と結婚。夫の母と同居し義母からは百姓仕事をみっちり教わりました。麦作りやカライモ作り、寒い中で子どもを背負ったの麦踏など、今でも思い出します。そのようなこともあって野菜には不自由しませんでした。

当時、芦原一帯では麻を栽培し、何軒もの農家が私の家に麻の木を持って来ていました。夏の暑い時に麻の木を蒸して皮をむき、それをお百姓さんが天日に干していました。当時は子どもが産まれた時、素直に育つように麻の産着を着せていました。

昭和十八年ぐらいまではまだ戦争の激しさはそう感じませんでした、やがて空襲警報が鳴り出すようになり、防空壕掘りが始まりました。わが家でも村人を雇って、木を切つてきて防空壕を作りました。

昭和十九年になると敵の艦載機が飛来し、夜でも空襲の際にすぐ家から外に出られるよう戸を開けて寝ていました。油を取るため、とぼし(松の根)掘りの割り当てがあり、頭上を敵機が舞う中、とぼしを蓑原まで担ぎ上げたこともあります。鬼木川沿いの田んぼには高射砲の陣地があり、グラマン(敵機)のウォンウォンと地響き音をたてて襲来する機影めがけて、下から発砲していました。

当時の暮らしで、次のようなことが私の印象に残っています。

【消火訓練】 焼夷弾が落ちた後の消火をするため、鬼木川の水をバケツに汲んで標的に水をかける訓練。

【モンペ作り】 持っている派手な着物を黒色に染めて、モンペを作る。

【配給】 食糧購入通帳を持って、米、カライモ、パン、アワ、麦、砂糖、塩などを買いに行く。主食はカライモに米粒がついている食べ物ぐらいだった。衣料品購入もキップが必要で、キッ

プがなくなったら何も買えなかった。だから体操ズボンなどは破れた部分を何度もミシンで繕ってはいていた。

【夫の思い出】 夫は昭和十七年から人吉東小学校に勤務していた。またグラライダーの指導者になる訓練を阿蘇の赤水や滋賀県大津まで受けに行ったこともあった。当時、人吉には育鷲号と中津留号の二機のグラライダーがあつて、航空少年隊の子どもらにその操縦を教えるためだった。訓練は人吉中にあつたグラライダーを分解し、生徒らと歩いて高原まで運び、そこで飛行訓練していた。

戦争は今でもゾツとする体験

吉 田 政 人

昭和八年生(鬼木町)

私が小学生のころ、兄(長男)秋男が十八歳で「自分が戦争に行かないと日本は負ける」と熊本十六部隊に志願入隊しました。学業成績が優秀な兄でしたが、母親は「次男(私)がいるから家の方は大丈夫」と、覚悟の上で兄を送り出したようです。しかし、昭和十九年、兄

の戦死の知らせを受けました。特攻に入隊した翌年のことでした。戦争が終わってから友人が遺骨を届けてくださいました。

戦争当時、我が家は農家だったためか、食べ物には不自由しませんでした。収穫物は何でも供出していたようです。そのころ、現在の西小学校のことを西国民学校と呼んでいました。戦時中は学校へ行かず、分散授業が地域ごとに行われていました。私の地区では近くの山口宅で行われており、西校から先生が来てくださっていました。戦争が和らいだ時は学校へ行くことができました。先生に会うと頭を下げる「礼」ではなく、「敬礼」をするように指導を受けました。また、教科の授業よりも運動場に集合して、耳と目を手でふさぎながら「伏せ」の訓練をしました。人吉では空襲はなく、米軍機よりの機銃掃射がほとんどでした。特に学校は兵隊さんが集まる所に見えたのか、よく機銃掃射をされました。鬼木町には高射砲台が何台もあり、木の陰から見ていたことがありましたが、敵機のB29を狙って撃つものの一つも当たっていませんでした。母親に抱かれてその様子を見た近所の赤ん坊は、ドーンという激しい音で耳が聞こえなくなってしまうそうです。その方は現在六十四、六十五歳になっておられます。八代で飛行機が一機落ちたと聞きましたが、鬼木町で撃ったものが当

たっていたのかどうかは分かりません。

相良村には海軍の飛行場があり、敵機が急降下して機銃掃射するのを大きな木の下から見ることがあります。その時、兵隊さんが数名と住民四名ぐらいが巻きぞえで亡くなっています。高原の元飛行場近くには名前を刻んだ石碑が今でもあります。

田んぼで作業していても、機銃掃射を受けたと聞きました。父が「空襲警報！警報！」と大声で知らせて回っていたこともありました。家の庭には防空壕が二か所掘ってあり、良い着物を入れたタンスも防空壕に入れてありました。学用品はなく買う品物もありませんでした。靴も新品ではなく、繕って使いました。戦時中は若い働き手がいなかったため、子どもも農家の田植えや稲刈りの手伝い、防空壕掘りをしていました。学校には大きな防空壕が作ってありました。終戦直後は、兵隊さんが家の玄関で敬礼して食べ物の物乞いをしていました。自分の家族や近所の人たちはみんな、リヤカーを引いて高原の飛行場へ兵隊さんの使った毛布や品物をもらいに行きました。物がなかったので、毛布一枚でも大事でした。

戦争は今思ってもゾツとするような体験がいっぱいでした。絶対に二度と戦争を繰り返さないでほしいです。

球磨川べりで機銃掃射に遭う

吉 村 惣四郎

昭和七年生（瓦屋町）

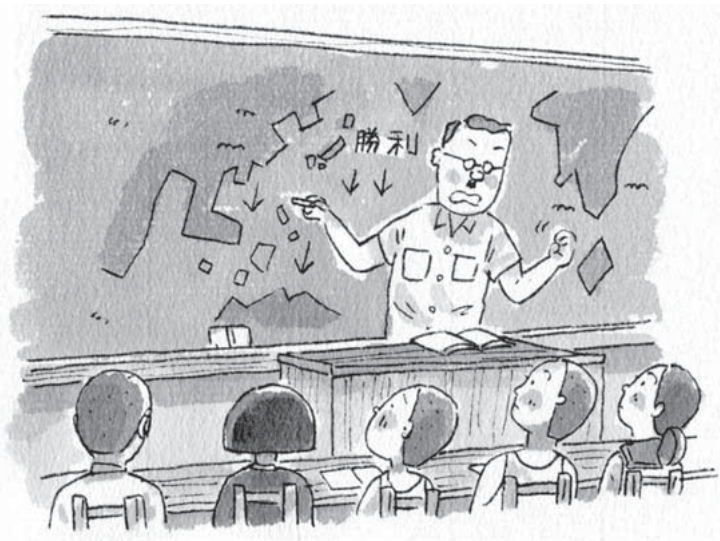
私は昭和十二年熊本から人吉に引っ越し、翌十三年人吉西小学校に入学しました。当時、父は熊本にいたところから呉服商を営んでいました。

昭和十六年に太平洋戦争が開戦となりました。戦況について、学校の先生からはいつも授業中に「日本はアメリカに勝っている」と聞かされていました。先生はその都度、シベリアから南方の島々までの地図を黒板に書いて、日本軍が有利に勝ち進んでいる状況を話してくれました。そして「この戦争はアメリカから仕かけられたもので、アメリカを日本に引き寄せるだけ引き寄せて、一発逆襲を狙う作戦である」という話を聞かされていました。ミッドウェー海戦の時も新聞もラジオも日本圧勝の情報だけで、私も周りの人たちすべての人が日本は勝つと信じさせられていました。先生が黒板に書かれていた地図は、今でも私の脳裏に焼き付いています。

私は小学校二年生の時から父のすすめで書を学んでいました。当時は洋紙にも不自由していましたが、和紙も手に入りにくい状況で山田川沿いで梶紙^{かじ}を漉^すいる人がいたので注文したりしました。

西小学校ではこのころ、入隊検査が行われており、私もその光景をよく目にしていました。若い男性や私の父ぐらいの年齢の人もいて、真っ裸になって犬のように四つんばいになっての身体検査が行われていました。そのころは軍隊に自ら志願して入隊する人もいました。ただ、上級学校に進学できる人は入隊しませんでした。

昭和十七年ごろから食べ物が不自由になってきました。そのためライモのツルも食用にしました。私はよく小麦粉をこねて蒸して食べま



した。砂糖もあんも入っていない団子でしたがおいしかったです。

球磨川の魚も大切な食料源で、友達とよく魚捕りなどして遊んでいましたが、その球磨川べりで昭和十九年三月十八日、アメリカのグラマン機による機銃掃射を受けました。米兵が首に巻いた白いマフラーが私の頭のすぐ上で見えるくらいに低空飛行をしながら、私たちを攻撃してきました。川原に這いつくばり難を逃れましたが、怖さのあまり、腰が抜けてしばらくは歩けませんでした。さらに五月十四日にも機銃掃射があったと覚えています。

昭和十九年、私は人吉中学校（現人吉高校）に入学しました。このころ、授業をきちんと受けた記憶はありません。英語の授業もなく、授業の代わりに作業をすることが多かったようです。天気の良い日は防空壕掘りで、高原や永野（人吉）辺りまで出かけました。この作業で同級生二人が生き埋めになって死んでしまったことがありました。また農家での奉仕作業もありました。稲刈りを手伝っていて左手人差指に大けがをして、病院で手当てをしてもらいましたが、今でも少し曲がったままになっています。雨天の日は薩摩瀬の高千穂神社に集まって草履^{ぞうり}作りをしました。兄は昭和十九年に二回目の出征をしました。母は毎日仏前に陰膳を供え、青井神社に参拝し無事をお祈りしていました。

昭和二十年八月十五日、やっと戦争も終わりに中学校卒業前には書道も頑張り、生徒会活動も熱心にやって、楽しく学業を終えることができました。

今でも南の空を見上げると南の方からB29機がこちらに向かって飛行してくるのが目に浮かびます。戦争は絶対にしてはならないと思います。

戦争体験と平和への想い

「中学生・一般版」

－ 戦争体験と平和への想い緊急調査事業 －

発行日 平成23年3月31日

編集発行 人吉市福祉課

印刷製本 (株)協和印刷